



TITLE:

第2章 京都大学病院構内AH12区の 発掘調査

AUTHOR(S):

千葉, 豊; 長尾, 玲

CITATION:

千葉, 豊 ...[et al]. 第2章 京都大学病院構内AH12区の発掘調査. 京都大学
構内遺跡調査研究年報 2014, 2011・2012: 3-68

ISSUE DATE:

2014-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/226476>

RIGHT:

第2章 京都大学病院構内A H12区の発掘調査

千葉 豊 長尾 玲

1 調査の概要

本調査区は京都大学医学部附属病院の西構内、鴨川まで直線距離にして150mの地点に位置し、聖護院川原町遺跡に含まれる（図版1-379、図1）。ここに、メディカルイノベーションセンターの新営が計画されたため、周辺地域の調査成果を勘案して、発掘調査を実施した。センター新営にともない、共同溝の新営も計画されたため、その箇所についてもあわせて発掘調査を実施した。調査は、2011年12月5日に開始し、2012年2月28日に終了した。調査面積は1700㎡である。

今回の調査区の南に隣接する病院構内A G13区の発掘調査〔千葉・富井2011〕では、近世～近代の井戸・野壺・溝・土坑などを検出し、近世を主体とした多量の土器・陶磁器類が出土した（図版1-349）。今回の調査でも、鴨川にほど近いこの地点の土地利用の変遷を明らかにすることをおもな課題として、調査をおこなった。

調査の結果、調査区北半は既存の建物によって、かなりの部分が破壊されていたが、近世の水路・道路・井戸・溝・小穴などを検出し、近世の土器・陶磁器類を主体として、整理箱79箱を数える遺物が出土した。特筆すべき成果として、東西方向に伸びる水路は、18世紀後半～19世紀初頭に作製された『山城国吉田村古図』に描かれている人工の水路であり、東西に伸びる道路は、聖護院村と吉田村の村境となる道路であることが判明し、この地周辺における近世の土地利用に関する重要な情報を得ることができた。

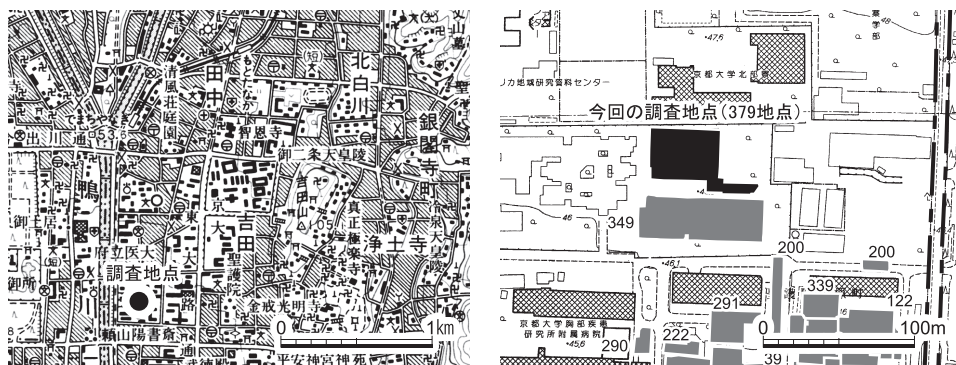


図1 調査区の位置 縮尺 左：1/5万 右：1/5000

2 層 位

基本的な層位は、上から表土・整地土（第1層）、黒褐色土（第2層）、灰褐色土（第3層）、赤褐色土（第4層）、淡褐色土（第5層）、淡褐色砂質土（第6層）、砂礫（第7層）となる（図2）。南に隣接するA G13区と同様、中世までは高野川系流路のうちにあって不安定な状態にあった場所から、江戸時代になって、離水・安定化した状況を再度確認したが、江戸時代の堆積物を細かく分層できた結果、年代の変遷をより詳細にとらえることができた。

第2層の黒褐色土は、層厚20～40cm前後で、攪乱で失われている部分を除いて調査区全域に広がる。江戸後期から明治時代の遺物を包含するが、両者の違いを堆積物で区分することはできなかった。第3層の灰褐色土は、層厚20cm前後の耕作土。南東拡張区で検出した東西溝SD7より、南側には認められなかったが、これは南に隣接するA G13区でも見つかっていないことと整合的である。18世紀後半から19世紀前半の遺物を包含する。第4層の赤褐色土は、調査区中央で部分的に認められた。第3層同様に、18世紀後半から19世紀前半の遺物を包含する。第5層の淡褐色土は、層厚10～20cm前後。江戸前期～中期（17世紀～18世紀前半）の遺物を包含している。第6層の淡褐色砂質土は、第5層と第7層の間の漸移層である。

第7層の砂礫は、この地一帯の基盤となっている高野川系流路による自然堆積物である。砂礫中からは、摩滅の著しい中世後半の遺物が出土しており、砂礫堆積年代の一端を知る資料となる。なお、砂礫中で北東から南西にかけて伸びる黒灰色の泥炭を埋土とする溝状の筋が何本か見出されたが、これらは砂礫上面の凹部を埋めた自然堆積と判断した。

3 遺 構

出土遺物には中世以前の遺物も含まれ、第7層の砂礫中からは中世後半の遺物も出土しているが、こうした時期の遺構は見つかっていない。

ここでは、近世以降の遺構を3時期に分けて記述する。第Ⅰ期は、おもに淡褐色土を埋土とする遺構で、淡褐色土掘削中、あるいは砂礫上面で検出された遺構である。出土遺物より、包含層の形成年代は17世紀半ばから18世紀前半にあたるが、それよりやや古い遺構も含む。第Ⅱ期は、おもに灰褐色土およびその下部で部分的に見つかった赤褐色土を埋土とする遺構で、赤褐色土及び淡褐色土上面で検出された遺構である。時期は18世紀後半か

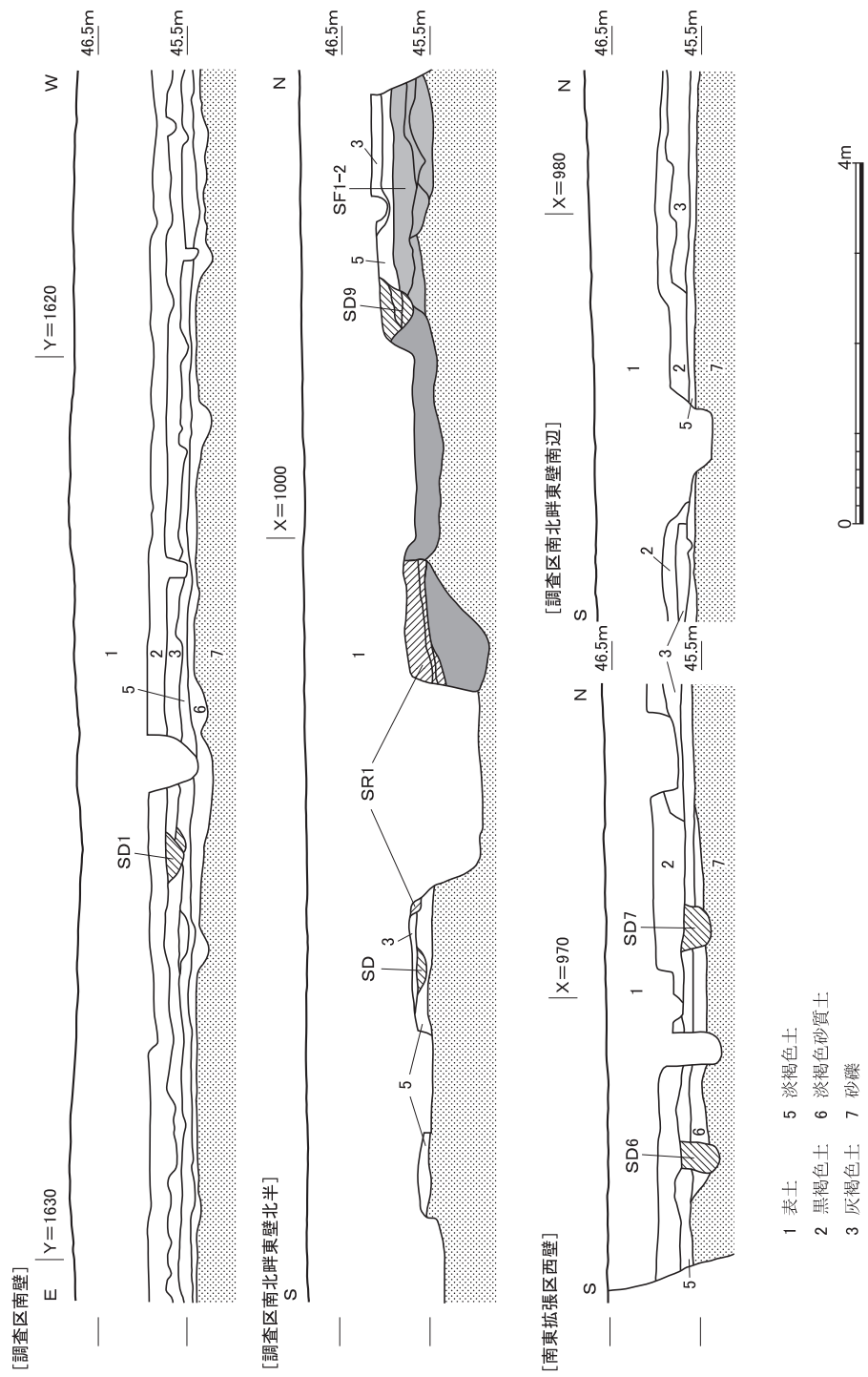


図2 層位 縮尺1/80

ら19世紀前半である。第Ⅲ期は、おもに黒褐色土を埋土とする遺構で黒褐色土掘削中、あるいは灰褐色土及び淡褐色土上面で検出された遺構である。このうち19世紀前半から幕末の時期の遺構を古段階とし、明治期以降の遺構を新段階として解説する。

(1) 第Ⅰ期の遺構（図版4～7，図3・4）

道路SF1-2 調査区北東で淡褐色土掘削後に検出した道路状遺構（図版4-2）。出土遺物より1620年～1650年頃の遺構と推定される。検出面の高さは45.8mである。黒褐色土掘削後に調査区北西で検出されたSF1-1よりもやや北にずれた東西方向に続く拳大前後の礫混じりの遺構であるが、それほど面は堅くなく、路面でなく路盤の可能性もある。礫混じりの土の上面で、淡褐色土は北に向かって10cm前後の段差で直線状に落ちており、この部分が道路の北端であった可能性がある。

1回目として掘削した礫混じり土の上部は、灰色を帯びた埋土であり、出土遺物は1650年に近い。その下にやや明るい茶色を帯びた砂質土からなる部分と礫からなる部分があり、礫からなる部分を2回目として掘削した。この遺物は全体的に1回目よりも古く、1620年に近い。礫を取り除くと、東北東から西南西にかけて幅50cm前後の筋状の凹みは何本か検出された。自然の流れにより生じた凹みを路盤作成時に礫で埋めた可能性が考えられる。

落込SE12 SF1-2の2回目の掘削ののち、礫の下で検出した。遺物を殆ど含まない円形の落ち込みである。木杵製の野壺、あるいは上部の削平された井戸底などの可能性があるが、性格不明である。検出面の高さは45.4m、底の高さは45.1mである。

道路SF2 調査区北西辺で、南北に走る淡褐色土の東への落ち際に淡褐色土掘削中に検出した集石（図版4-3）。SF1と直交する方向に伸びており、南北に走る路面の可能性が高い。調査区北壁際で幅2.5mをはかる。検出面の高さは45.8m。出土遺物がほとんどなく明確なことは言えないが、埋土はSF1-2より、やや新しい遺物を含んでいる。

井戸SE8・9 調査区南西の砂礫上面で検出された石組の井戸。両者とも、遺物をほとんど含んでいない。SE8は円形の掘形をもち、高さ45.3mの検出面近くで石組を検出した（図版7-3）。長軸10数cm～20数cm程度の川原石を並べた石組の周りに小粒の礫を詰めている。石組の下に水溜は見られず、すぐに井戸底に到達した。埋土からは染付が出土した。井戸底の高さは44.1mである。

SE9も円形の掘形をもつが、SE8より小ぶりで、長軸10数cm～20数cm程度の川原石を並べた石組と掘形が接近しており石組は数段しか残っていない（図版7-4）。石組検出面とはほぼ同じ検出面の高さは45.5m、井戸底の高さは44.4mである。

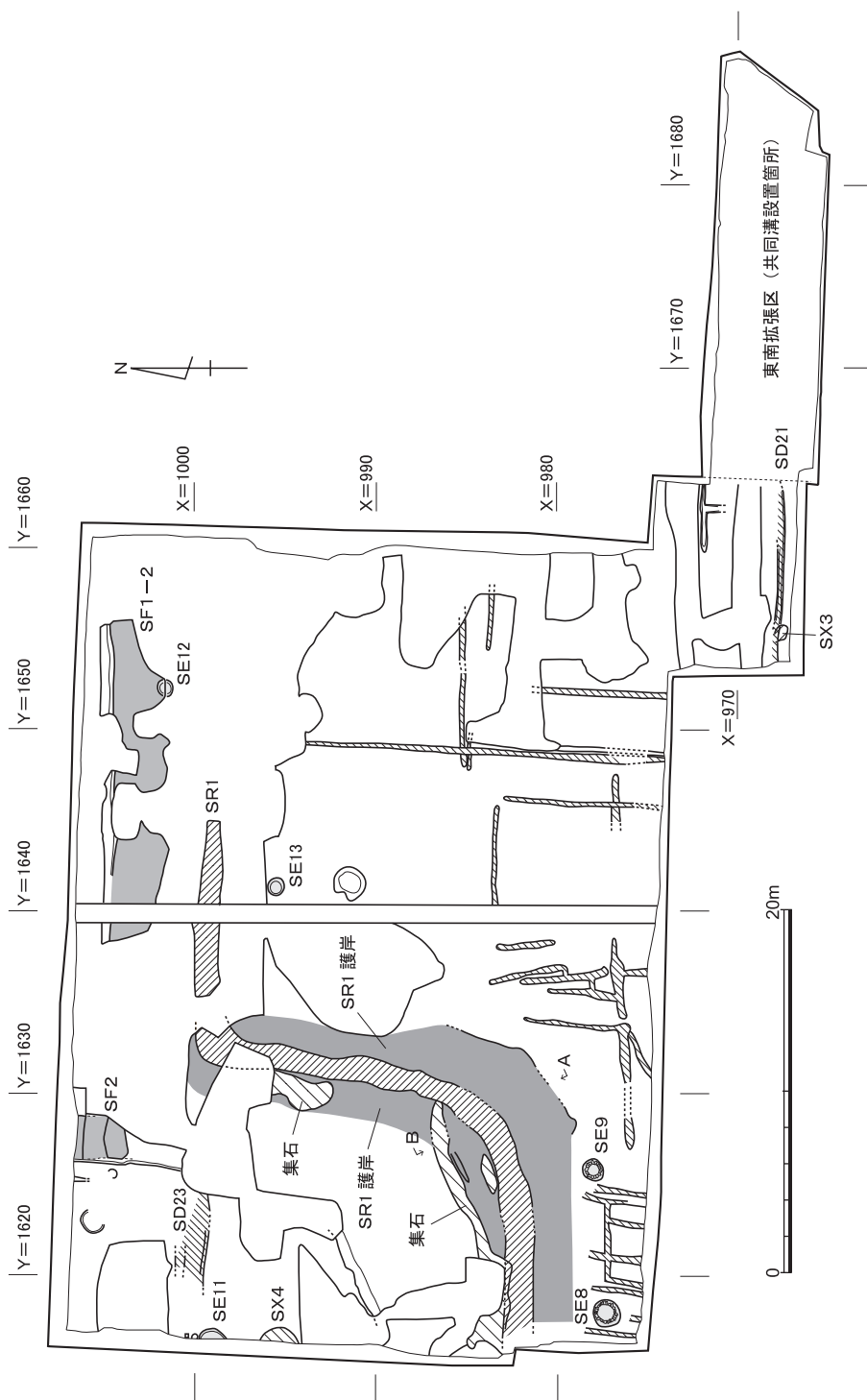


図3 第I期の遺構 縮尺1/400

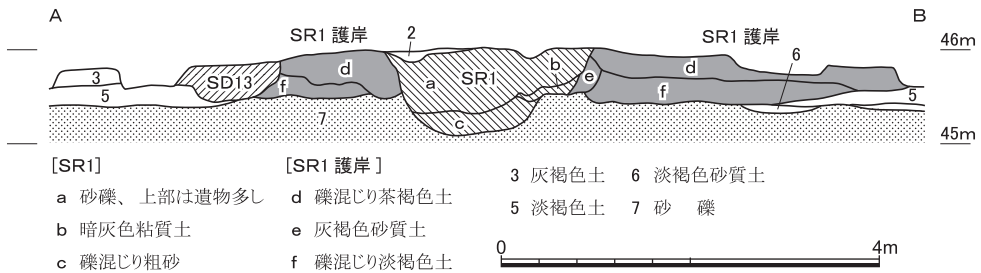


図4 水路SR1の層位 縮尺1/80

水路SR1 調査区北東から西に流れ、調査区中央北西付近で直角に南に曲がり、さらに南西にカーブしながら向きを変え、調査区西側へと流れ出る人工の水路である（図版5・6）

北東部分は攪乱で残っていないが、直角に曲がって南に向きを変える部分までは18世紀後葉～19世紀初頭に作成された『山城国吉田村古図』（以下、『吉田村古図』と略記）に記載があり、古図にある水路と見て間違いない。この水路の両側には水路構築のために盛土がなされており、その盛土の最初期の構築年代を知る手がかりが盛土の下部にある集石である。SR1の南北方向部分西側の盛土下部集石で、まとまった遺物が出土した。その年代が1650～1680年ごろであることから、SR1の構築年代をこれに近い時期と理解する。調査区南西部分のSR1北側の盛土下部集石は、遺物を少ししか含まないが、集石内の埋土と集石除去後に面的に広がる包含層の埋土は共に同質なシルト質の淡褐色土であり、淡褐色土の埋積している時期にSR1が構築されたと判断することが層位的に見ても妥当である（図4）。SR1の南西部では砂礫上面でもこれに沿ってカーブする淡褐色土の落ちが検出されており、淡褐色土の埋積時期にSR1が存在したことを裏付けている。

井戸SE13 調査区北東のSR1南盛土除去後、砂礫上面で検出した円形の落ち込み。遺物をほとんど含まない。埋土は灰色の砂質土で、礫混じりの盛土とは明らかに質が異なる。検出面の高さは45.5m、底の高さは44.6mである。石組や木枠などは検出できなかったが、かなり深いことから、井戸の底部の可能性が高く、盛土は井戸を壊して構築されていると思われる。

遺物溜SX4 調査区北西の西壁ぎわで検出した遺物の集中部で、掘形不明（図版7-6）。遺物の広がりには調査区外へと続いている。土師器皿（17世紀末～18世紀初頭）などの遺物を多く検出した。検出面の高さは45.6m、掘削後の砂礫上面での高さは45.4m。

野壺SE11 SX4の北側の砂礫上面で、西壁にかかる円形落ち込み。西側は調査区

外へと続く。検出面の高さは45.4m、底の高さは45.3m。S F 1の南にあり、木製野壺の可能性はある。遺物が少なく時期ははっきりしないが、埋土は淡褐色土に近い。

集石 S X 3 淡褐色土掘削中に南東拡張区南西隅で検出。遺物は少ない。検出面の高さは45.8m。

溝 S D 21 S X 3除去後に淡褐色土を掘削し、砂礫上面で検出した東西方向の溝。遺物は少ない。検出面の高さは45.6m、底の高さは45.5m、全体的に深さ10数cmであり、幅は30～40cm。

時間的な制約で淡褐色土を掘りきれなかった調査区北西部、およびS R 1盛土の下、南東拡張区東部を除く広範囲におよぶ砂礫上面で、S D 21と同じような東西方向の溝と、それと交わる南北方向の溝が検出されている。深さは数cm～10数cm位である。これらは耕作に伴う溝と推定されるが、S R 1構築前に作られたものか、それ以後かは不明である。

溝 S D 23 調査区北西のS F 1－1掘削後、砂礫上面で検出した（図版7－5）。東西方向にはしり、人工的な溝か自然流路かはっきりしない。南肩はしっかり落ちているが、北肩はなだらかに上がる。白色細砂と灰色シルトの互層で埋積しており、水が流れた痕跡がある。遺物をほとんど含まない。断ち割り部分で幅約160cm。検出面の高さは45.6m、底の高さは45.0mである。

（2）第Ⅱ期の遺構（図版5・7、図5・6）

野 壺 この時期にあたるS F 1の遺構は検出されていないが、調査区北西隅で東西道路の北側に沿う形で円形の落ち込みS E 4・5・6・10が検出されている。これから判断して、この時期にも道路が存続していたと推定できる。

S E 4・5・6・10の埋土は、いずれも灰褐色土である。上部は攪乱で削平されており、検出面は砂礫上面である。検出面の高さは、それぞれ45.6m、45.6m、45.7m、45.5mをはかり、底面の高さはそれぞれ45.3m、45.5m、45.4m、45.4mである。木製野壺と推定するが、いずれも遺物はほとんど出土していない。

溝 S D 22 上記した野壺の北側、淡褐色土上面で検出した（図版7－2）。南北方向に伸び、幅20cm前後、灰褐色土を埋土とする。検出面の高さは46.0m、全体の深さは10cm前後である。

井戸 S E 3 調査区西半の淡褐色土上面で検出。円形の石組井戸である。埋土は灰褐色土である。円形落ち込み検出面の高さは45.7mであり、長軸数cm～10数cm位の石を並べた石組検出面の高さは45.6m。円形落ち込み検出面から石組検出面付近まで遺物を多く含



図5 第Ⅱ期の遺構 縮尺1/400

遺構

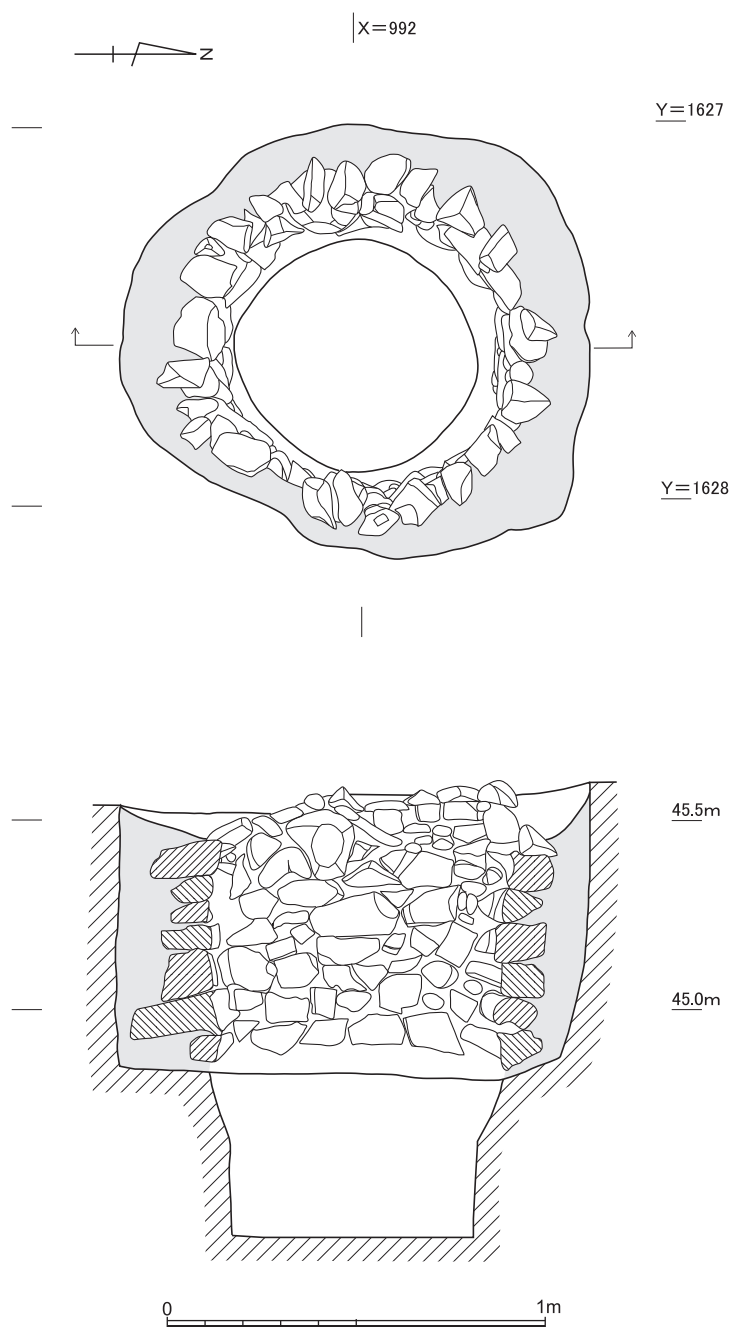


図6 井戸SE3 縮尺1/20

んでおり、井戸廃絶後に廃棄土坑として利用されている。ここから出土した遺物は、18世紀半ば以降である。石組の下で灰色の砂質土を埋土とする円形の水溜を検出し、これを掘り進めると堅い砂礫層に到達したが、木杵は見られなかった。水溜の底の高さは44.3m。

井戸S E 2 調査区北東の赤褐色土上面で検出した円形落ち込み（図版7-1）。埋土は灰褐色土、遺物の年代は19世紀である。検出面の高さは45.8mであり、検出面の上に堆積していた灰褐色土中に、白色の細砂を含む範囲がある。北半は攪乱で壊れているが、底の方は残存している。灰褐色土を掘削していくと、高さ45.4mで、南東隅と思われる方形の木杵の一部が検出された。ただ、他の部分は破壊されてほとんど残存しておらず、木杵の位置が円形落ち込みの中心から北へかなりずれていることから考えて、これが元来の位置を保っているかは疑問である。もっとも、木杵検出面の円形落ち込み中心部で青灰色の粘質土の広がりを検出したことから、水溜のような施設に関わる可能性はある。底付近の南西隅には配石の可能性もある集石が見いだされたが、砂礫層内であり、自然のものか判別がつかなかった。井戸底の高さは44.8mである。

溝S D18・19・20 S D18は調査区東半の真南北に近い方向のしっかりした溝である。南の方では、黒褐色土掘削後、灰褐色土上面でもある程度輪郭が見えていたがぼやけており、はっきり検出できたのは淡褐色土上面である。埋土は灰褐色土で、幅は北側で50～70cmである。北半では溝は二段落ちになり、下部の幅は30～40cmをはかるが、南壁際では一段に収束している。溝の東側にはほぼ4m間隔で東西30～40cm、南北20cmの長方形ピットが検出されており、溝に伴う可能性もある。北端での検出面の高さ45.7m、二段落ち際の高さ45.6m、底面の高さ45.5m、南端検出面の高さ45.7m、底の高さ45.4mである。この溝は、A G13区〔千葉・富井2011〕の南北溝S D3を延長した位置にある。出土遺物の年代は19世紀である。

S D19・20は、S D18の東に位置する、深さ数cmの浅い南北溝。いずれも淡褐色土上面で検出し、灰褐色土を埋土とする。検出面の高さは、ともに45.7m、底の高さ45.6m。深さ数cmであり、耕作に伴う溝と判断する。前者は幅10～30cmで攪乱を隔てて南端が細くなって収束する。後者は幅30cm前後で、溝底で円形の小ピットを検出した。

土坑S K69 S D18の上面で検出した礫混じりの方形土坑である。埋土は灰褐色土で、検出面の高さ45.7m、底の高さ45.4mである。

溝S D13 水路S R1は、I期に引き続きこの時期にも機能しており、S R1の盛土の南側及び東側ではこれに沿う形で幾筋かの溝が検出された。これらのうち、もっともし

っかりした溝は、調査区北東から南西にかけて、攪乱を隔ててSR1盛土際、赤褐色土上面で検出したSD13である。SR1から南側の畑地に水を引き込むための溝であろう。泥状の灰褐色土を埋土とする溝で、SR1側は盛土が溝の肩になっている。北東部での検出面の高さ45.8mで、その部分での底の高さ45.7m。南西部では検出面にあたるSR1盛土上の高さ46.0m、底の高さ45.4mである。幅は北東部で50～60cm、南西部で100～150cmである。出土遺物の年代は18世紀～19世紀。

溝SD11・12・14・15・17 いずれも調査区北東部で検出された耕作関連の溝。SD11・12はSD13に平行に伸びる東西溝。赤褐色土上面で検出。前者は幅20～40cm、後者は幅40～60cmであり、後者はSE2に切られる。両者とも埋土は灰褐色土で、検出面の高さ45.8m、深さは数cmである。

SD15は、SD11・12を掘削したのち、淡褐色土上面で検出。SD11・12とほぼ同じ位置をはしる東西溝である。幅30～50cm、検出面の高さ45.7m、深さは数cmで、埋土は赤褐色土である。SD14は、SD15の南側に位置し、L字状に折れ曲がってSD15に結合する。西半は淡褐色土上面、東半は赤褐色土上面で検出した。幅は30～40cm、検出面の高さは45.7mである。

SD17は、調査区南西、SD13の南東側の淡褐色土上面で検出した。この溝は南端で収束し、SD13に沿ってカーブしながら途中で二股に分かれて攪乱にぶつかる。二股の西側をSD17a、東側をSD17bとし、前者は途中で途切れてまた現れる。埋土は灰褐色土で、幅は10～40cm、検出面の高さ45.6m、深さ数cmの浅い溝である。溝の上に灰褐色土を埋土とする方形ピットがある。

溝SD16 SD13の南西収束部の南にある、真南北よりも軸が少し北北東に傾く南北方向の浅い溝である。検出面は淡褐色土上面で高さは45.6m、深さ数cmであり、幅は50～60cm、灰褐色土を埋土とするが、多少砂が混じり、水が流れた痕跡が認められる。ただし、検出面ではSR1ともSD13とも結合していない。この溝は、その位置から判断して、AG13区〔千葉・富井2011〕のSD1とつながる可能性がある。

方形ピット SR1の南側及び東側では、淡褐色土上面で耕作に伴うと思われる、一辺20cm前後の多くの方形ピットを検出した。これらのうちいくつかは東西方向に等間隔に並ぶが、その並びは真東西よりも軸がやや東南東に傾く。これは、調査区北東の東西方向の溝群と同じ傾きである。これらの溝群の南の淡褐色土上面では小さい不定形の凹みを多数検出したが、いずれも底は浅く数cmの深さであり、植栽などの痕跡である可能性もある。

る。一方、SR1の北側及び西側の淡褐色土上面では灰褐色土を埋土とするピットはほとんど見つからなかった。

(3) 第Ⅲ期（古段階）の遺構（図版3～7，図7）

道路SF1-1 調査区北西で、黒褐色土掘削後に検出した礫混じりの堅い面である（図版4-1）。『吉田村古図』に描かれた水路と、旧吉田村・聖護院村境の道路の位置関係から、これを路面の一部と推定した。この面は南に向かって下がり、路面の南端付近と思われる。検出面の高さは45.9mであり、南に下がった段差際の高さは45.8mである。

水路SR1 黒褐色土掘削後に調査区南西で上面を検出した人工水路（図版5・6）。Ⅰ期からⅢ期（古段階）まで、ほぼ同じ位置で機能していた。調査区南西部の水路内砂礫検出面の高さは46.1m、幅は110～180cmである。水路中央部の砂礫検出面は、やや盛り上がっているように観察された。水路の南北部分および、その東側の直角に曲がった東西部分は『吉田村古図』では水色に塗られており、人工水路と判明したが、これらの部分は攪乱により上部を削平されていて下部のみしか残存していない。

埋土には、高野川系と白川系の砂礫を含んでいる。上部は遺物を多く含み、淘汰の悪い土砂からなることから、洪水でいっきに埋まった可能性が高い。中部より下層は、比較的均質な黄色味を帯びた粗砂を埋土とする。磨滅した遺物が多く、長年川底で侵食された遺物が川砂とともに水路を流れて埋まった可能性が考えられる。埋土には18世紀の遺物も含んでいるが、19世紀中頃のを多量に含んでいる。少なくとも埋土の上部は、幕末に頻発した鴨川の洪水に関係して埋まり〔徳重1936，中島1983，前中・笹嶋2002〕，これにより水路が廃絶された可能性が高いと考える。

埋土下部には灰色のシルトや黒灰色の泥が堆積し、場所によってはさらにその下に砂が堆積し遺物を含んでいる。これらの堆積は、Ⅲ期以前の水路使用時の堆積と考えられる。東から延びてきたSR1が東西方向から南北方向に直角に曲がる手前部分は、挟まれたように深くなっており、下層には黒灰色泥質土がとくに厚く堆積していた。水流方向の急激な変化が影響を与えている可能性がある。この直角に曲がる屈曲部ではSR1の幅は攪乱下の上面でも230cmと、他の部分よりも広く作られている。SR1屈曲部の南東及び北東には、東西方向に楕円形の拳2個大より大きめの礫が筋状にぎっしり詰められており、また、その南西部にも類似の礫が詰められていた。当初これを攪乱の一部と考えて重機で除去したが、これらは人工水路の水流を直角に曲げて流すために、屈曲部周辺に人為的に詰め込んで、水路の壁を補強したものである可能性が高い。

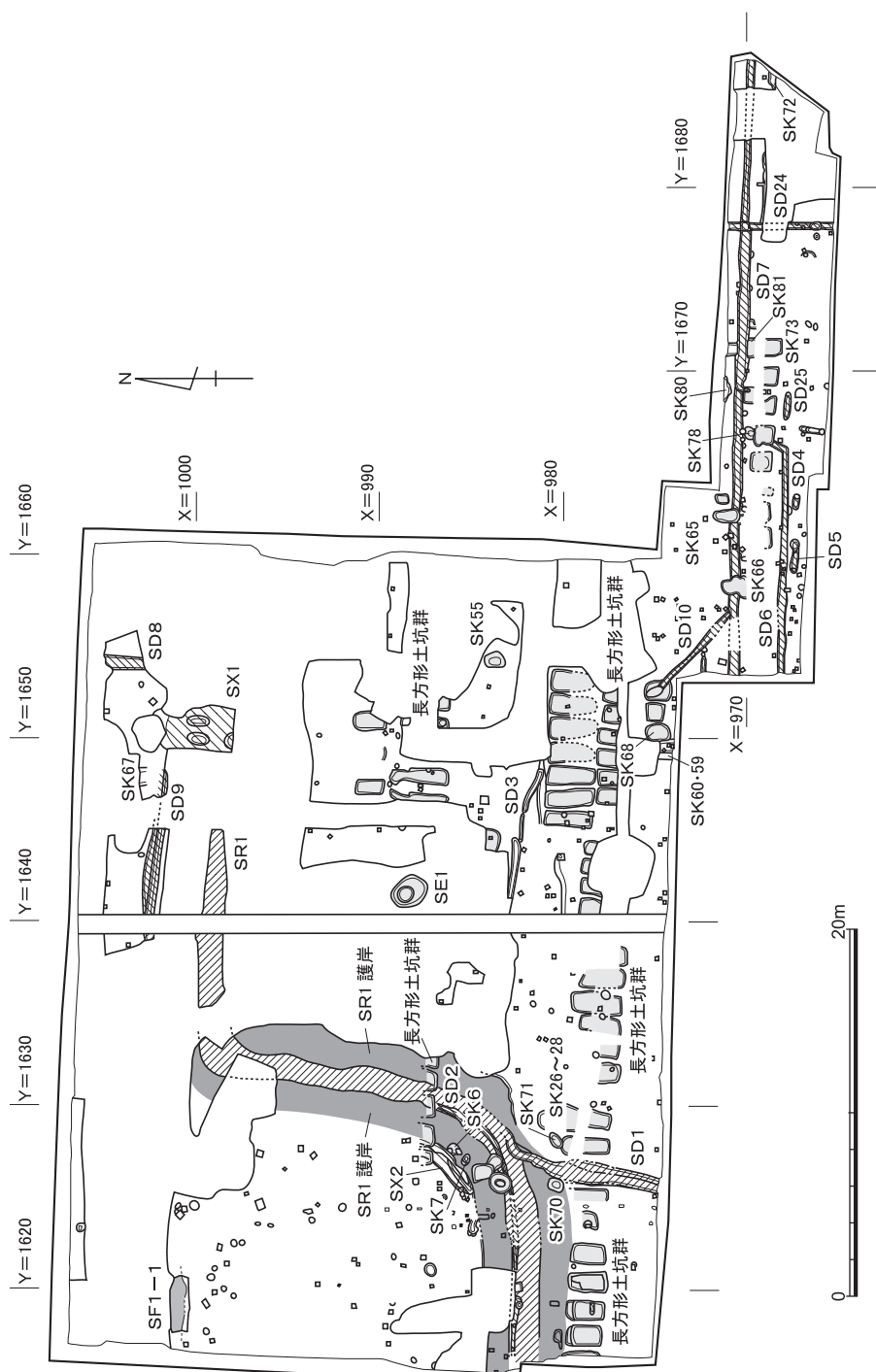


図7 第Ⅲ期の遺構 縮尺1/400

この水路の両側には人工の盛土があり、調査区南西ではその上部は小礫を含む褐色土であるのに対して、下部はシルト質の淡褐色土に近い土である。盛土の最初の構築はⅠ期であるが、その後水路廃絶までの間に改修された可能性を考える必要があろう。

土坑S K 70 南西部の南盛土上面で検出された。検出面の高さ45.8m、底の高さ45.6mであり、埋土は黒褐色土、出土遺物は幕末である。

段 差 調査区南西部の東盛土南東側では、灰褐色土上面で南東に落ちる数cm～十数cmの段差を検出した。北西側でも淡褐色土上面で同様の段差を検出したが、段差際のカーブする部分には淡褐色土を掘り込んで石列が配列されている。これをS X 2とした（図版6－1）。段差際の石列は大きめの石を配し、その北西により細かい石を配している。盛土の土止めの可能性がある。石列検出面の高さは45.9mであり、その部分の段差上の高さは46.0m、段差下の高さは45.8mである。S X 2の石列及び石列下黒褐色土除去後の底の高さは45.7mである。出土遺物は19世紀である。

溝S D 1 南西部のS R 1の南で検出（図版3－2）。真南北よりも軸がやや北北東にずれ、Ⅱ期の溝S D 16とほぼ同様な位置にある南北溝。S D 1上層は、黒色土掘削中に検出した白色の砂を埋土とし、その北端はS R 1と結合する。S R 1内でもその延長が見られ、S R 1に沿って北東に曲がって消滅するが、その埋土は砂ではなく黒褐色土である。上層の幅は40～100cm、北端で検出面の高さ45.9m、底はその部分で45.7mである。南端で検出面の高さは45.7m、底の高さは45.6m。下層は、灰褐色土上面で検出し、部分的に砂混じりの黒褐色土を埋土とする。幅は80～130cm。下層の検出面の高さは、45.7m、底は45.5mである。出土遺物から判断して、S R 1と同時に廃絶した可能性が高い。この溝は位置・幅などから推定して、A G 13区〔千葉・富井2011〕のS D 1につながるものであろう。

溝S D 2 調査区南西のS R 1上部砂礫の北端近くでこれを切って細長く走る、黄灰色のシルトを埋土とする幅20cm前後の溝。検出面の高さは46.1m、その部分の底の高さは46.0m、深さ10cm前後である。S R 1の廃絶後、幕末に練兵場ができるまでの間に細長く流れて堆積したものと推定される。

土坑S X 1 調査区北東で攪乱除去中に見出された。多量の小礫を含む黒褐色土が埋土で、整理箱13箱を数える多量の遺物が出土した。底部近くになると小礫は少なくなり、礫混じりの茶褐色シルトを埋土とする凹みがみられた。北側の灰褐色土上面で肩の一部が検出された。

『吉田村古図』では、この部分は水路SR1の延長部分にあたっており、本来ならSR1が検出できたはずであるが、この部分ではSR1の痕跡を見つけることはできなかった。一方、出土遺物は幕末期のもので、煉瓦など明らかに明治期に下る遺物も含まれていなかった。これらの事実から、SX1はSR1廃絶後、短期間のうちに形成された廃棄土坑と推測される。検出面の高さは46.0m、小礫集中部下の高さ45.3m、平坦部の底の高さ45.2m、最低部の高さ45.0mである。

溝SD9 調査区北東部、SR1の北側にあり、SR1と平行な東西溝である。東西軸は真東西よりも少し東南東に傾く。『吉田村古図』との比較から、SR1から分枝して流れてきた、村境の道路の北側側溝にあたる旧吉田村内の水路の一部と推定される。灰褐色土上面で検出し、埋土は白色細砂と灰色シルトを互層状に含んでいる。検出面の高さは46.1m、底の高さは45.7mである。全体に深さ30数cm～40数cmである。南肩は攪乱で切られているので、幅は不明。出土遺物は19世紀前半である。

溝SD8 旧吉田村内に位置し、灰褐色土上面で検出した黒褐色土を埋土とする南北溝。検出面の高さは46.2m、その部分の底の高さは46.0mであり、全体的に深さ10cm前後である。SR1南側のⅡ期に属する南北溝SD18のほぼ延長上にある。出土遺物は19世紀前半である。

溝SK67 北側を攪乱に切られ、南側をSD9に切られた灰褐色土上面検出の遺構で、黒褐色土を埋土とする。溝か土坑か不明であるが、検出面の高さは46.2m、底の高さは46.0mであり、出土遺物は幕末である。

溝SD3 調査区南東の灰褐色土上面で検出した所々途切れる東西方向の溝。軸は真東西よりもやや東南東に傾き、東端はやや南に曲がる。埋土は黒褐色土で、検出面の高さは45.9m、その部分の底は45.8mである。幅10～40cm、全体に深さ10cm前後の溝である。耕作に伴う溝と思われる。

溝SD4・5 南東拡張区の南壁際近くの淡褐色土上面で検出した東西溝で、黒褐色土を埋土とする。いずれも浅いが、部分的にピット状に深くなる所がある。いずれも検出面の高さは45.7mであり、深さは数cmであるが、ピットの底の高さは45.4mである。この溝の南の灰褐色土上面で黒褐色土の段差が検出された。

溝SD6・7 いずれも南東拡張区で検出した東西溝。SD6は淡褐色土上面検出。断面は逆台形を呈する。検出面の高さは45.7m、その部分の底の高さは45.4m。幅30～40cm、検出面からの深さ20数cm～40数cm。砂混じりの黒褐色土を埋土とする。検出時には砂

が見える部分と黒褐色土が見える部分があったが、上面で見た砂の下にも黒褐色土が入り込んでおり、全体として黒褐色土を埋土とする溝と判断できた。出土遺物は幕末である。溝が埋まったのち、上にいくつかの方形ピットが掘られている。この溝は、東端が北東へ斜めに曲がり、方形土坑にぶつかって収束している。また、隣接した淡褐色土を埋土とする東西溝SD21を切っている。

SD7は、南東拡張区を東西に伸び、東端・西端ともに調査区外へと続く。断面は逆台形を呈する。東端検出面の高さは45.8m、その部分の底の高さは45.6m、西端検出面の高さは45.6m、その部分の底の高さは45.4mである。全体的に深さは20数cm～40数cm、幅30～50cm位である。出土遺物は幕末である。

SD6・7は、しっかりした溝であることから、土地区画に伴う溝の可能性はある。

土坑SK64～66 SD7上面では方形ピットのほか、礫混じりの楕円形土坑SK65と不定形土坑SK66が検出された。双方とも検出面の高さは45.8m、底の高さはそれぞれ45.7m、45.6mである。SK65の東の小礫混じりの土坑SK64は検出面45.8m、底の高さ45.6mである。

溝SD24 SD7と直交する淡褐色土上面検出の南北溝。直交部分はピット状に少し深くなる。埋土は黒褐色土か灰褐色土か判断が難しいが、SD7との切り合いが見えなかったことから判断すると黒褐色土と考えた方がよい。検出面の高さは45.8m、その部分の底の高さは45.7mであり、全体的に深さ10cm前後、幅は30～40cm位である。SD7との交点の検出面の高さは45.8m、底の高さは45.5mである。この溝は、位置的にAG13区〔千葉・富井2011〕のSD14の延長である可能性が高い。

溝SD25 南東拡張区、SD6の東にある溝状の東西の浅い落ちである。検出面の高さ45.8m、深さ数cm、幅20～30cmであり、埋土は灰褐色土あるいは黒褐色土である。

溝SD10 調査区南東の、北西から南東に向けて真東西よりも45度位軸が傾いて伸びる溝である。黒褐色土を埋土とし、検出面の高さは45.9m、その部分の底の高さは45.6mである。幅30～40cm位、深さは全体に20数cm～40数cmである。北西端は方形土坑の下で見つかった集石除去後に検出され、南東端はSD7に切られて収束する。

このほか、調査区全体の灰褐色土・淡褐色土上面で、一辺20cm前後の方形ピットを多数検出している。これらは黒褐色土を埋土とするものであり、耕作に伴うものを含むと思われるが、Ⅲ期の古段階か新段階かはよくわからない。いくつかのピットは東西方向にはほぼ等間隔に並び、その軸は真東西に近い傾きのものと、少し東南東に傾いたものがある。

(4) 第Ⅲ期（新段階）の遺構（図7）

井戸SE1 調査区中央付近の淡褐色土・砂礫上面で検出された円形落ち込み。黒褐色土を埋土とし、埋土に煉瓦片を含む。周囲に掘形と思われる楕円形の落ち込みがあるが、この部分は重機で除去した。中央の円形落ち込みは水溜の残骸の可能性はある。楕円形の落ち込み上面の高さは、45.7m、円形落ち込み検出面の高さは45.4m、底の高さは45.1m。

長方形土坑 本調査区南辺には、東西1m×南北2m前後で、平面長方形の土坑が東西に長く並ぶ。検出面の高さは、高いもので45.8m。検出面からの深さは、深いもので20数cmである。埋土は黒褐色土であるが、茶色味を帯びた汚れた土やガラス片を含む。並びの軸は真東西よりもやや東南東にずれる。

調査区南西部では、SR1盛土の堅い面に当たる部分ではそれ以上掘り込まず、柔らかい部分のみ深く掘ったためか、二段落ちとなっている。これらの長方形土坑群からは、「mm」目盛りのついたガラス棒や近代の遺物が出土しているものもある。

調査区南東では、これらの延長に少し小ぶりの長方形土坑が東西に並ぶ。検出面の高さは、45.7～45.8m、深さは10数cmである。これらの北側に東西1m×南北2.5m位の長方形土坑がもう一列並ぶ。検出面の高さは、45.8～45.9m位で、深さは10数cm～30数cmである。東の方は灰褐色土上面ではっきり輪郭が見えず、砂礫まで掘り下げてはっきり検出できた。また西の方は途中で並びが途切れる。埋土からガラス片が出土しているものもある。

これらとは別に、西半中央のSR1上部に方形ないしは長方形となる土坑が並ぶが、北端は攪乱で切られて不明である。これらの土坑の検出面の高さは46.0mであり、深さ10数cm位である。SR1および、その盛土を切っている。調査区東半中央でも東西1m×南北3m、東西1m×南北1.5m位の東西に並ぶ長方形土坑が検出されているが、攪乱が多くどこまで並ぶかは不明である。検出面の高さは45.8m～46.0mであり、一番北の並びの深いもので深さ20数cmである。

南東拡張区では、一辺1m前後の方形土坑が東西に並ぶようである。検出面の高さは45.7～45.8m位、深さは深いもので20数cmである。これらの方形土坑群のうち、斜めに曲がる幕末期の遺物を含むSD6を切っているものがある。このことから判断して、方形土坑群も上記した長方形土坑群同様、近代に属するものと考えられる。

以上の長方形土坑群はいずれの列もほぼ平行に東西に並んでおり、類似目的で形成された遺構と判断できる。

土 坑 調査区南東南壁際でも土坑などが並んでいるが、形や大きさがやや異なり、

上記のものと同じ性質の遺構か判然としない。このうちS K59は褐色砂礫を埋土とし、その下から東肩を検出した黒褐色土を埋土とするS K60とは埋土が異なる。前者を切る方形ピットが存在し、後者の掘削後別の方形ピットを検出した。S K59・60の検出面の高さはそれぞれ45.8m、45.7mで、底の高さはそれぞれ45.7m、49.6mである。いずれも北側を攪乱に切られ、南側は調査区外へ続くので、土坑かどうか不明である。

S K59の東隣りに位置するS K68は灰褐色土上面で認識できず、砂礫上面で認識できたが、埋土は黒褐色土の土坑である。検出面の高さは45.7m、底の高さは45.4mである。S K68の東側にも2つの土坑があり、それぞれ検出面の高さ45.8m、底の高さは45.6、45.7m。東側の土坑の底から、集石を検出し、これを除去した下より先述のS D10を検出した。

S K55は調査区東辺で検出した並びのない不定形の土坑。検出面の高さ45.9m、底の高さは45.7mである。調査区南西のS K26～28は、いずれも攪乱で切られており、南側の土坑とつながるかどうか不明である。検出面の高さはそれぞれ45.9m、45.8m、45.9m、底の高さは46.7m、45.6m、46.7m。S K26からはガラスが出土している。

S K71はS R1南盛土上面で検出した土坑で、検出面の高さ45.8m、底の高さ45.2mである。埋土に煉瓦片を含む。S K6～9は、いずれもS R1およびその盛土上面で検出した遺構。S K6・7はピット状遺構で、検出面の高さは46.0m、45.9m、底の高さはそれぞれ45.9m、45.7mである。S K8は方形土坑、S K9は円形の中央が盛り上がった遺構である。いずれも検出面の高さは45.9m、底の高さは45.8mである。S K10は、調査区西辺の淡褐色土上面検出のピット状遺構。検出面の高さ45.7m、底の高さ45.6m。

南東拡張区のS K78はS K76の北側、S D7南側の円形落ち込み。検出面の高さは45.7m、底の高さ45.6m。S K79はS D7南側の土坑で、南側は攪乱に切られて不明である。検出面の高さは45.7m、底の高さは45.6m、S K80は不定形土坑で、拡張区北壁際にぶつかる。検出面の高さは45.7m、底の高さは45.6m。S K81は、S K73の北側にあり、その続きの可能性もあるが、S D7北側の落ちの延長の可能性もあり、溝か土坑か性質不明。検出面の高さは45.8m、底の高さは45.7mである。S K72は、拡張区東端近くにある土坑で、方形土坑の一部かもしれないが、南側を攪乱に切られ、東側は東壁にぶつかるために、性質不明である。検出面の高さは45.8m、底の高さは45.7mである。これらの土坑は、いずれも黒褐色土を埋土とする遺構であるが、南東拡張区については時間的な制約のため、黒褐色土と灰褐色土を同時に掘削しているため、遺構の検出は淡褐色土上面でおこなっている。

土坑のうち、ガラスや煉瓦など、近代に属する明確な遺物が出土しないものは、Ⅲ期の古段階か新段階か分離することは困難である。

根石 調査区南西で、ほぼ真南北方向に、煉瓦と大量の瓦を含む溝状の攪乱が検出された。その底部には約1.8m間隔で平らな面を上にした根石が配置されていた。根石上の高さは45.6m前後である。この約1m西にも根石が飛び飛びにほぼ真南北方向に並んでいた。これも同様に性質不明である。これらは草創期の大学病院の建物などに関連する遺構であろうか。

4 遺物

整理箱79箱の遺物が出土したが、おもなものは近世の土器・陶磁器類である。遺構から出土した遺物については前節の時期区分にしたがって解説したいが、長期にわたって機能したS R 1に関しては別項をたてて記載することにする。また、人形・ミニチュアといった土製品についても、一括して解説した。

(1) 第Ⅰ期の遺構から出土した遺物（図版8，図8～10）

S F 1 直下，砂礫上面出土遺物（I 1） I 1はS F 1完掘後，砂礫上面から出土した土師器皿。口径11.8cm，器高2.2cmをはかる。内面の底部と体部の境が撫で調整により強く凹んでいる。口縁端部に煤が付着する。

S F 1－2 出土遺物（I 2～I 60） S F 1－2は上部と下部に分けて掘削したが，I 2～I 12が下部の掘削，I 13～I 60が上部の掘削で出土した遺物である。

I 2～I 10は淡橙色を呈する土師器皿。口径は，I 2が9.6cmでもっとも小さく，ほかは，I 3～I 5が10cm～10.5cm（以上～未満，以下同じ），I 6～I 10が11.5cm～12.0cmである。I 10は，内面の底部と体部の境が撫で調整により強く凹み，口縁端部には煤が付着している。I 11は陶器燈明皿。見込みに滑り止めの条線をもつ。I 12は唐津焼の皿。高台は露胎で，内外面に銅緑釉を施している。

I 13～I 57は淡橙色～橙褐色の土師器皿。内面の底部と体部の境が強く凹んで圈線状を呈する。I 32は，底部側の境が比較的明瞭となる凹線がめぐっている。口径は，I 52・I 53・I 13～I 15・I 54が8.5cm～9.5cm，I 16～I 18が9.5cm～10.5cm，I 19～I 29・I 32～I 36・I 38・I 55が10.5cm～11.5cm，I 30・I 31・I 39～I 46・I 48・I 50・I 57が11.5cm～12.5cm，I 41・I 49・I 51・I 56が12.5cm～13cmとなり，3群ないしは4群に分かれそうである。I 17・I 21・I 26・I 32・I 40～I 42・I 46～I 48・I 52は口縁端部に

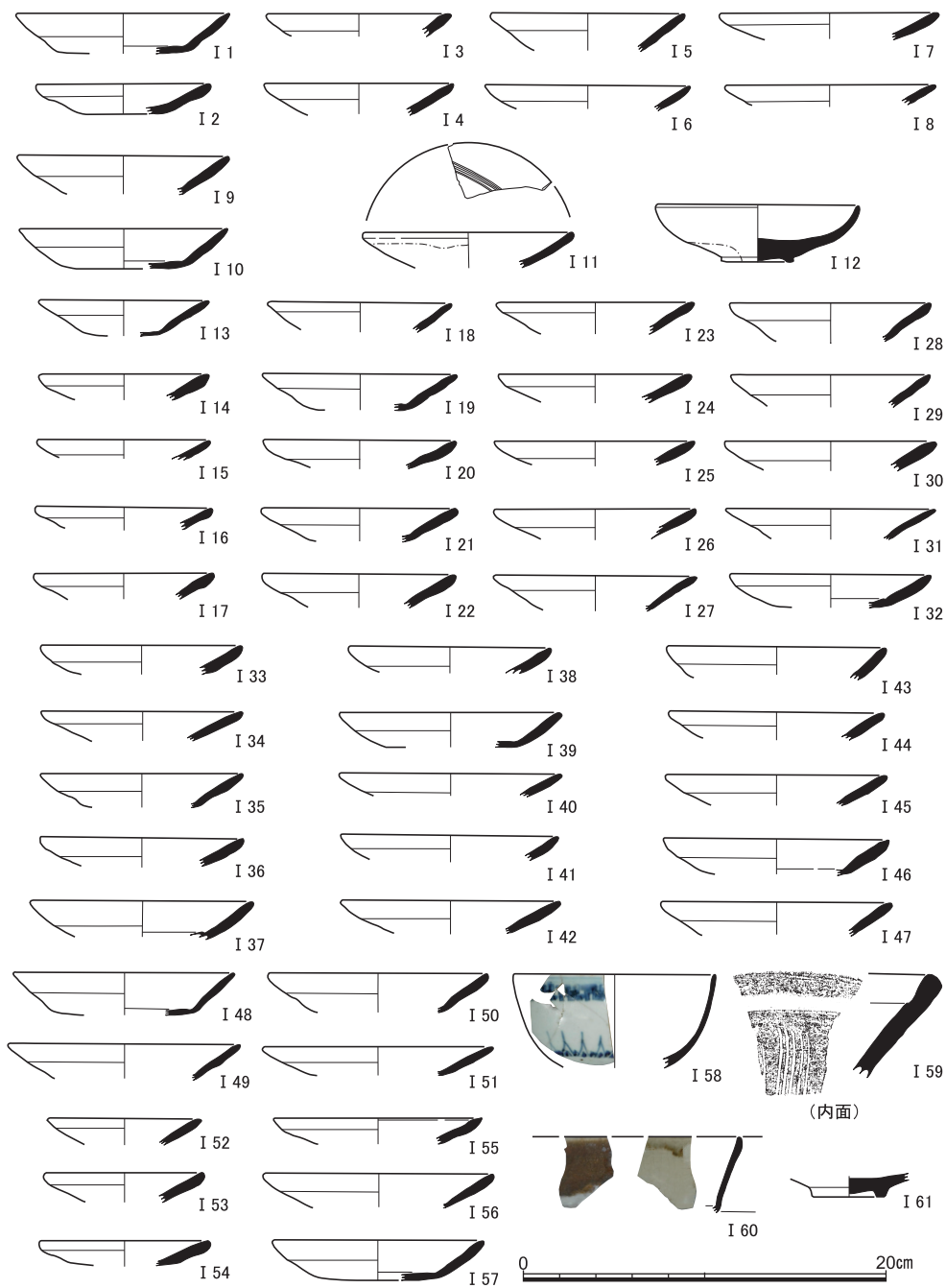


図8 砂礫上面出土遺物 (I 1 土師器), SF 1-2 出土遺物 (I 2~I 10・I 13~I 57 土師器, I 11・I 12 陶器, I 58 磁器, I 59・I 60 陶器), SF 2 出土遺物 (I 61 陶器)

遺 物

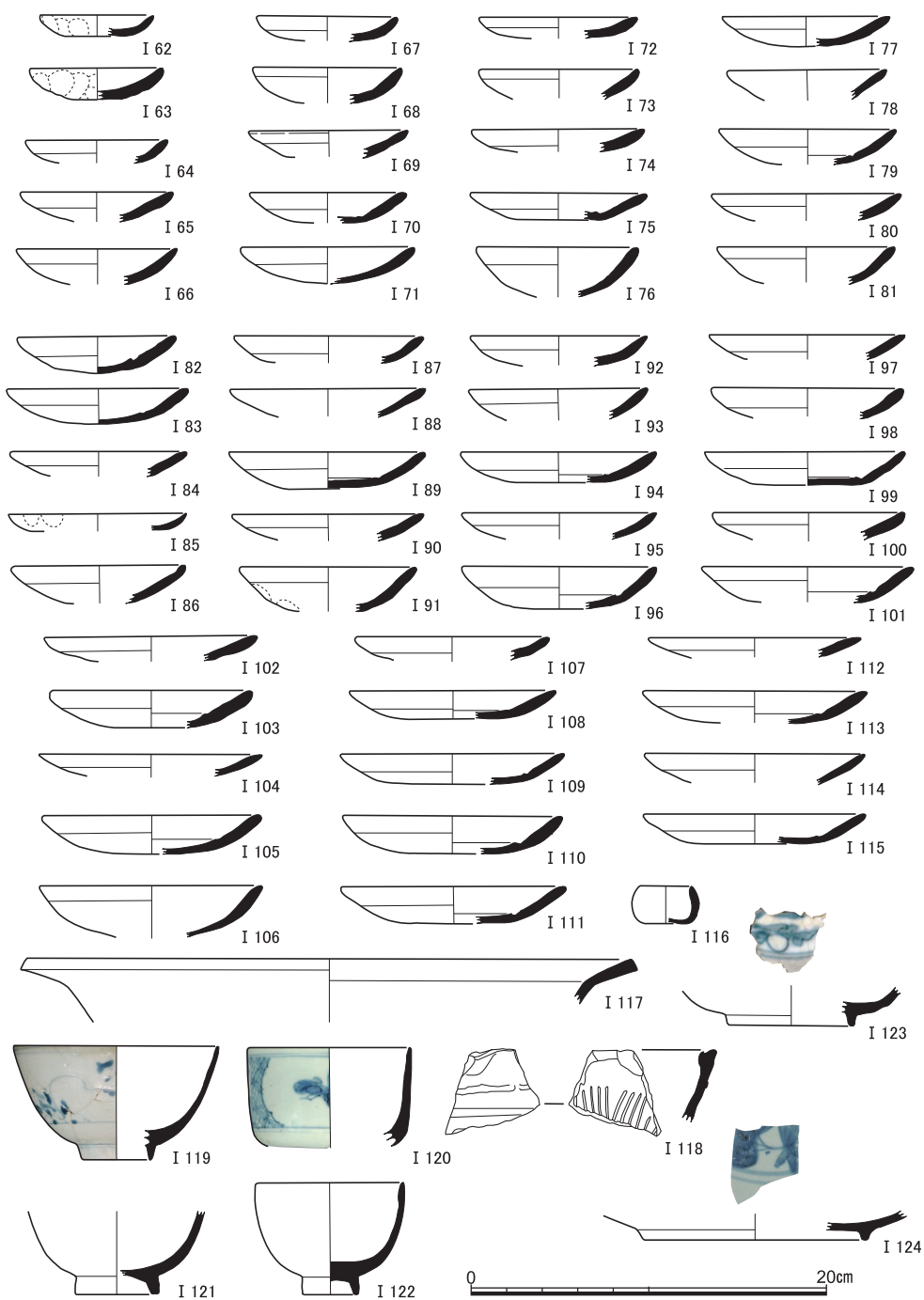


図9 S X 4 出土遺物 (I 62~ I 117土師器, I 118陶器, I 119~ I 124磁器)

煤が付着し、I 57は内外面全体が煤で黒変しており、土師器皿の多くが燈明皿として利用されたことがわかる。

I 58は磁器染付の椀で、初期伊万里産か。I 59は丹波のすり鉢。I 60は陶器椀。

S F 1 - 2 から出土した土師器皿は、小森俊寛・上村憲章による編年〔小森・上村1996〕の京都X I 期に属しており、下部出土土師器がX I 期中、上部出土土師器がX I 期新を中心としている（土師器皿の編年は、以下同じ）。共伴した陶磁器も、これらの年代とおおむね齟齬はなく、17世紀前葉～中葉の年代を与えることができる。

S F 2 出土遺物（I 61） I 61は陶器椀。灰釉を施し高台は露胎とする。見込みに砂目をもつ唐津焼である。17世紀後葉ごろか。

S X 4 出土遺物（I 62～I 124） I 62～I 115は土師器皿。淡橙色～橙褐色を呈する。見込みに圈線をもつものともたないものがある。圈線は、I 103・I 105・I 113のように凹線状を呈して、とくに体部側の境界が不明瞭になるものもあるが、S F 1 - 2 出土の土師器皿の圈線と比較すれば、調整時の凹みから装飾としての圈線へ変化していることが明らかである。口径は、I 62・I 63が6.5cm～7.5cm, I 64・I 65・I 67・I 68が7.5cm～8.5cm, I 66・I 69・I 70・I 72・I 73・I 76～I 78・I 82が8.5cm～9.5cm, I 71・I 74・I 75・I 79～I 81・I 83～I 87・I 91～I 93が9.5cm～10.5cm, I 88～I 90・I 94～I 100・I 107が10.5cm～11.5cm, I 101～I 106・I 108～I 115が11.5cm～12.5cmとなる。I 99・I 105・I 113は口縁端部に煤が付着し、I 84・I 87は内外面とも煤で黒変している。

I 116は灰白色を呈する土師器で、口径3cm、器高2.1cmをはかる。「つぼつぼ」と呼ばれる懷石の容器であろう。I 117は土師器炮烙。口径34cm。口縁部まで外型によって成形されており、口縁端部から内面にかけて撫で調整が施されている。I 118は陶器すり鉢。重ね焼きの痕跡が口縁外面にみられる。I 119・I 120磁器染付、I 121は青磁、I 122は白磁の、いずれも椀である。I 123・I 124は輸入磁器青花で、鉢ないしは皿。I 124は全面施釉し、I 123は高台皿付け部分のみ、露胎としている。

S X 4 出土土師器皿は、小森・上村編年の京都X I 期新～X II 期古の17世紀末18世紀初頭ごろに比定できる。伴出した土師器炮烙、陶磁器類との年代観とも矛盾しない。

S E 9 出土遺物（I 125） I 125は口径25cmをはかる土師器行灯皿。外型で体部を作り、端部は玉縁状に仕上げている。内面に煤が薄く付着している。

(2) 第II期の遺構から出土した遺物（図10～13）

S D13 出土遺物（I 126～I 135） I 126は土師器皿。見込みに圈線がめぐり、口縁端

遺 物

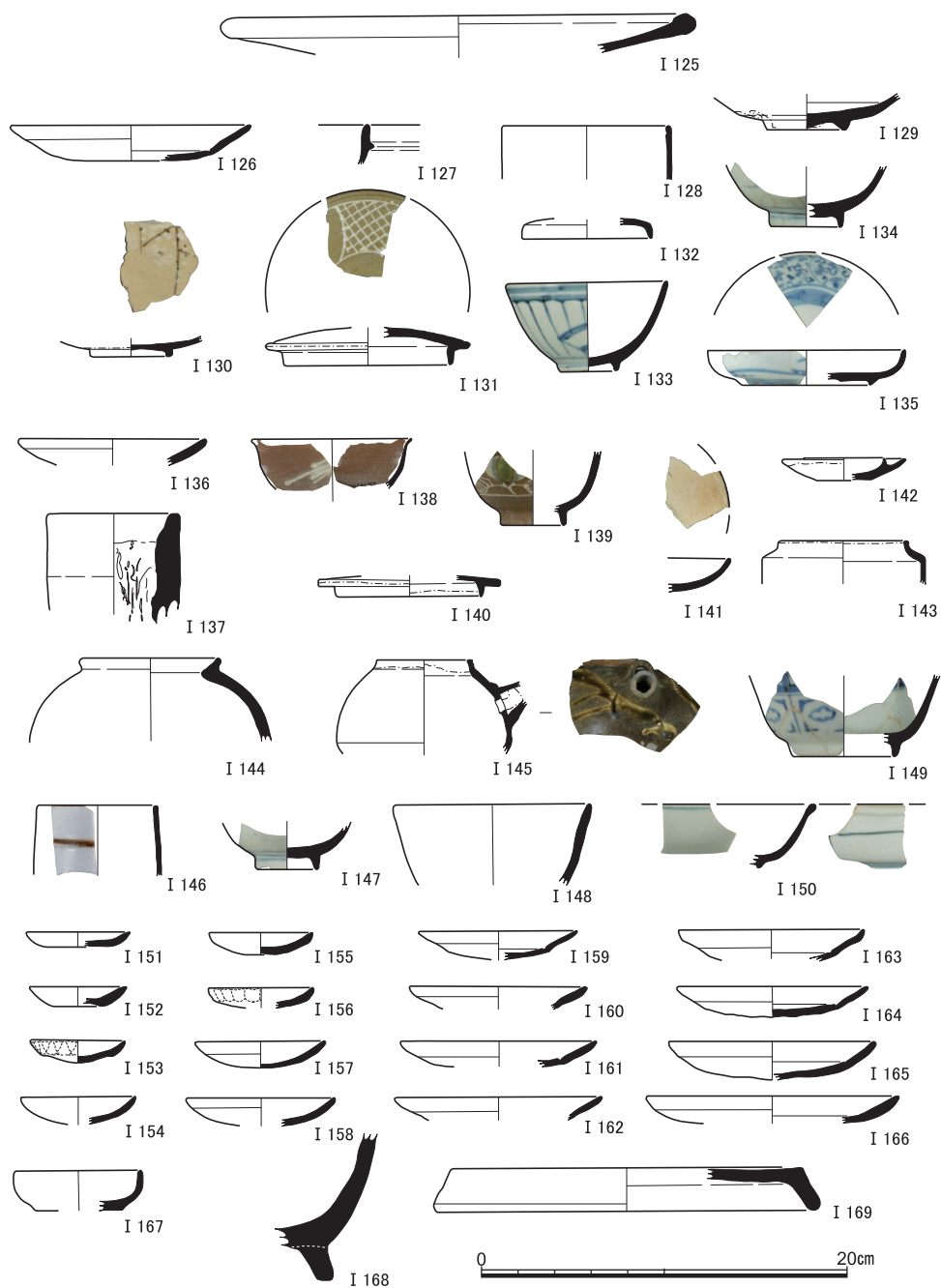


図10 S E 9 出土遺物 (I 125土師器), S D13出土遺物 (I 126・I 127土師器, I 128～I 132陶器, I 133～I 135磁器), S E 2 出土遺物 (I 136・I 137土師器, I 138～I 145陶器, I 146～I 150磁器), S E 3 出土遺物(1) (I 151～I 169土師器)

部に煤が付着する。I 127は土師器炮烙。体部を外型で成形し、口縁部下が三角形に肥厚する。I 128～I 132は陶器で、I 128～I 130は椀、I 130・I 131は蓋である。I 129は見込みに砂目をもつ唐津焼。I 130は京焼系で、鉄釉と白泥を用いて見込みに梅花文を描いている。I 133～I 135は磁器染付で、I 133・I 134は椀、I 135は、底部が蛇の目凹型となる小型の皿。

SE 2 出土遺物 (I 136～I 150) I 136は口径10cmをはかる土師器皿。I 137は焼塩壺の身。口径7cm前後。粘土板を巻き付けて成形した痕跡が内面に残る。外面から口縁部内面までは撫でて仕上げており、内面は受熱で赤変している。I 138・I 139は陶器椀で、I 138は白泥、I 139は内面を白化粧し、外面には白泥・緑釉・鉄釉・青釉を用いて文様を描く。I 140は陶器蓋、I 141は陶器皿、I 142は陶器燈明受皿、I 143は陶器水注。内外面に鉄釉を施し、口縁端部の釉を剥でいる。I 144は陶器壺。口径7.4cmをはかる。I 145は陶器土瓶。I 146は磁器の筒形椀で、口縁端部と胴部半ばに鉄釉を施す。I 148は青磁椀。口径10.6cm。I 149は磁器染付鉢。体部は多角形の形状をとる。焼き継ぎによる補修が見られる。I 150は磁器染付皿。口縁端部が玉縁状を呈する。

SE 3 出土遺物 (I 151～I 228) I 151～I 166は土師器皿。橙褐色ないしは淡褐色のものが多く、I 160・I 162・I 166は灰白色を呈する。I 151～I 158は見込みに圈線をもたないタイプ。I 151～I 153・I 155・I 156は口径5cm～6cm、I 154は6.2cm、I 157は7cm、I 158は8cmである。I 159～I 166は見込みに圈線のめぐるタイプ。口径には、8.5cm前後のI 159、10～11cmのI 160～I 165、14cmのI 166の3種類が認められる。I 159は内面、I 164・I 165は内外面全体が煤で黒変している。

I 167は灰白色を呈する回転台成形の土師器鉢。I 168は土師器で、風炉ないしは焔炉の脚部。I 169は土師器火消壺の蓋。口径20.6cm、高さ2.4cmをはかる。I 170～I 174は土師器炮烙。I 170～I 172は体部が内湾し口縁部が外へ開く形態で、体部から口縁部まで外型によって成形されている。口縁端部から内面にかけては、撫で調整が施されている。I 173・I 174は口縁部が「く」字形に立ち上がる形態で、体部を外型成形している。口縁部から内面にかけて撫で調整するが、両例とも強い撫でにより口縁部直下が凹むという特徴をもっている。難波洋三による分類〔難波1992〕のD類に対比できる（炮烙の分類は、以下同じ）。I 175は土師器で、外へ開く胴部から頸部が直立する。器種不明。

I 176～I 190は陶器椀。I 177は高台皿付を除いて、外面全体を白化粧している。I 180・I 181は天目釉を施す。I 182は鉄釉、I 183は鉄釉と白泥を用いて文様を描く。I 191は

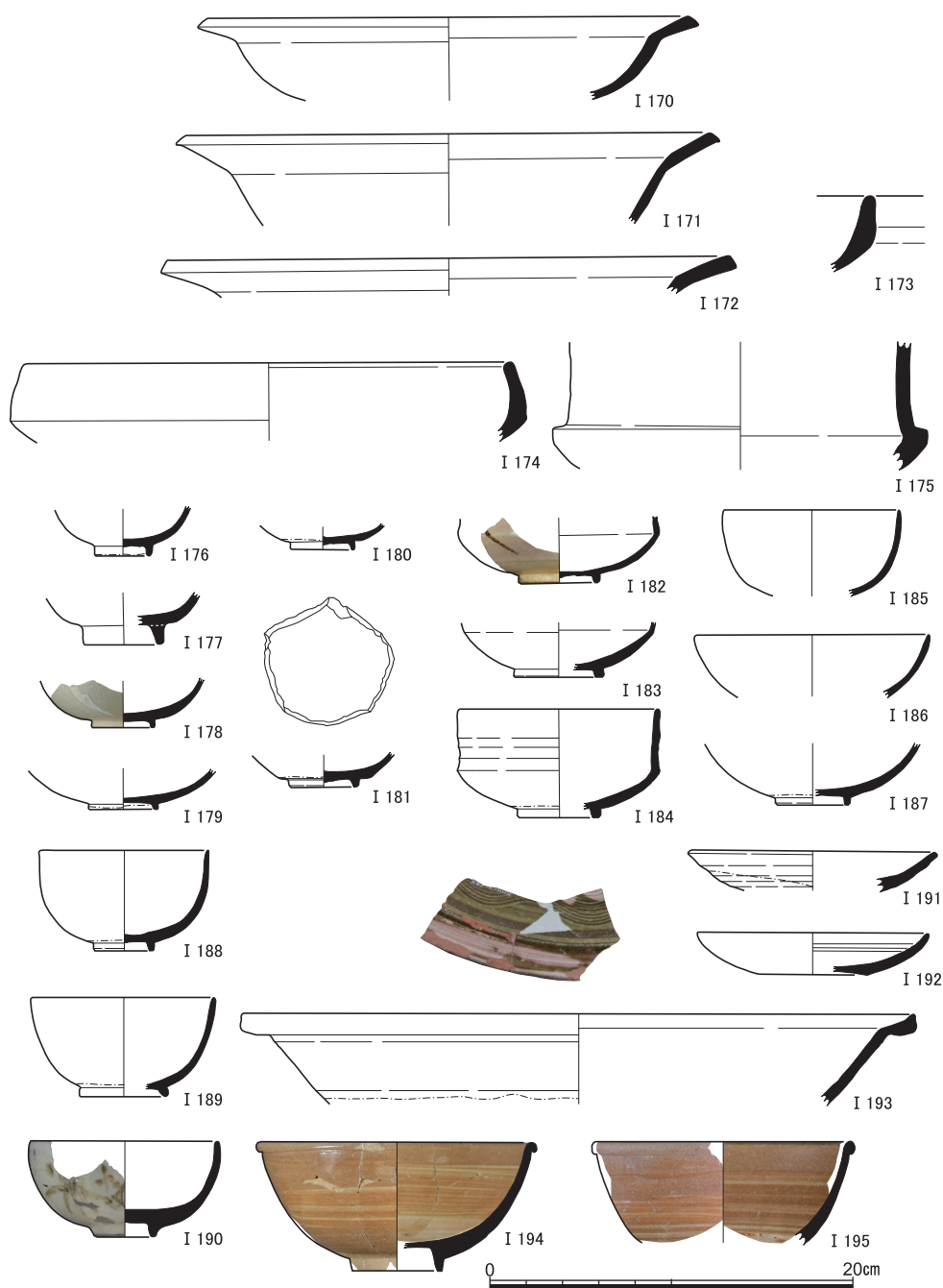


図11 SE 3 出土遺物(2) (I 170～I 175土師器, I 176～I 195陶器)

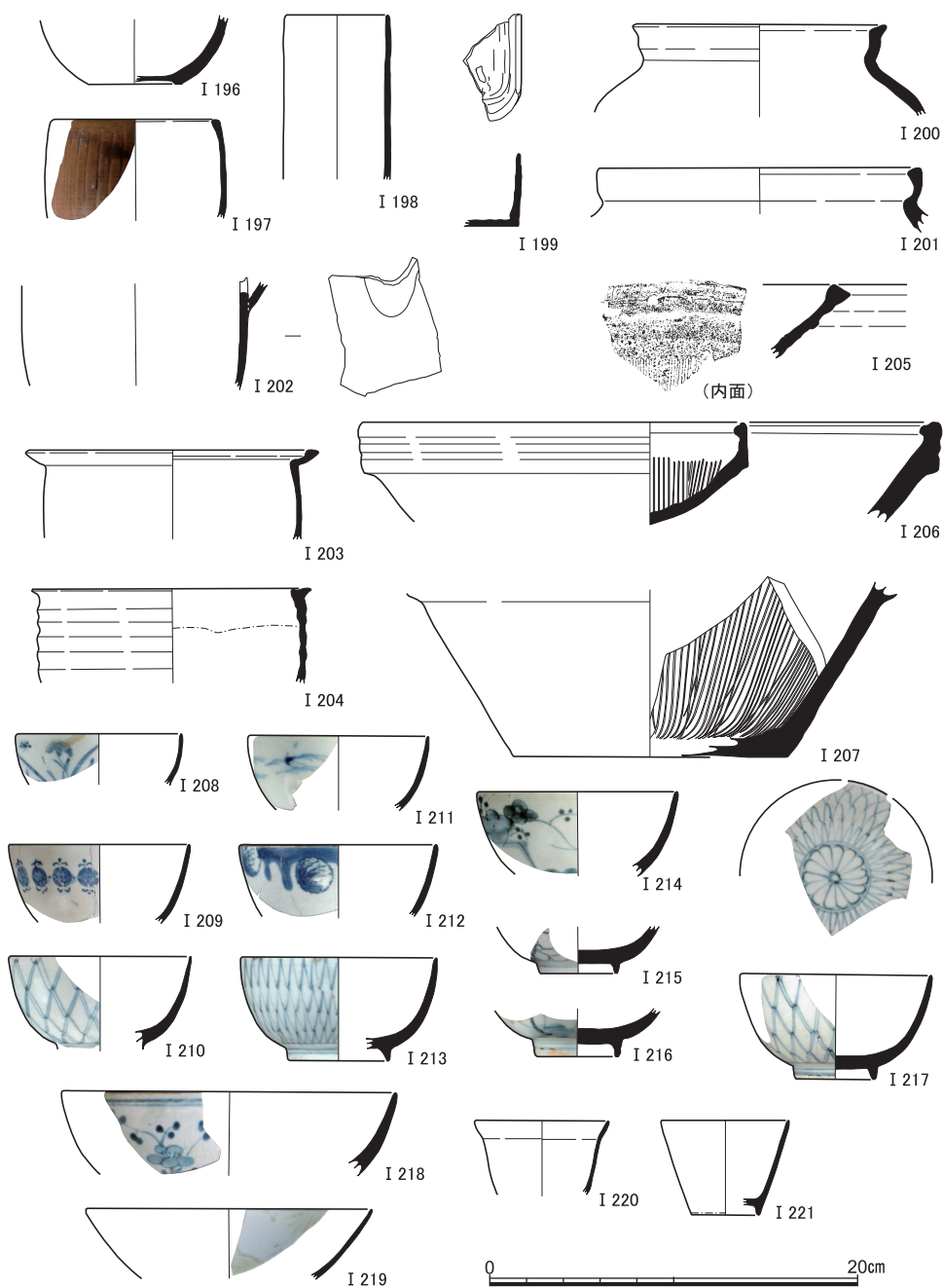


図12 SE3出土遺物(3) (I 196～I 207陶器, I 208～I 221磁器)

陶器皿。I 192は軟質施釉陶器皿で、口縁端部には緑釉を施す。口縁部内面に3条の沈線がめぐっている。I 193は、直線的な体部に外へ開く口縁部がつく唐津焼の鉢。口径36.8 cmをはかる。内面に刷毛目文をもつ。I 194・I 195は口縁部外面が丸く肥厚する唐津焼の鉢。内外面に白泥による刷毛目文様をもち、見込みは蛇の目釉剥ぎしている。

I 196は陶器で、徳利の底部か。半分ほど残存している底面中央が直径約1.5cmで半円形に欠損しており、意図的に穿孔している可能性がある。I 197は外面に鉄釉を施している陶器香炉。I 198は陶器線香立て。口径5.6cm。I 199は軟質施釉陶器の鬚水入れ。I 200・I 201は陶器壺で、ともに鉛釉を施す。I 202は陶器水注。I 203は陶器鍋。I 204は陶器火入れ。I 205～I 207は陶器すり鉢。I 205は内外面に鉄醬を施釉する信楽産、I 206・I 207は堺・明石系すり鉢。

I 208～I 218は磁器染付の椀。I 209は、コンニャク判による施文。I 214はいわゆる、くらわんか手。I 210は二重網目文、I 213は一重網目文、I 217は見込みに15弁の菊花文を描き、外面は二重網目文、内面は一重網目文を施している。底裏に、二重方形区画内に、渦「福」の銘をもつ。同様の銘は、I 215にも見られるが、こちらは一重方形区画である。I 219は上絵による絵付けが内外に施されているが、劣化が著しい。口鏝としている。I 220・I 221は白磁碗で、ともに口鏝とする。I 222は磁器染付の鉢。口径18cm前後で、端反りとなる。I 223～I 225は磁器染付の皿。外面にはいずれも唐草文を施すが、I 223・

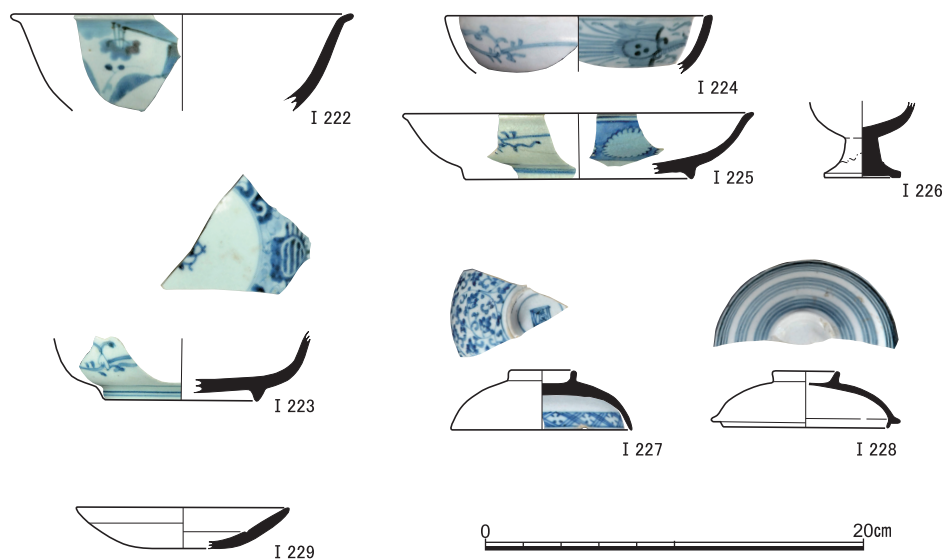


図13 SE 3 出土遺物(4) (I 222～I 228磁器), SE 4 出土遺物 (I 229土師器)

I 224は2本線で輪郭を描いて濃染めとしているのに対して、I 225は1本線で表現されている。I 226は磁器仏飯。残存部位には文様は見られない。I 227・I 228は磁器染付の蓋。I 227は椀蓋で、口縁部内面に四方襷文を巡らす。高台内に、二重方形区画内、渦「福」の銘をもつ。I 228は蓋物の蓋である。

S E 3 出土の土師器皿は、小森・上村編年の京都XⅢ期に比定できる。共伴する土師器炮烙や陶磁器類も、18世紀中葉～後葉ごろのものと理解する。

S E 4 出土遺物 (I 229) I 229は土師器皿。口径11.2cmをはかり、見込みに圈線がめぐる。

(3) 第Ⅲ期(古段階)の遺構から出土した遺物(図14～26)

S X 1 出土遺物 (I 230～I 559) 整理箱13箱におよぶ多量の土器・陶磁器類が出土した。I 230～I 251は土師器皿。I 230～I 234は見込みに圈線をもたない小型の皿。口径5cm前後のI 230～I 233と7.4cmのI 234の2種類の規格が見られる。I 235～I 251は見込み圈線が巡るタイプ。I 235・I 249のように、作りが華奢で、口縁部を内側へつまんで成形しているものが主体を占めている。口径は、I 235～I 239・I 248が8cm～9cm, I 240～I 243が9cm～10cm, I 244～I 246・I 249・I 250が10cm～11cm, I 247が11.4cm, I 251が12.4cmである。I 232・I 233・I 250には内外面に煤が薄く付着している。これらは、小森・上村編年の京都XⅣ期中に比定できる。

I 252は口径2.8cm, 高さ1.6cmをはかる土師器小型容器。I 253・I 258は、回転台成形の土師器鉢。I 253は口径4.6cm, 高さ2.4cm, I 258は口径5cm, 高さ2.8cmをはかる。I 254は土師器皿。口縁端部には、左下がりの刻みをめぐらす。内外面に、離れ砂(雲母)が付着している。I 255は口縁部を内輪に折り曲げた扁平な焼塩壺。内面に布目の痕跡を残す。I 256は土師器。底面に墨書が見える。I 257はロクロ成形の土師器椀。本来、施釉陶器で素焼きの段階でとまった可能性がある。I 259は焼塩壺の蓋。内面に布目痕跡をもつ。I 260は、口径10.2cm, 高さ1.4cmをはかる土師器蓋。回転台を用いて成形されており、上面中央がわずかに凹んでいる。内面には削りの痕跡が残り、煤が薄く付着している。I 261は口径24cmをはかる火消壺の蓋。I 262～I 271は土師器炮烙。難波分類のD類のI 268以外は、口縁部と体部の境が断面三角形状に肥厚する難波分類G類である。いずれも体部を外型成形する。

I 272～I 440は陶器。I 272～I 301は椀。I 272は外面鉄釉, 内面には透明釉を施す。I 273は内面を全面白化粧し、外面には白泥を刷毛塗りしている。I 280・I 284は草花文

遺物

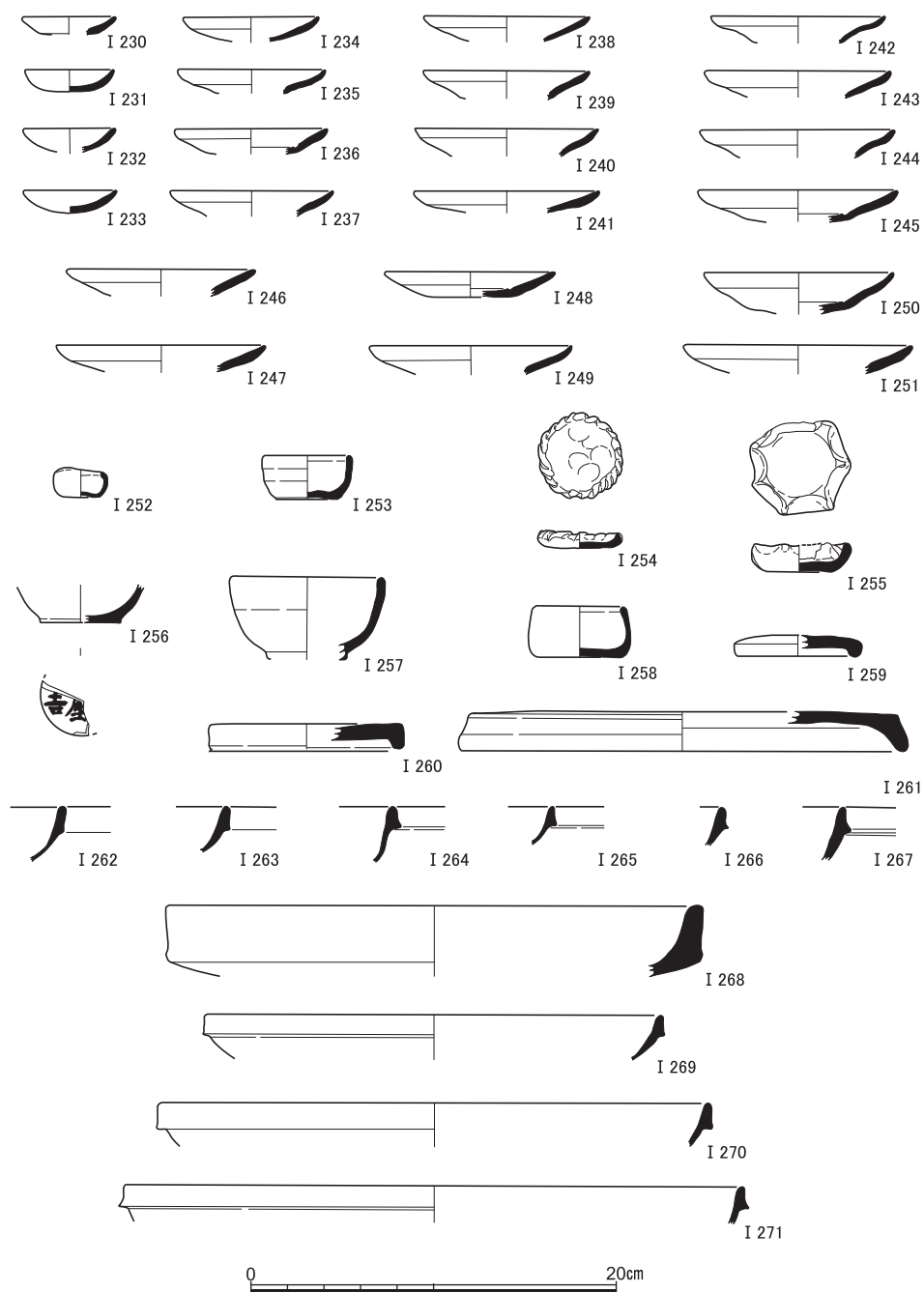


図14 S X 1 出土遺物(1) (I 230~271土師器)

京都大学病院構内A H12区の発掘調査

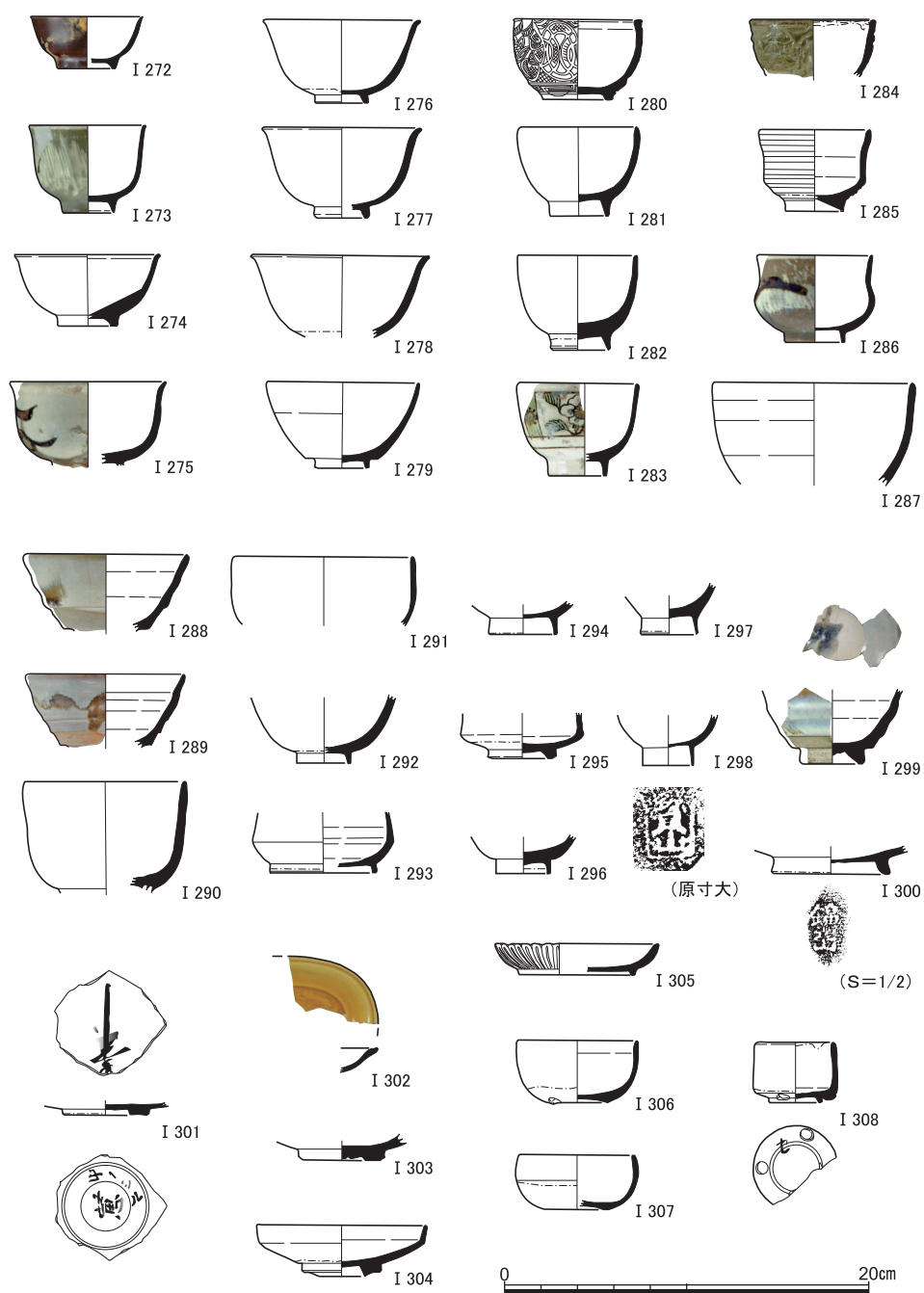


図15 S X 1 出土遺物(2) (I 272~ I 308陶器)

遺 物

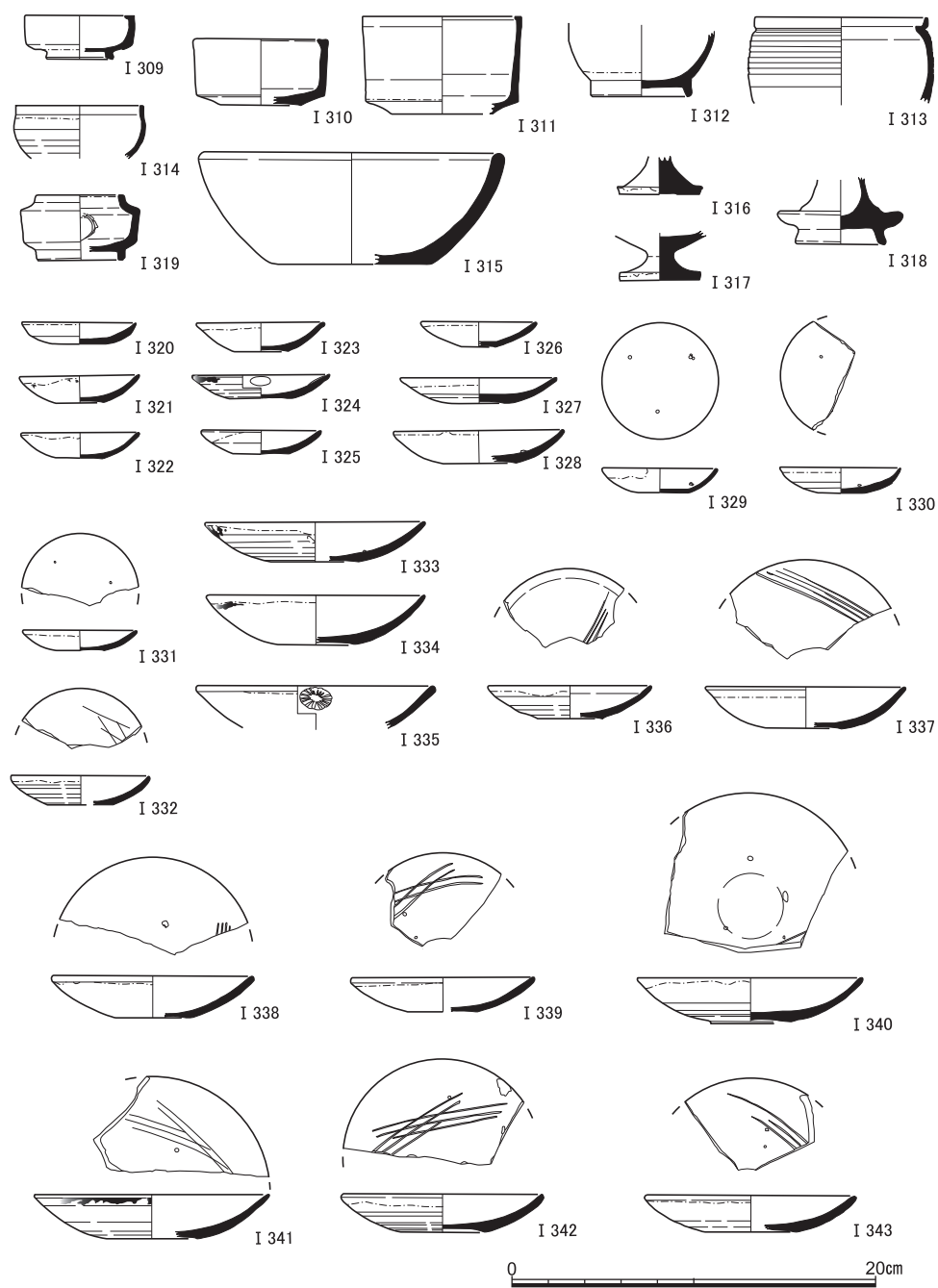


図16 S X 1 出土遺物(3) (I 309~I 343陶器)

様を型押しで作り出している。I 285・I 286は内面を全面白化粧し、外面は白泥を刷毛塗りしたのち、鉄絵を施す。I 291は天目椀。I 298は「寶山」、I 300は「錦光山」の刻印銘を底裏にもつ。I 301は底部に墨書がある。

I 302は黄褐色の釉を内外に施した小判型の皿。見込みに龍文を型押しする珉平焼である。I 303は軟質施釉陶器で、内外面に赤楽風の施釉を施している。I 304は腰折れ形の皿。I 305は軟質施釉陶器の皿。内面のみ、透明釉を施している。I 306・I 307は小型の陶器鉢。内面から胴部にかけて鉄釉を施す。I 306には脚が付く。I 308は鉄釉を施し内面と底部は露胎としている。口径4.2cm、高さ3.3cm。装飾的な脚が付く。小型の香炉であろう。高台内部に、「セ」と読める墨書がみえる。

I 309は蓋物、I 310・I 311は段重で、いずれも灰釉を施している。I 312は内外面に鉄釉を施す瓶の底部。底部外面は露胎。I 313は備前焼の広口壺。I 314は内面と口縁部に鉄泥を施し、それ以外の部分は露胎としている。I 315は備前焼の鉢。I 316・I 317は仏飯。I 318は高台と胴下部の境界が鐙状に突出する形態を呈しているが、器種については不明である。灰釉を施している。

I 319～I 379は灯火具。I 319は灰釉を施すカンテラ。注ぎ口をもつが、欠損している。I 320～I 348は灰釉を施す燈明皿。口縁部内面に、I 324はボタン状、I 335は菊花の貼付文をもつ。I 332・I 336～I 339・I 341～I 348は見込みに櫛描きによる沈線文をもつ。小は、口径6cm～6.5cm、大は、口径13cm前後となる。I 349～I 377は灰釉を施す燈明受皿。小は、口径6cm～6.5cm、大は、口径12cm前後で、燈明皿の法量とほぼ対応している。I 378・I 379は、底面を除いて鉄釉を施した乗燭。内面中央に、灯心をたてる突起をもつが、欠損している。

I 380は外面に緑釉を施した、口径15cm前後の小型火鉢。I 381は口縁部を輪花に成形した鉢。I 382は土瓶の底部。刻印をもつが、判読できない。I 383は軟質施釉陶器の胡麻煎り。型作りで、内面無釉、外面には透明釉を施す。I 384～I 388は、すり鉢。I 384～I 386・I 388は、焼き締め の 罎・明石系、I 387は内外に鉄釉を施している。I 389は甕。I 390～I 393は鍋。I 390～I 392は鉄釉、I 393は灰釉を内外面に施している。I 394～I 397・I 399・I 400は植木鉢。I 394～I 397・I 399は、口縁部が外側へ折れ曲がり、I 395・I 396は外側端部を斜めに刻んでいる。I 401は口径9.6cm、高さ3.8cmをはかり、底部中央に円孔をもつ。匣鉢であろう。

I 402～I 413は、土瓶・急須の蓋。I 413は、外面を白化粧し呉須で絵付けを施し、内

遺 物

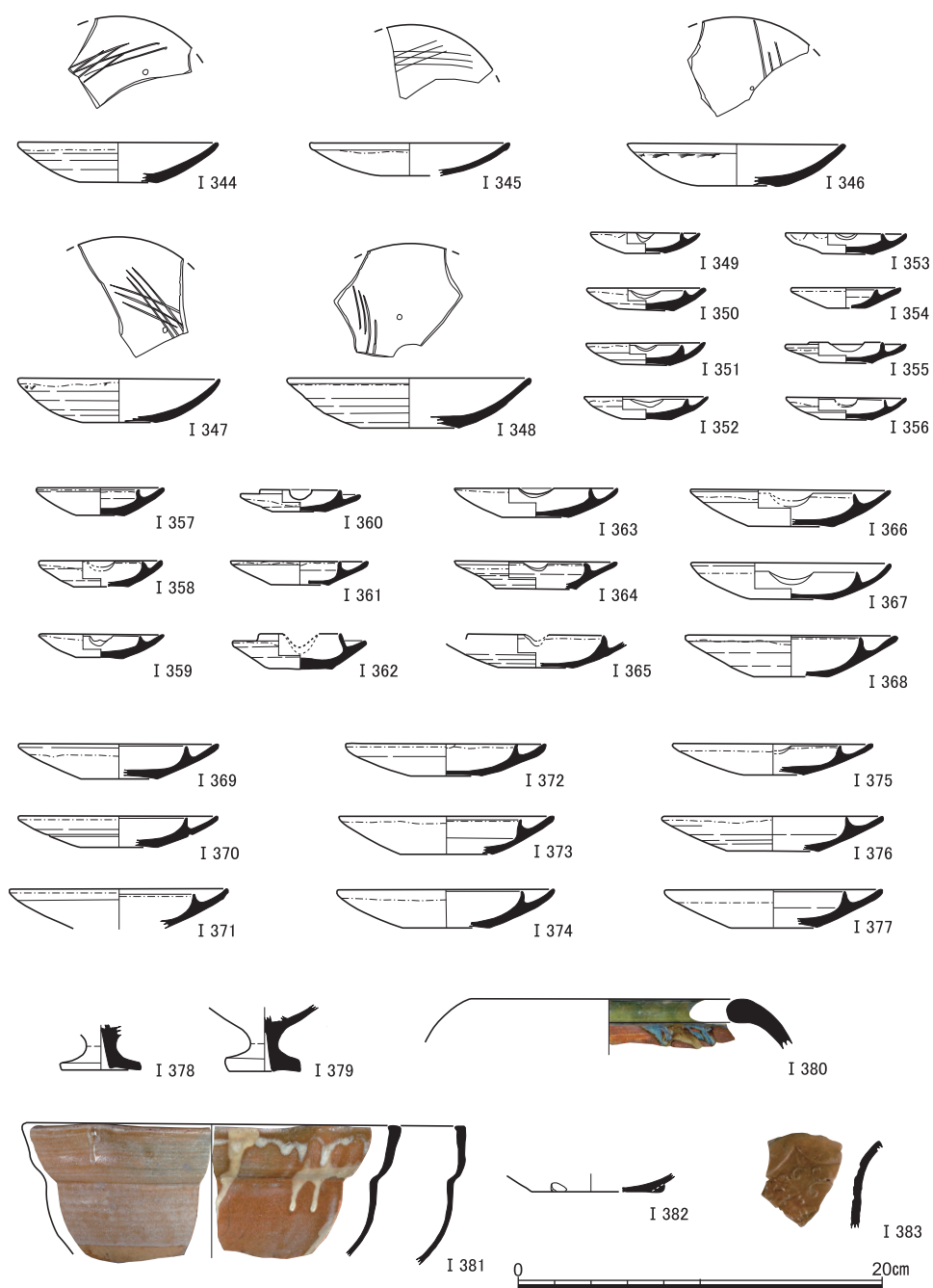


図17 S X 1 出土遺物(4) (I 344~ I 383陶器)

京都大学病院構内A H12区の発掘調査

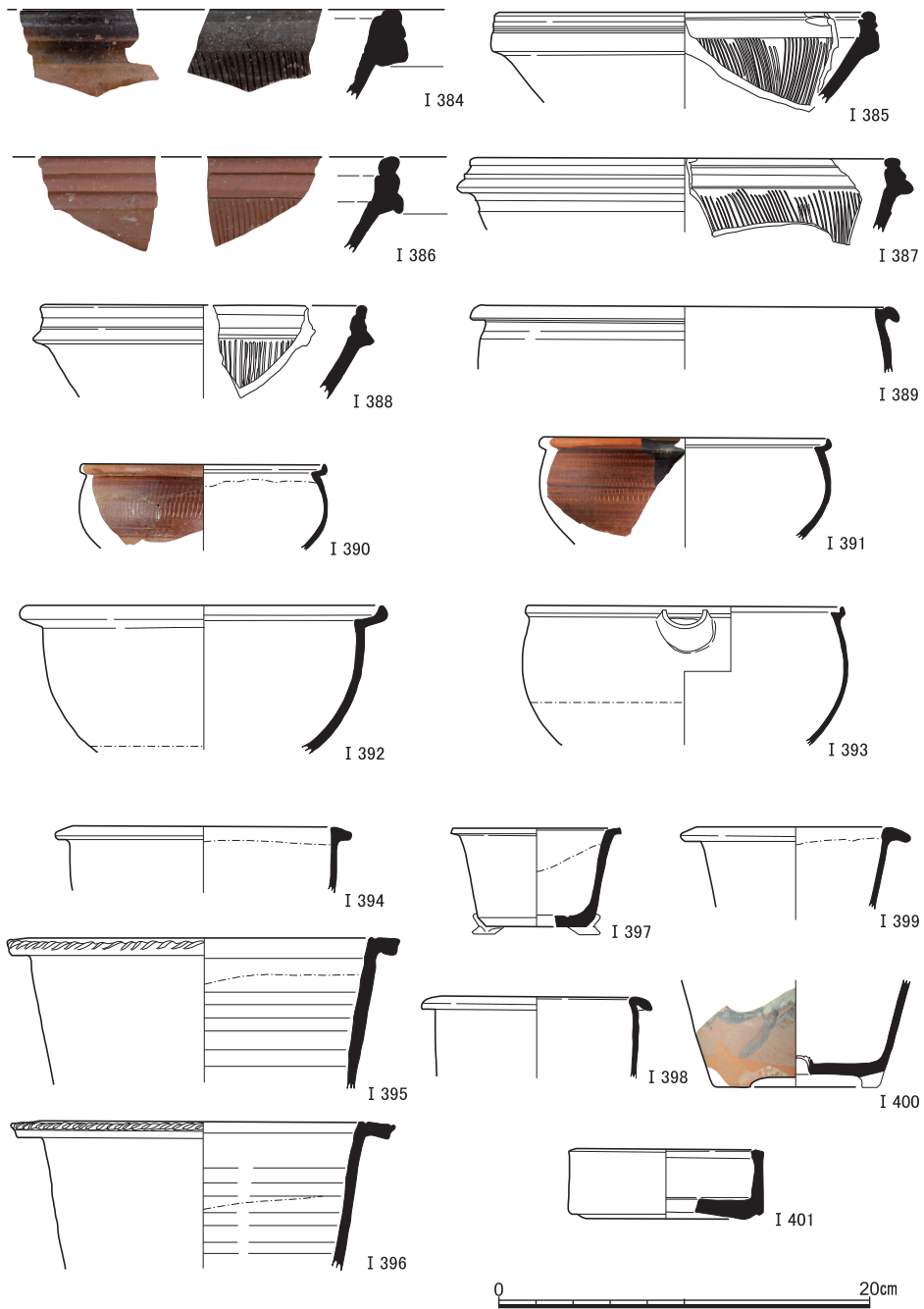


図18 S X 1 出土遺物(5) (I 384~ I 401陶器)

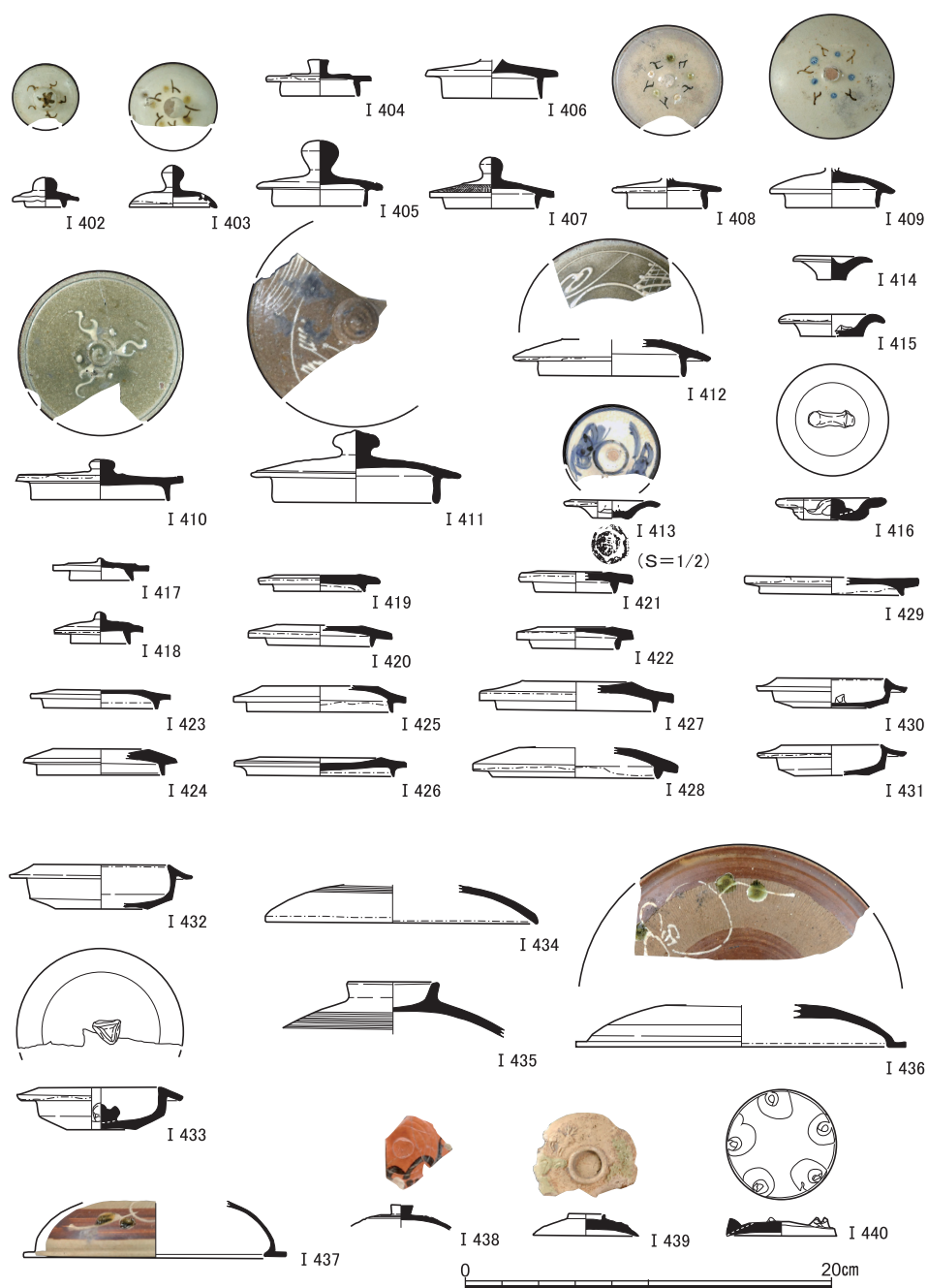


図19 SX1出土遺物(6) (I 402~I 437陶器, I 438・I 439軟質施釉陶器, I 440窯道具)

面には「亭」の刻印をもつ。I 414～I 429は、蓋物や段重の蓋。いずれも灰釉を施釉する。I 430～I 433は落とし蓋。鉄釉を施すI 430以外は、灰釉を施している。I 434～I 437は鍋の蓋。I 434・I 435は内外面に灰釉、I 436・I 437は内面に灰釉を施し、外面は鉄泥を施した後、白泥を用いてイッチン描きする。I 438・I 439は軟質施釉陶器の蓋。I 438は、内外面に透明釉を施し、鉄釉と白泥を用いて文様を描く。I 439は、シカとモミジを型押し成形し、透明釉を施して、部分的に緑彩している。I 440は円盤状を呈するトチン。5カ所に円錐形の脚がつく。脚は円盤部とは異なる白色の胎土を用いている。上面は摩耗している。

I 441～I 551は磁器。I 441～I 448・I 450・I 451・I 453・I 454・I 456～I 460・I 462～I 466・I 468～I 502は染付で、小盃や碗の類。I 441・I 448・I 451は小盃で、I 441・I 451は、作りがきわめて薄手である。I 441は口縁部内面と見込み、I 448は見込み、I 451は高台脇と見込みに文様を描いている。I 463は、作りがきわめて精巧であり、特注品の可能性もある。I 495～I 499は高台の高い、いわゆる広東碗である。I 459・I 463・I 475・I 500・I 502には焼継が認められる。I 500・I 502の底裏には、焼継師のマークと見られる記号がある。

I 449・I 452・I 455・I 461・I 467は上絵付けをした碗で、I 455は釉下に染付文様をもっている。I 449は薄作りの小盃。劣化で、文様がほとんど見えなくなっている。I 452は焼継している。I 503は青磁、I 504・I 505は白磁の碗である。

I 506～I 510は鉢。I 508は青磁の鉢。型作りで、内面に花文を型押ししている。それ以外は染付で、I 506は内外に山水文、I 507は外面に唐草文、内面に蛸唐草文を描く。I 512は蛇の目凹型高台で、焼継がみられる。

I 511～I 517・I 519～I 523は染付の皿。底裏に、I 511は渦巻「福」、I 522は「太明年製」の銘をもつ。I 512は蛇の目凹型高台となる。I 520は見込みを蛇の目釉剥ぎし、コンニャク判による五弁花を施す。I 521は型押し成形で口縁部を輪花状に作り、口縁端部には口鏤を施している。I 518は上絵付けを施した皿。赤・緑・茶・灰・金を用いて、見込みに草花文を描いている。

I 524～I 535は染付の碗蓋。I 535は外面に青磁釉を施している。I 536は染付の蓋物の蓋。I 537～I 543は仏飯。I 541が外面全体に瑠璃釉を施釉するほかは、染付で蛸唐草などの文様を描いている。

I 544は段重。口縁端部を釉剥ぎしている。I 545は染付の火入れ。I 546は口径6 cm,

遺 物

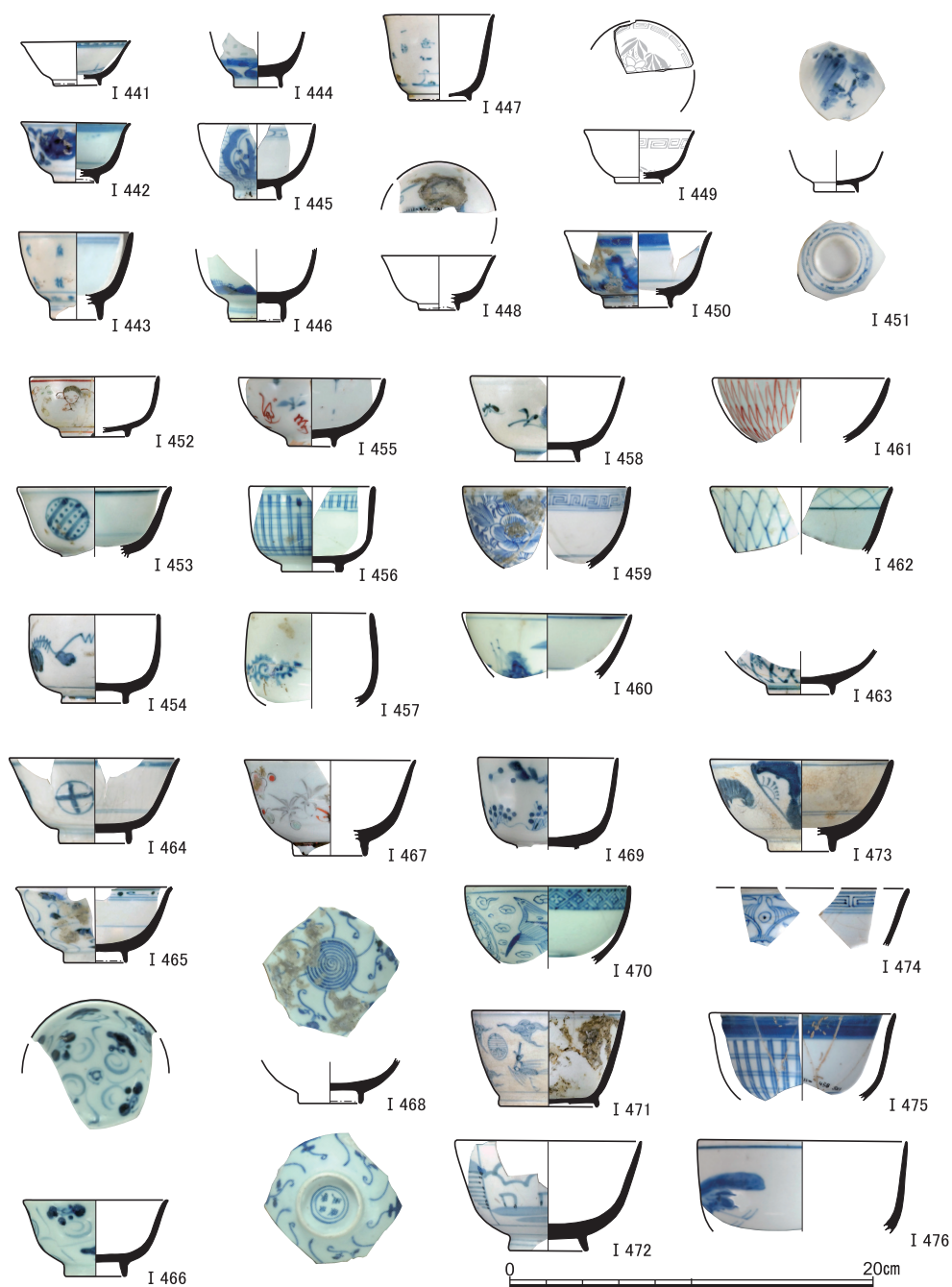


図20 S X 1 出土遺物(7) (I 441~ I 476磁器)

京都大学病院構内A H12区の発掘調査

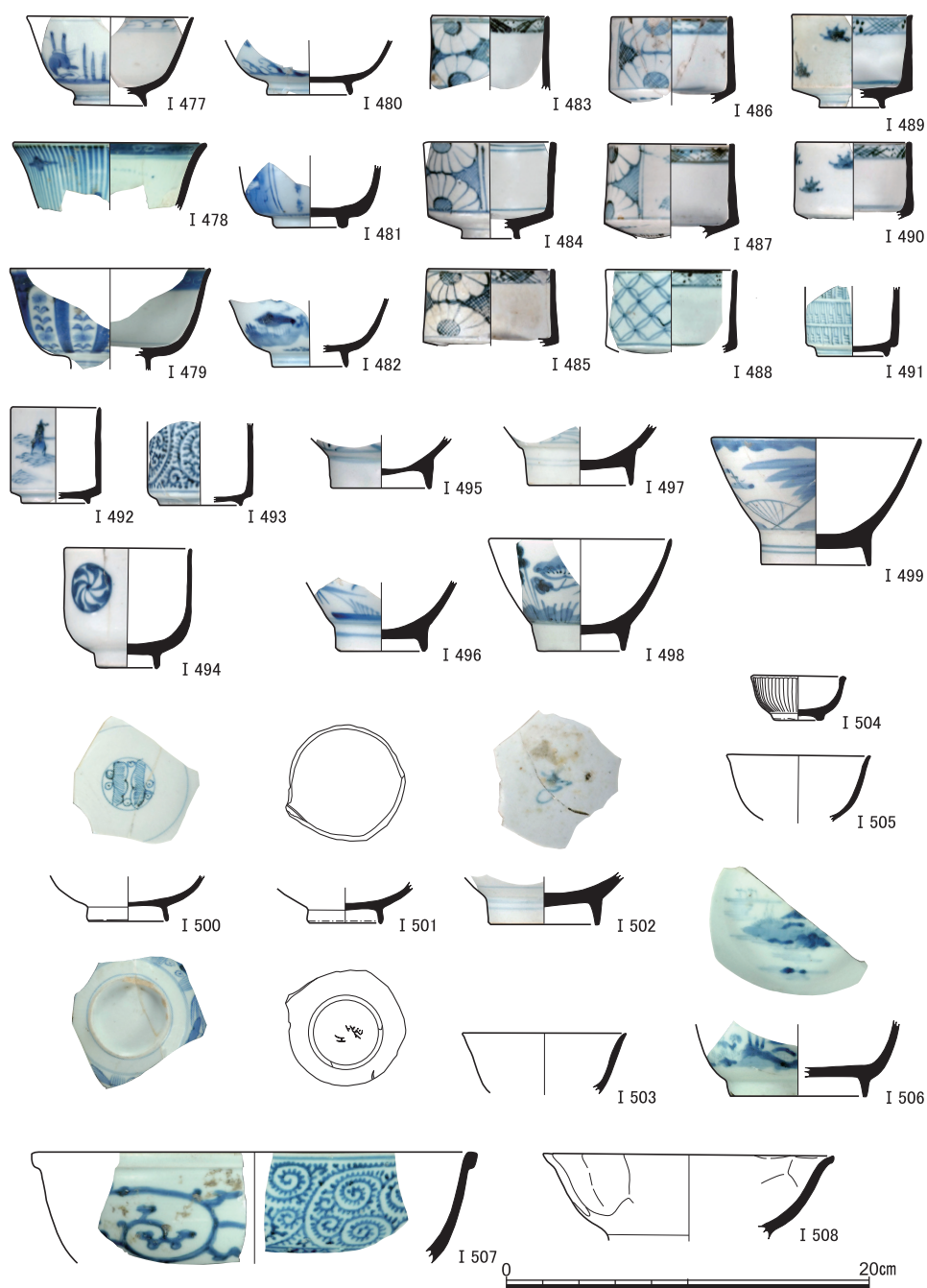


図21 S X 1 出土遺物(8) (I 477～I 508磁器)

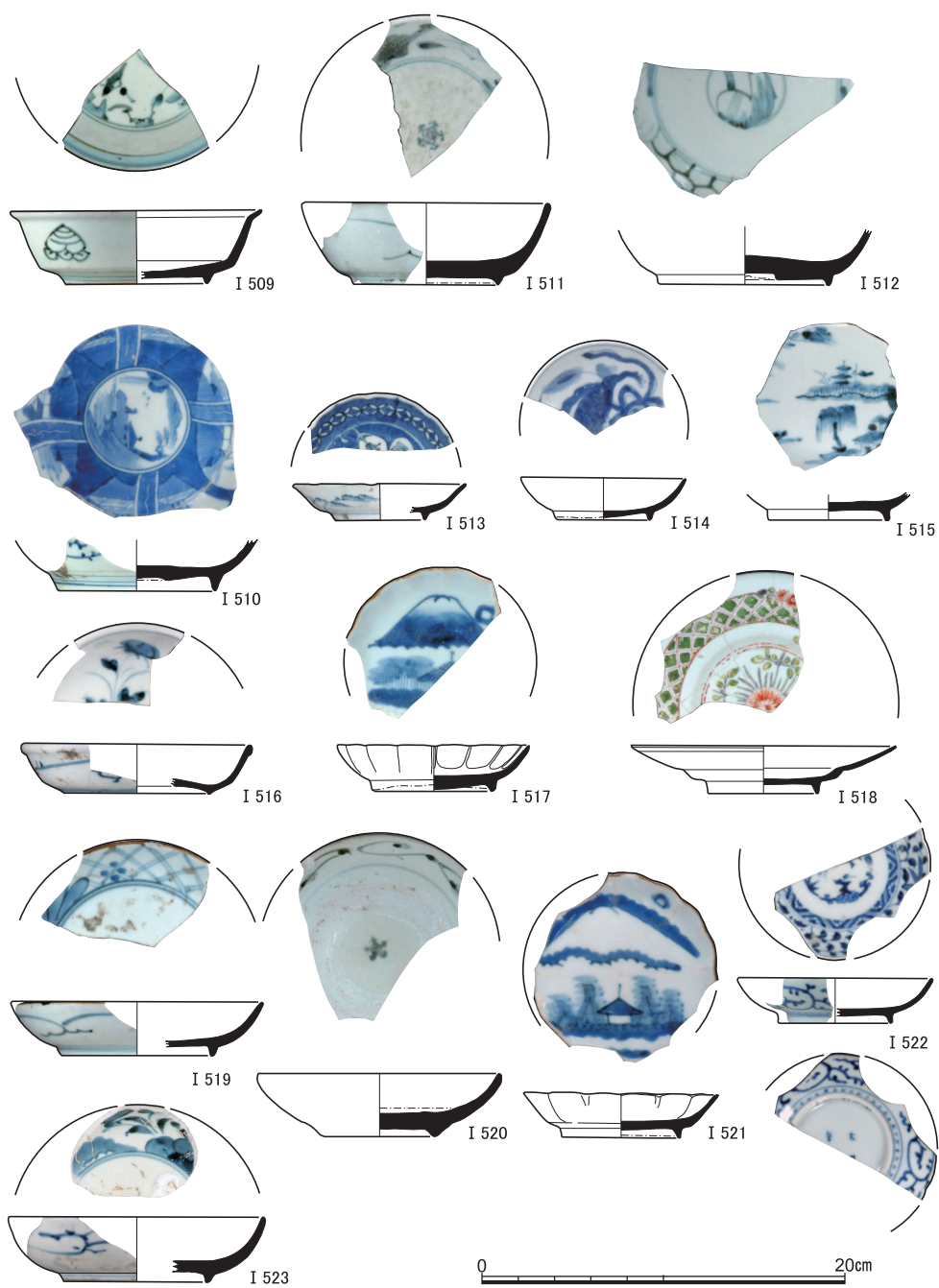


図22 S X 1 出土遺物(9) (I 509~ I 523磁器)

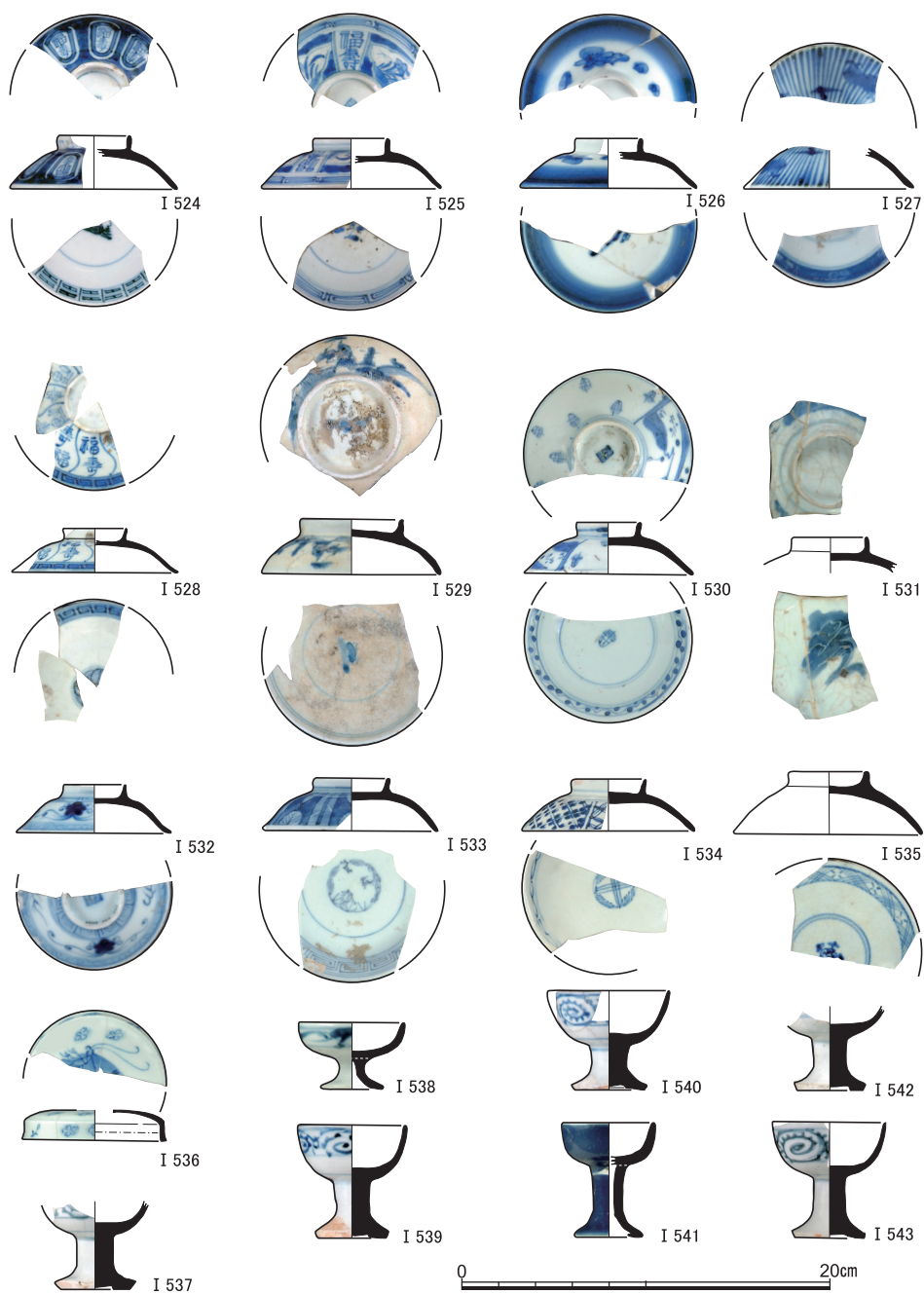


図23 SX1出土遺物(10) (I 524～I 543磁器)

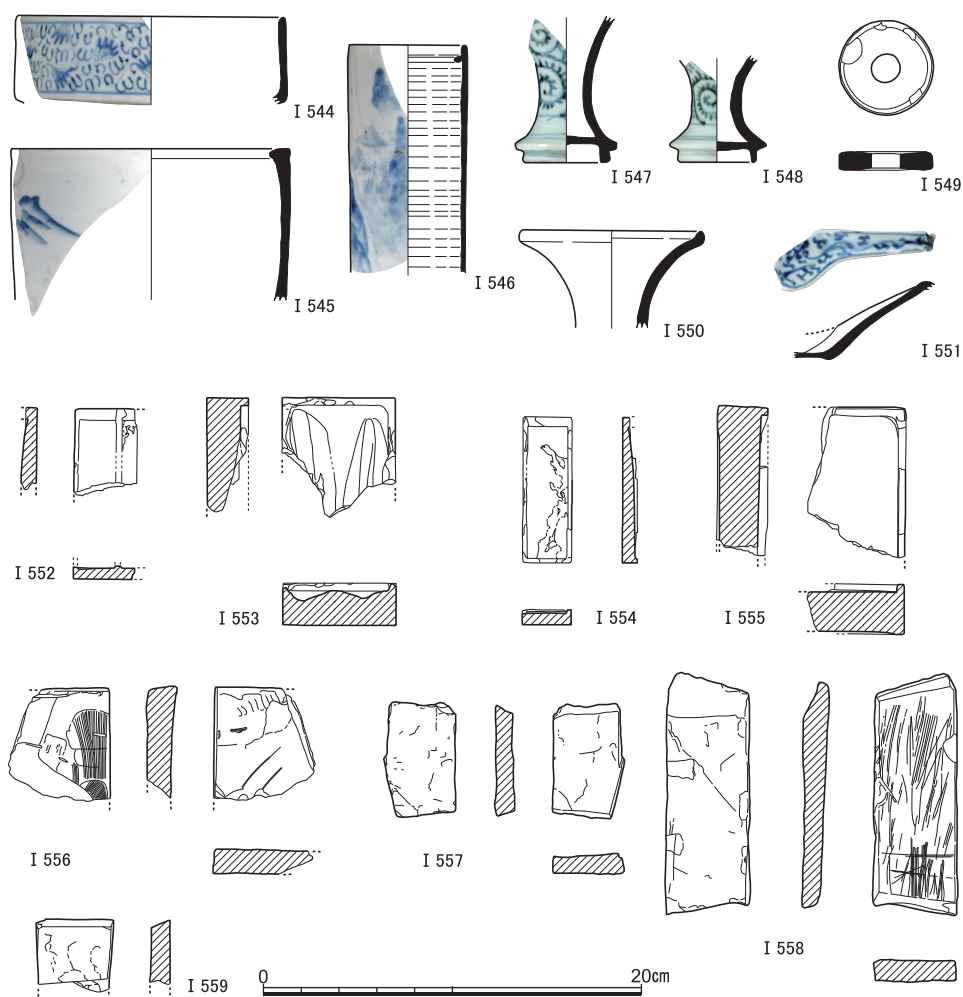


図24 S X 1 出土遺物(11) (I 544~I 551磁器, I 552~I 559石製品)

高さが12cm以上となる筒形の容器。口縁部内面に蓋を受ける突起がめぐる。内外面とも施釉し、染付で山水楼閣文を描いている。I 547・I 548は仏餉具。両例とも、蛸唐草文を施している。I 549は磁器製の戸車。直径4.9cm, 軸穴の直径1.1cm, 厚さ1cmをはかる。滑車面のみ施釉されている。I 550は青磁の仏花瓶。I 551は、染付のレンゲ。

I 552~I 555は、石製の硯。I 553は、使用による凹みが著しい。I 554は小型の硯で、幅2.6cm, 長さ7.7cm, 高さ0.8cmをはかる。I 556~I 559は砥石。

以上、S X 1 より出土した多量の遺物は、19世紀中葉、幕末頃のもの为主体を占めてお

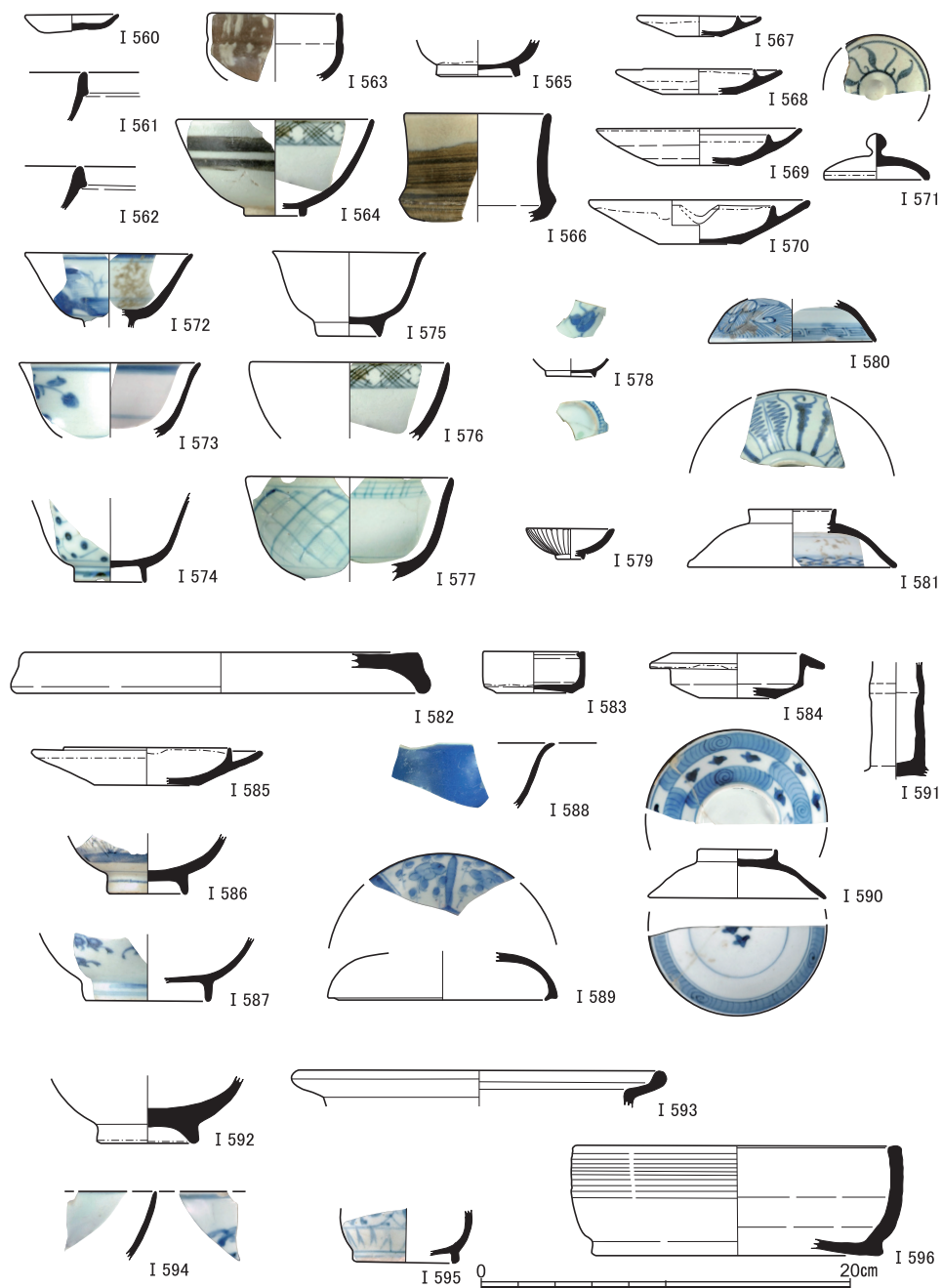


図25 S D 1 出土遺物 (I 560～I 562土師器, I 563～I 571陶器, I 572～I 581磁器), S D 2 出土遺物 (I 582土師器, I 583～I 585・I 591陶器, I 586～I 590磁器), S D 9 出土遺物 (I 592・I 593陶器, I 594・I 595磁器), S D 24 出土遺物 (I 596陶器)

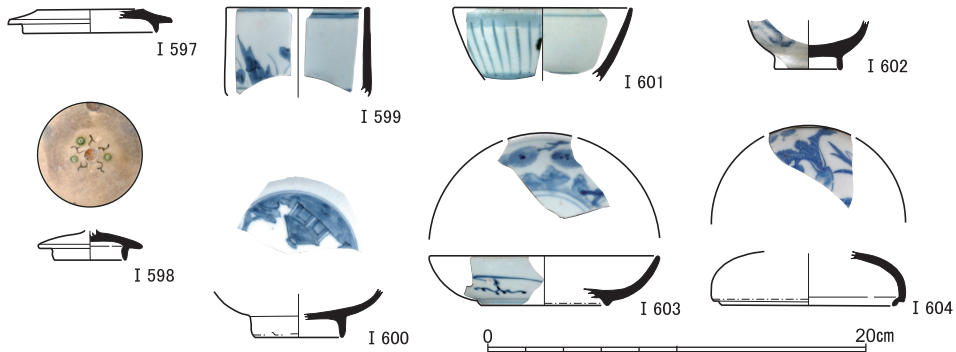


図26 SD 7 出土遺物（I 597・I 598陶器，I 599～I 604磁器）

り，明らかに明治期に下るとみられる資料は含まれていないと判断する。

SD 1 出土遺物（I 560～I 581） I 560は土師器小皿。口径5 cm。I 561・I 562は土師器炮烙。難波分類のG類。I 563～I 565は陶器碗。I 566は陶器鉢。I 567～I 570は陶器灯明受皿。I 571は陶器蓋。外面を白化粧したのち，鉄絵を施す。I 572～I 574・I 577は磁器染付の碗。端反りとなる。I 575は白磁の碗。I 576は外面に青磁釉，内面に染付を施す，いわゆる青磁染付の碗。I 578は作りがきわめて薄手の小盃。見込みと高台脇に，染付を施す。焼継している。I 579は白磁の紅皿。I 580・I 581は磁器染付，蓋碗の蓋。これらは，19世紀中葉，幕末ごろ。

SD 2 出土遺物（I 582～I 591） I 582は土師器火消し壺の蓋。内外面とも，煤が付着して黒色化している。I 583～I 585・I 591は陶器で，I 583は小型の段重，I 584は蓋，I 585は灯明受皿，I 591は黒色の釉を外面に施した線香筒である。I 586～I 590は磁器で，I 586・I 587は染付の碗，I 588はコバルト色の釉を外面全体に施した端反りの碗，I 589は染付の蓋物の蓋，I 590は染付の碗蓋で，焼継の痕跡が見られる。

SD 9 出土遺物（I 592～I 595） I 592は陶器碗で，畳付を除いて高台裏まで透明釉を施釉している。I 593は内外に鉄釉を施した陶器鍋。I 594・I 595は磁器染付碗の口縁部と底部。

SD 24 出土遺物（I 596） I 596は焼締陶器の鉢。口径18cm前後，高さ6 cmをはかる。

SD 7 出土遺物（I 597～I 604） I 597・I 598は陶器蓋。I 598は中央につまみが付くが欠失している。I 599～I 604は磁器染付で，I 599～I 602は碗，I 603は皿，I 604は蓋である。

SD 2・SD 9・SD 24・SD 7 出土遺物も19世紀中葉，幕末ごろのものである。

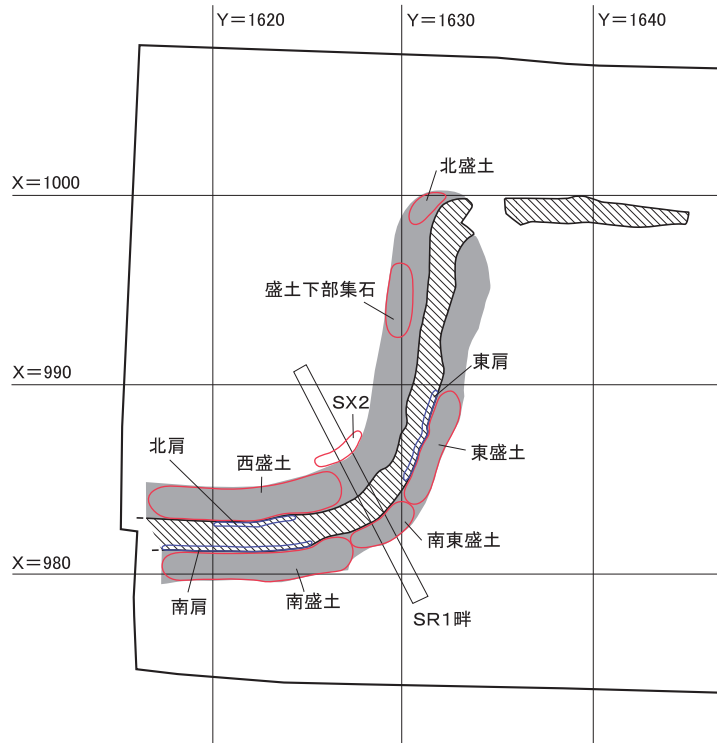


図27 SR1出土遺物の取り上げ位置 縮尺1/400

(4) 水路SR1関連遺物（図版8，図27～34）

水路SR1に関係する遺構・堆積物から出土した遺物を一括してここで解説する。大きく分けると、「盛土」と表記した水路構築時に人為的に盛られた部分から出土した資料と水路内を流れて堆積した砂礫（「埋土」と表記）から出土した遺物に区別できる。「肩付近」として取り上げた資料は、「盛土」と「埋土」が接触している付近から出土したもので、どちらに帰属させるか判断に躊躇した資料である。なお、出土地点の特定できる遺物に関しては、図27に示しておいたので、参照願いたい。

SR1盛土下部集石出土遺物（I 605～I 618） I 605～I 618は土師器皿。I 605～I 610・I 617は、見込みに圈線をもたないタイプで、I 605～I 610は口径5～6cm，I 617は口径10cmをはかる。これら以外は見込みに圈線をもつ。口径10～11cmである。I 613・I 616は口縁端部に煤が付着する。これらは、XI期新段階ごろの特徴をっており、水路SR1が17世紀後葉に構築されたことを示す遺物である。

SR1西盛土下部出土遺物（I 619） I 619は唐津系の陶器鉢。内面，白化粧掛けして

いる。

S R 1 西盛土上部出土遺物 (I 620～I 622) I 620は口径7 cmで、見込みに圈線をもたない。I 621は見込みに明瞭な圈線をもつ土師器皿で、口径12cmをはかる。I 622は陶器すり鉢。内面に、5本一組の櫛目が密に施されている。

S R 1 東盛土下部出土遺物 (I 623～I 629) I 623は口径5.6cmをはかる小型の碗で、内面に櫛状施文具による条線文が底部中央から口縁端部に向けて放射状に施されている。I 624は見込みに圈線をもつ土師器皿。I 625は口径14.2cm、器高4.6cm以上をはかる土師器碗。器壁9 mmと厚手の作りで、口縁端部を面取りしている。

I 626～I 629は陶器で、I 626・I 627は唐津系の皿、I 628・I 629は天目碗である。I 626は見込みに砂目をもつ。

S R 1 南盛土出土遺物 (I 630～I 639) I 630・I 631は口径12cmをはかる土師器皿で、I 631は口縁端部に煤が厚く付着している。I 632は土鍋。外型作りで、口縁端部から内面にかけて回転撫でで仕上げている。I 633～I 636は土釜。口縁部から体部まで残存するのはI 634のみで、I 633は体部、I 635・I 636は口縁部を欠いている。I 633は口縁部を外側に屈曲させる。口縁端部は丁寧に面取りされ、端部が内側へわずかに張り出している。I 634の口縁部はI 633と比較すると、ゆるやかに外側へ折れており、口縁部は面取りせず丸く収めている。I 637は口縁部を小波状とした青磁の鉢。I 638は磁器染付の段重。口縁端部から口縁内面の釉をかきとっている。I 639は陶器すり鉢の体部。

S R 1 南東盛土出土遺物 (I 640) I 640は陶器天目碗の底部。

S R 1 北盛土下部出土遺物 (I 641～I 643) I 641は見込みに圈線のめぐる土師器皿。I 642は陶器天目碗。I 643は唐津系の陶器碗。

S R 1 埋土下底部直下出土遺物 (I 644～I 648) S R 1 盛土が用水の流れる本体下部までおよんでいる地点があり、そこから出土した遺物である。したがって、「盛土」出土遺物と同等に扱ってよいと判断してよい。

I 644は見込みに圈線のめぐる土師器皿。I 645・I 646は陶器皿の底部。唐津系で、見込みに砂目が付着する。I 647は焼締陶器甕で、口径51cmをはかる。I 648は陶器片口。内外面に、白泥を刷毛塗りしている。

S R 1 埋土最下部出土遺物 (I 649～I 668) I 649～I 651は、見込みに圈線をもたない土師器皿。口径は、I 649が5.8cm、I 650が6 cm、I 651が7 cm。I 652は見込みに圈線がめぐる土師器皿で、口径は12cmをはかる。I 653は焼塩壺の身。外面は劣化が著しく、

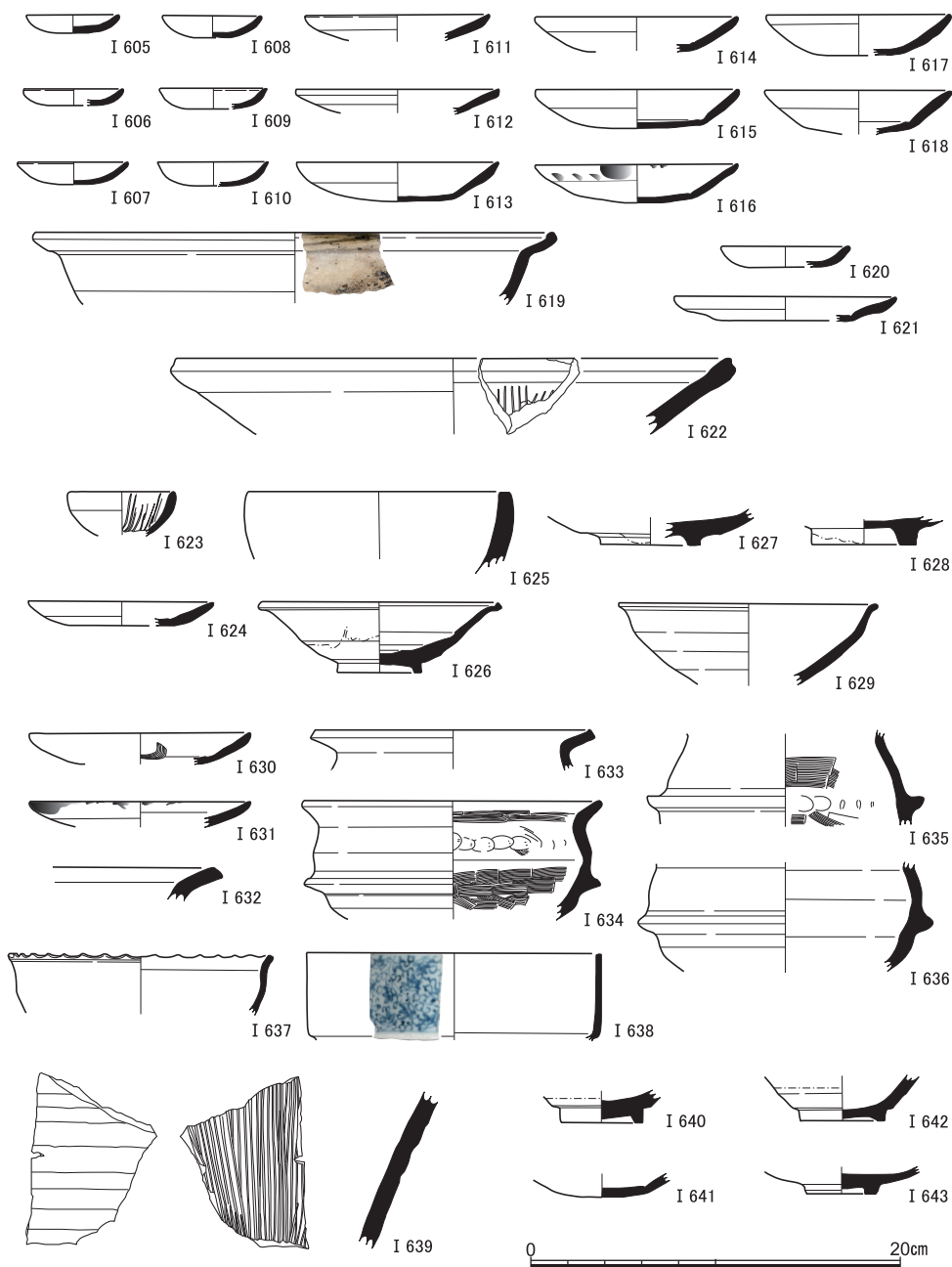


図28 盛土下部集石出土遺物 (I 605～I 618土師器), 西盛土下部出土遺物 (I 619陶器), 西盛土上部出土遺物 (I 620・I 621土師器, I 622陶器), 東盛土下部出土遺物 (I 623～I 625土師器, I 626～I 629陶器), 南盛土出土遺物 (I 630～I 639陶器), 南東盛土出土遺物 (I 640陶器), 北盛土下部出土遺物 (I 641土師器, I 642・I 643陶器)

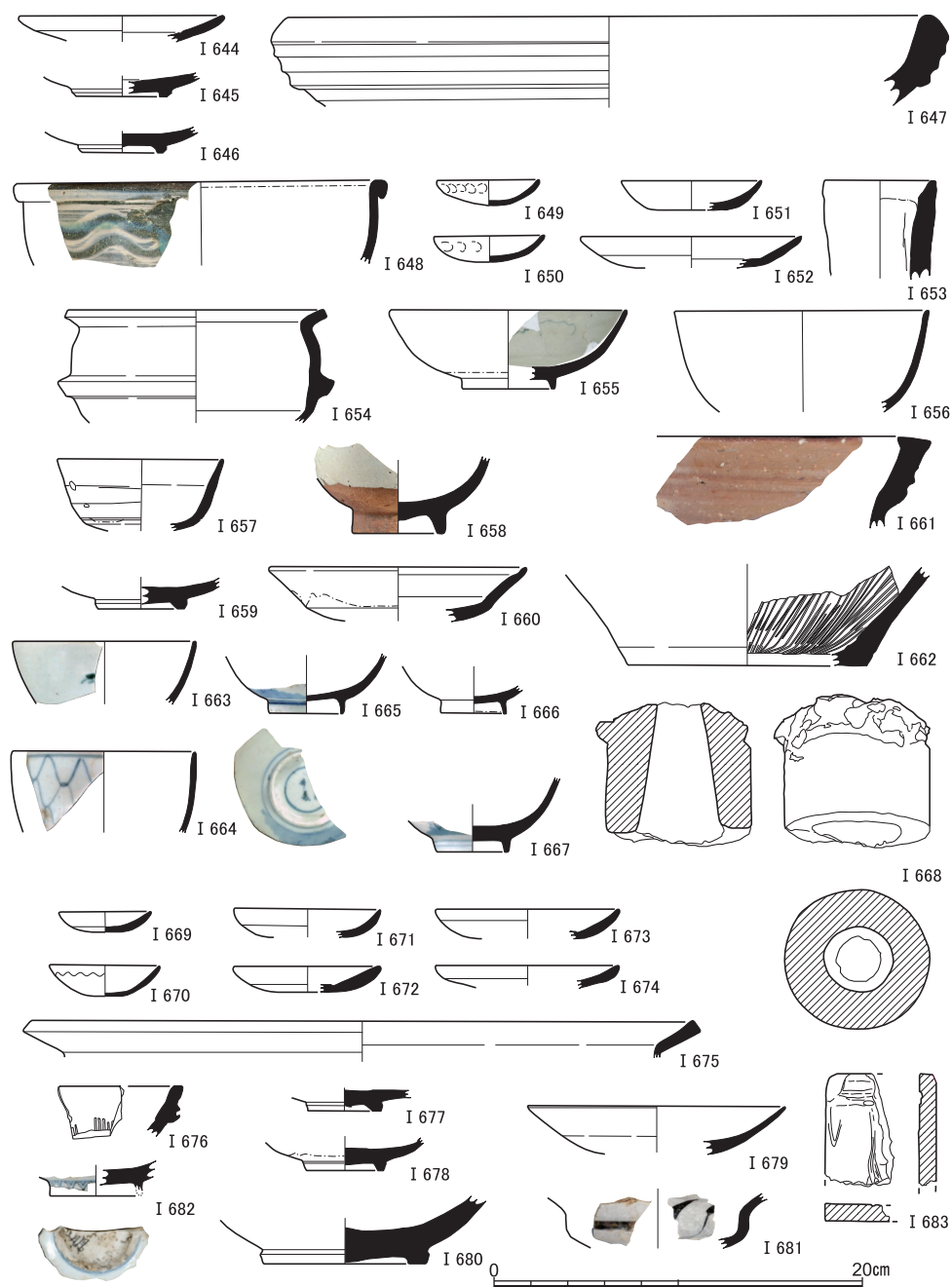


図29 S R 1埋土下底部直下出土遺物 (I 644土師器, I 645~I 648陶器), S R 1埋土最下部出土遺物 (I 649~I 654土師器, I 655~I 662陶器, I 663~I 667磁器, I 668轡羽口), S R 1埋土下部出土遺物 (I 669~I 675土師器, I 676~I 681陶器, I 682磁器, I 683石製品)

粘土板を巻き付けて成形した痕跡が内面にみられる。内面は受熱して赤変している。I 654は口径13.8cmをはかる小型の土釜。球形の体部に、外へ折れる口縁部が付き、体部中央に鐳がめぐる。外面に炭化物の付着が著しい。

I 655～I 658は陶器碗。I 655は内面に呉須で文様を描く。I 658は内面に鉄釉、外面に白釉を施釉する唐津系で、高台内に兜巾をもつ。I 659・I 660は陶器皿。ともに灰釉を施した唐津系で、I 658は見込みに砂目が付着する。I 661は焼締陶器の甕。I 662は陶器すり鉢。I 663～I 667は磁器碗で、I 666が白磁のほかは染付である。I 665は高台裏に「□□年製」の銘をもつ。

I 668は甕の羽口。炉にとりつく先端側（図では上側）は溶融している。基部側は欠失しており、現存長7.6cm、外径8cm、基部側の内径4.7cm、先端側の内径2.5cmをはかる。

S R 1 埋土下部出土遺物（I 669～I 683） I 669～I 671は見込みに圈線をもたない土師器皿。口径は、I 669が5cm、I 670が6cm、I 671が8cm。I 672～I 674は見込みに圈線をもつ土師器皿。口径は、I 672が8cm、I 673・I 674が10cm。I 675は土鍋。外へ開く口縁部のみ残存する。口縁端部から内面にかけて回転撫でで仕上げている。口径36cm前後。

I 676～I 681は陶器。I 676は信楽系のすり鉢。I 677～I 679は皿。いずれも唐津系で、I 677・I 678は見込みに砂目が付着する。I 679は見込み中央の釉を蛇の目状に剥いでいる。I 680は鉢の底部。I 681は絵唐津の鉢で、鉄釉で内外面に文様を描く。I 682は磁器染付碗の底部。高台脇を鋸歯文で飾り、高台裏には「□（大カ）明」の銘を鉄釉で記している。I 683は粘板岩製の石製品。内外面、端面ともよく摩耗しており、本来、硯であったものが、砥石として再利用されたものであろう。

S R 1 埋土中部出土遺物（I 684～I 707） I 684は見込みに圈線をもたない土師器皿。口径10cm。I 685～I 687は見込みに圈線をもつ土師器皿。口径は10～11cm。いずれも口縁端部を中心に、煤が付着している。I 688は土鍋。球胴の体部に外へ開く口縁部がつく。口縁端部から内面にかけて回転撫でで仕上げている。I 689は土師器炮烙。I 690は焼塩壺の身。身と底部とを別作りしているため、接合部分で底部が剥落している。厚さ5～6mmと華奢な作りである。

I 691は磁器染付の碗。暈付から高台内を無釉としている。I 692は陶器碗。いわゆる呉器手の碗である。I 693・I 694は陶器碗・皿の底部。I 693は唐津系で、見込みに砂目が付着する。I 694は瀬戸・美濃系で、黄白色の胎土に白釉を施している。I 695は陶器灯明皿。I 696・I 697は陶器灯明受皿。I 698は陶器水注。I 699は軟質施釉陶器。I 700は磁

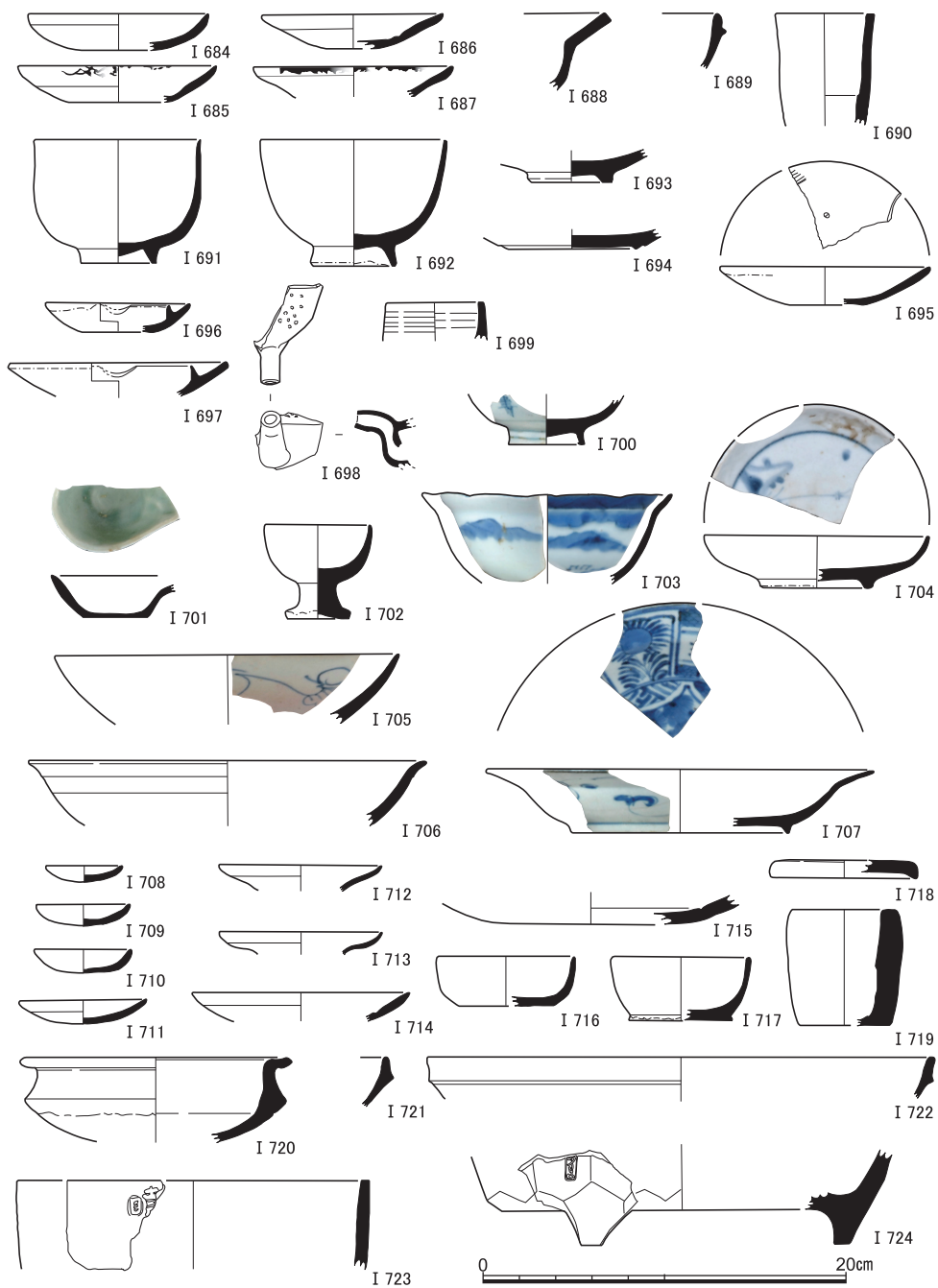


図30 S R 1 埋土中部出土遺物 (I 684 ~ I 690 土師器, I 691 ~ I 700 磁器, I 692 ~ I 698 陶器, I 699 軟質施釉陶器), S R 1 埋土上部出土遺物(1) (I 708 ~ I 724 土師器)

器染付の椀。I 701は青磁のレンゲ。型作りである。I 702は磁器染付の仏飯。I 703は磁器染付の鉢。I 704～I 707は磁器皿。I 704は見込み、I 705は内面、I 707は内外面全体に呉須で文様を描く。I 706は白磁である。

S R 1 埋土上部出土遺物 (I 708～I 795) I 708～I 715は土師器皿で、I 708～I 711は見込みに圈線をもたないタイプ、I 712～I 715は圈線をもつタイプである。I 715は口縁部を欠いているが、圈線の径が12cmをはかり、口径20cm前後になるかと思われる大型の皿で、内外面とも黒く変色している。I 709・I 714は口縁端部に煤が付着する。I 716・I 717は回転台成形の土師器椀。I 718は焼塩壺の蓋、I 719は焼塩壺の身。I 720は、算盤玉状に屈曲する体部に外へ開く口縁部がつく土師器の鉢。体部屈曲部の1cm下位で、上下を接合している痕跡が内外面に残る。体部下位は型作りによるものと考えられる。I 721・I 722は土師器炮烙。口縁部と体部の境が断面三角形状に肥厚するG類。I 723は口径19cm前後、器高5cm以上、器厚6mm前後をはかる土師器。火入れであろうか。外型作りで、外面に「晴？」の文字がみえる。I 724は土師質の涼炉ないしはコンロ。外面下部に刻印をもつ。おそらく、4文字による刻印と思われるが、第1字は欠損。第2字以下は、「かわと」であろうか。

I 725～I 732は陶器椀。I 725～I 727は煎茶椀で、I 725は切高台、I 727は内面を白化粧し、外面は白泥を縦位に刷毛塗りした上に鉄釉で宝珠文を描いている。I 726は外面に玉釉を施す。I 729は外型作りで、外面に花文の意匠をもつ。内面から、外面の胴部中位まで施釉している。I 733～I 737は陶器灯明皿。I 733・I 737は、見込みに櫛描きによる沈線文を施している。I 736は口縁部内面に菊花の貼付文をもつ。I 738～I 743は陶器灯明受皿。口径が6cm前後のもの(I 738・I 739)と11～13cm前後のもの(I 740～I 743)にわかれる。

I 744は、陶器火入れ。I 745は陶器の広口小壺。備前焼で、口縁部は受口となる。I 746は、陶器皿で、口縁部を輪花としている。青・茶・濃茶の3色を用いて、見込みおよび外面に、麦藁手の文様を描いている。I 747は白磁紅皿。I 748は鉄釉を施した陶器仏飯。I 749～I 755は陶器蓋。

I 756～I 783は磁器の椀で、I 758が白磁、I 760が見込みに赤絵をもつほかは、いずれも染付である。I 756・I 757・I 763～I 766は、口縁部が端反りとなる。I 759・I 771・I 774はコンニャク印判による文様をもつ。I 775は染付の上に、金・赤・茶を用いて上絵付けしている。I 776は外面に青磁釉を施した青磁染付。I 778・I 780はいわゆる広東椀。

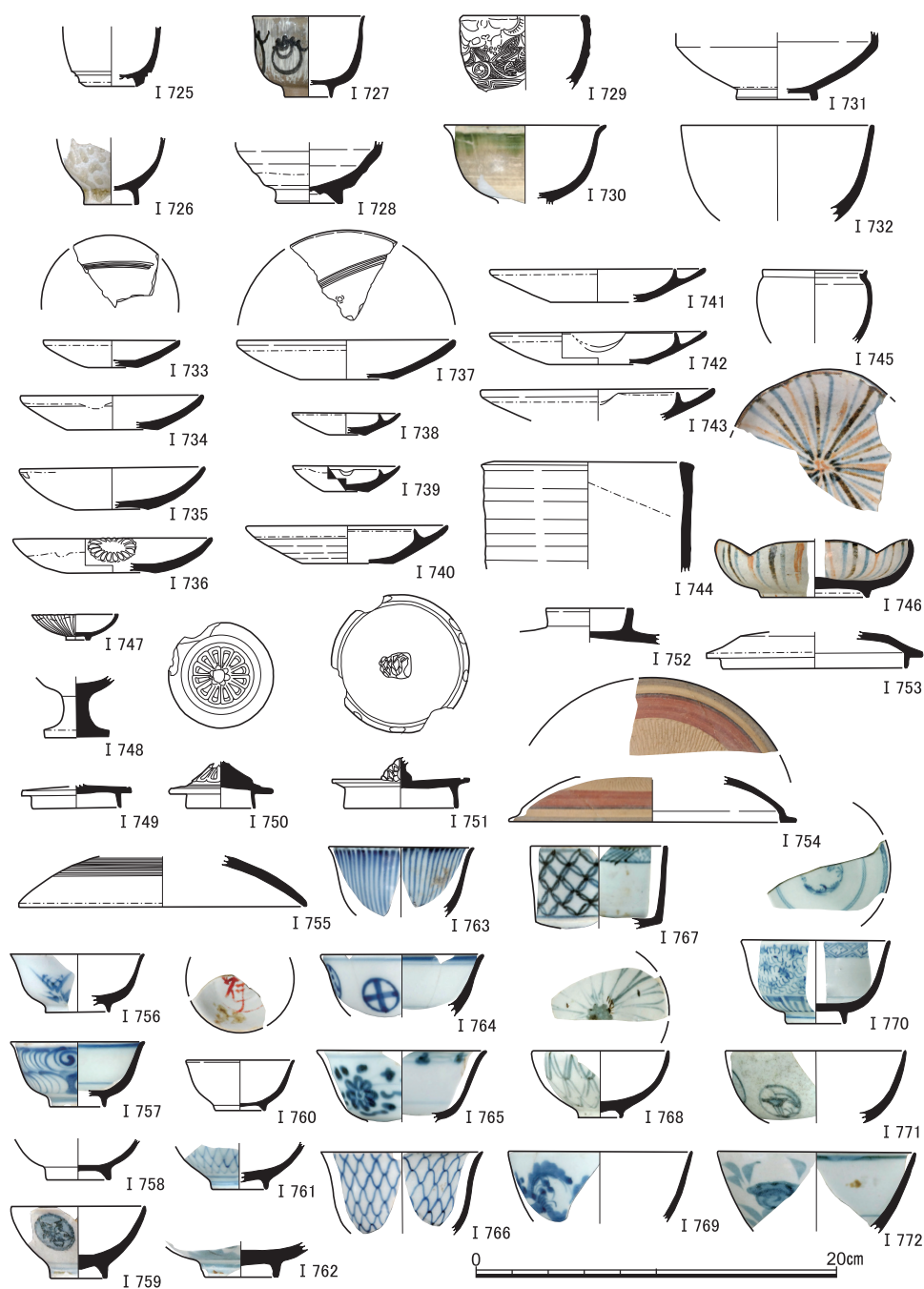


図31 SR1埋土上部出土遺物(2) (I 725～I 755陶器, I 756～I 772磁器)

I 783は上面観が8角形を呈する。高台に「○×」の連続する文様を入れている。I 784・I 785は磁器染付の上に上絵付けを施した段重。口縁端部の釉をかきとっている。I 786は磁器染付の仏飯。蛸唐草文を施している。I 787は青磁の瓶。

I 788・I 789は磁器染付の皿。I 789は高台内に、渦巻「福」の銘をもつ。I 790は上絵付けを施した磁器の小皿。全面施釉後、口縁端部のみ釉を剥ぎ、見込みに赤と緑を用いて、上絵付けしている。I 791・I 792は磁器染付の椀蓋。I 794・I 795は石製硯。

S R 1 畔埋土下部出土遺物 (I 796～I 798) I 796は見込みに圈線のめぐる土師器皿。口径12cm。I 797は焼塩壺の蓋。I 798は青磁椀。

S R 1 畔埋土上部出土遺物 (I 799～I 805) I 799は、軟質施釉陶器の椀。高台畳付けを除いて全面に施釉する。I 800は陶器の鍋蓋。I 801・I 802は陶器すり鉢。両例とも、鉄醬を全面に施釉している。I 803は、外面に青磁釉を施した染付椀。I 804は陶器灯明受皿。I 805は砥石。

S R 1 埋土上面出土遺物 (I 806～I 825) I 806・I 807は陶器皿。I 808は陶器灯明受皿。I 809は陶器灯明皿。口縁部内面に菊花の貼付文をもつ。I 810・I 811は陶器蓋。I 812は縦方向に溝を設けて凹凸を表現しており、縦長になると推定できる形態から判断して、ヘチマを模した容器ではないかと想定する。内面は無釉、外面は全体に黒褐色の鉄醬が施され、凹部に黄緑色の釉が見えるが、これが凸部までかけられていたのかは不明である。I 813は陶器鉢。I 814は陶器火入れ。口縁部内面から外面全体を白化粧したのち、口縁部に銅緑釉を施している。I 815は内外面に鉄釉を施した陶器鍋。I 816は窯道具の輪トチンであろう。

I 817～I 822は磁器染付の椀。I 820は見込みに蛇の目釉剥ぎする。I 821は、くらわんか椀。I 823は青磁椀。I 824は磁器染付の仏飯。I 825は磁器染付の皿。文様は口縁部内面のみであり、見込みは蛇の目釉剥ぎしている。

S R 1 南肩付近出土遺物 (I 826～I 829) I 826は陶器皿。高台周りを除いて、透明釉を施した後、口縁部から内面にかけて銅緑釉を施釉する。見込みは蛇の目釉剥ぎしている。I 827は磁器染付の皿。I 828・I 829は陶器すり鉢。

S R 1 北肩付近出土遺物 (I 830～I 832) I 830・I 831は陶器の椀ないしは皿。いずれも唐津系で、見込みに、I 830は砂目が3カ所、I 831は重ね焼き時の高台の跡が残っている。I 832は陶器蓋。

S R 1 東肩付近出土遺物 (I 833～I 840) I 833は見込みに圈線のめぐる土師器皿。

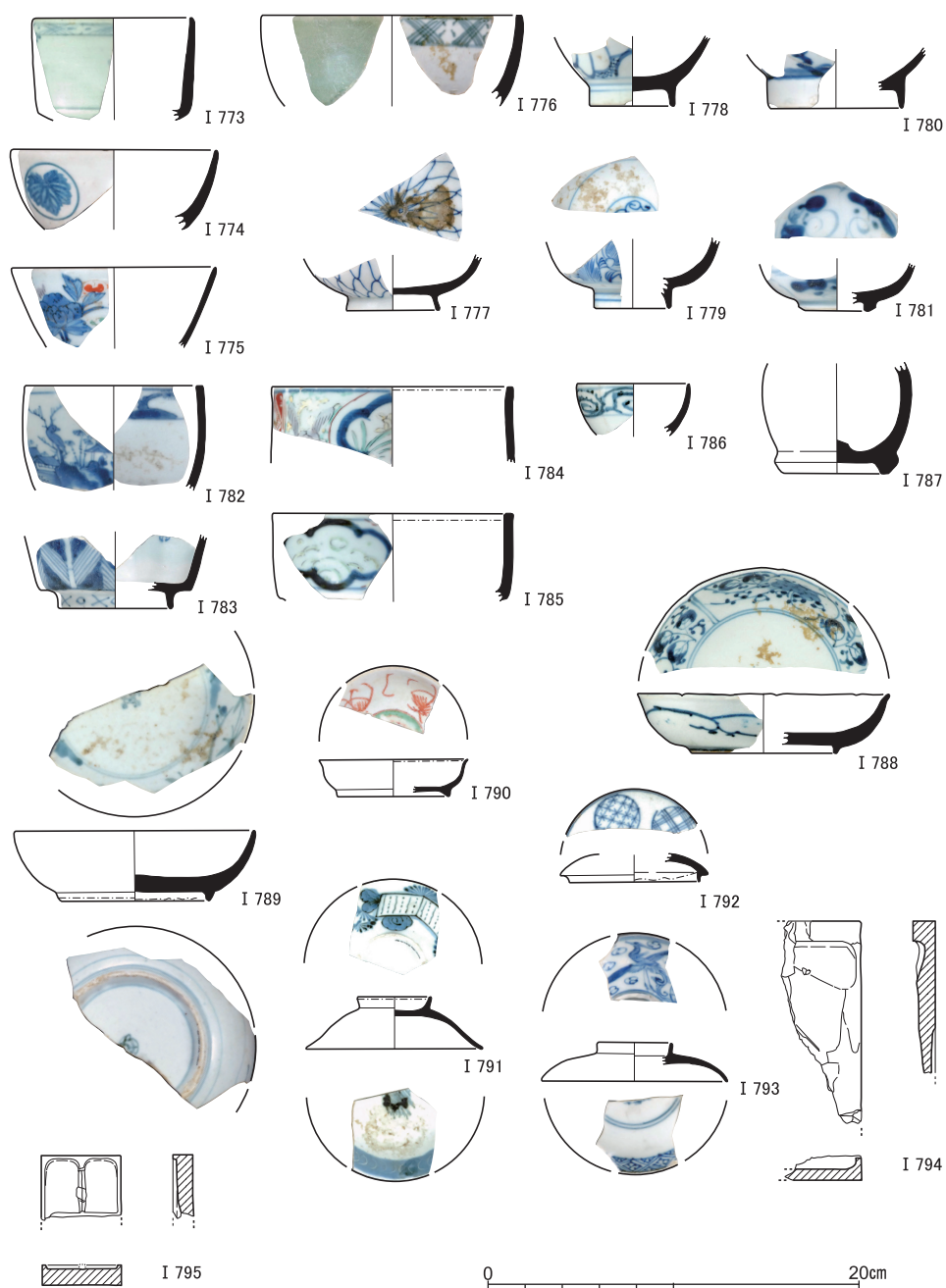


図32 S R 1 埋土上部出土遺物(3) (I 773~ I 793磁器, I 794・I 795石製品)

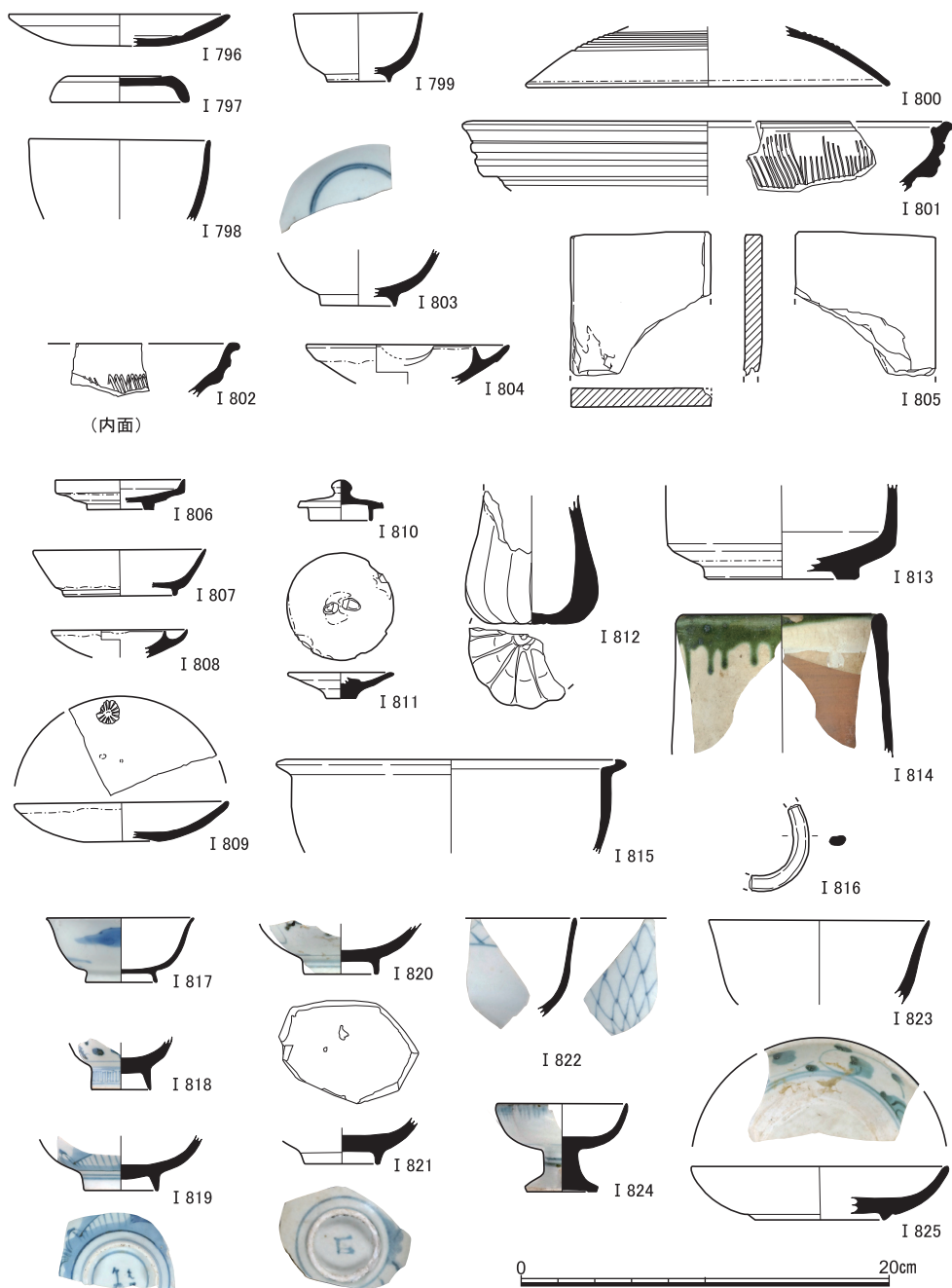


図33 S R 1 畔埋土下部出土遺物 (I 796・I 797土師器, I 798土師器), S R 1 畔埋土上部出土遺物 (I 799軟質施釉陶器, I 800～I 802・I 804陶器, I 803土師器, I 805石製品), S R 1 埋土上面出土遺物 (I 806～I 815陶器, I 816窯道具, I 817～I 825磁器)

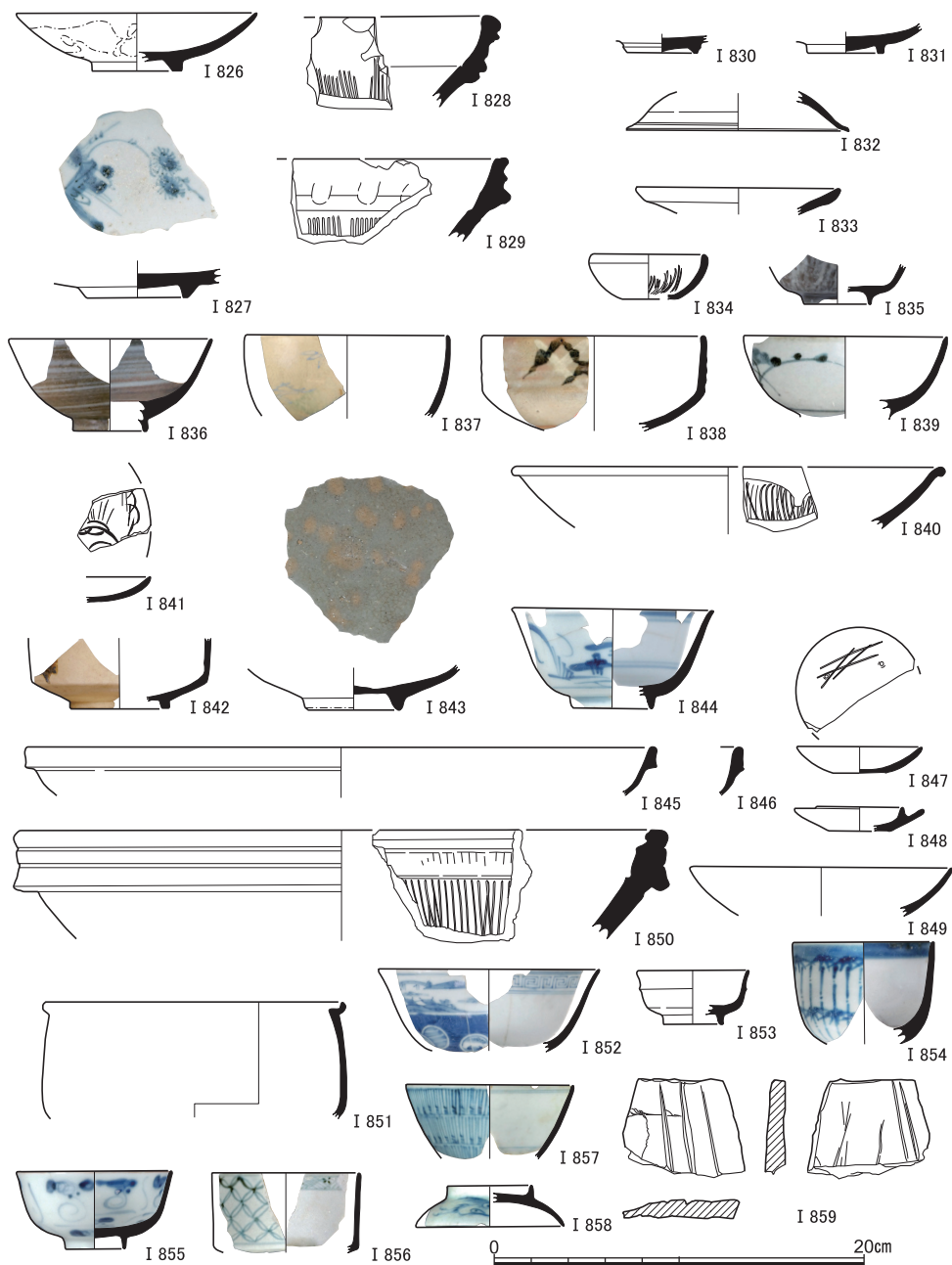


図34 S R 1 南肩付近出土遺物 (I 826～I 829陶器), S R 1 北肩付近出土遺物 (I 830～I 832陶器), S R 1 東肩付近出土遺物 (I 833・I 834土師器, I 835～I 838・I 840陶器, I 839磁器), S X 2 出土遺物 (I 841土師器, I 842・I 843陶器, I 844磁器), 黒褐色土 (S R 1 上面) 出土遺物 (I 845・I 846土師器, I 847～I 851陶器, I 852～I 858磁器, I 859石製品)

I 834は口径6 cmをはかる小型の椀で、内面に櫛状施文具による条線文が底部中央から口縁端部に向けて放射状に施文される。I 835～I 838は陶器椀。I 837は京都系で、金・青・緑を用いて上絵付けしているが、剥落が著しい。I 839は磁器染付。くわらんか椀である。I 840は陶器すり鉢。口縁部を玉縁とする。

S X 2 出土遺物 (I 841～I 844) I 841は回転台を用いて成形した土師器皿。灰白色を呈し、見込みに墨で文様が描かれている。I 842・I 843は陶器椀。I 844は磁器染付の椀。口縁部は端反りとなる。

黒褐色土 (S R 1 上面) 出土遺物 (I 845～I 859) I 845・I 846は土師器炮烙。口縁部と体部の境が断面三角形に肥厚するG類。I 847・I 849は陶器灯明皿、I 848は陶器灯明受皿。I 850は堺・明石系の陶器すり鉢。I 851は陶器行平鍋。内面は白化粧し、外面には鉄釉を施している。I 852・I 854～I 857は磁器染付の椀。I 855は口縁部を端反りで口鑄としている。I 853は白磁の小椀。I 858は磁器染付の椀蓋。I 859は砥石。両平坦面に、並行してはしる溝が数条認められる。

水路S R 1に関連する遺物のうち、盛土下部から出土した遺物は17世紀後葉ごろのものが主体を占める。また、水路内を埋積している遺物については、下半から出土した遺物は18世紀に遡るが、上部から多量に出土した遺物は、19世紀中葉のものが主体を占めている。

(5) 包含層出土遺物 (図版8, 図35～37)

砂礫出土遺物 (I 860～I 865) 遺跡の基盤をなす砂礫層から出土した遺物。I 860～I 864は土師器皿。いずれも1段撫で素縁で、I 860～I 863はD類、I 864はF類である。I 865は砥石。

淡褐色土出土遺物 (I 866～I 919) I 866～I 881は土師器皿。見込みに圈線をもつタイプ (I 866・I 867・I 869・I 870・I 873～I 876・I 878・I 880・I 881) と、もたないタイプ (I 868・I 871・I 872・I 877・I 879) があり、見込みの圈線も、体部側の不明瞭なものから、凹線状にめぐるものまで認められる。

I 882は焼塩壺の身。口径6 cm前後。粘土板を巻き付けて成形した痕跡が内面に残る。外面から口縁部内面までは撫でて仕上げている。I 883は土師器炮烙。体部が内湾し口縁部が外へ開く形態で、体部から口縁部まで外型によって成形されている。口縁端部から内面にかけて撫でて整形する。I 884～I 886は球胴の体部に鐳が付く土釜。I 884は口縁部外面、I 885・I 886は鐳下部～体部下半に、煤が厚く付着する。

I 887～I 893は陶器椀。I 887・I 890・I 893は天目椀。I 888は碁笥底で、灰白色の胎

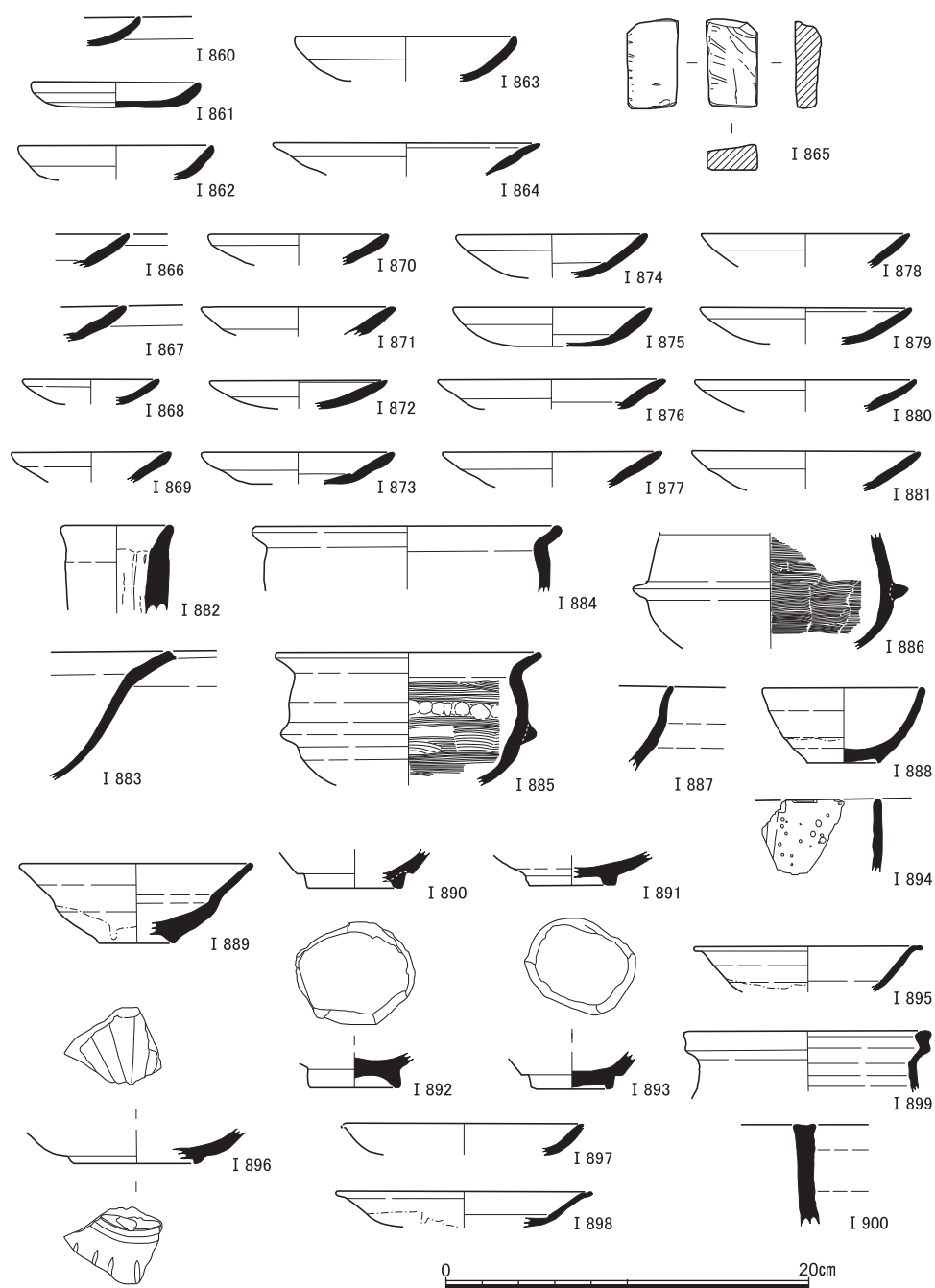


図35 砂礫出土遺物 (I 860～I 864土師器, I 865石製品), 淡褐色土出土遺物(1) (I 866～I 886土師器, I 887～I 900陶器)

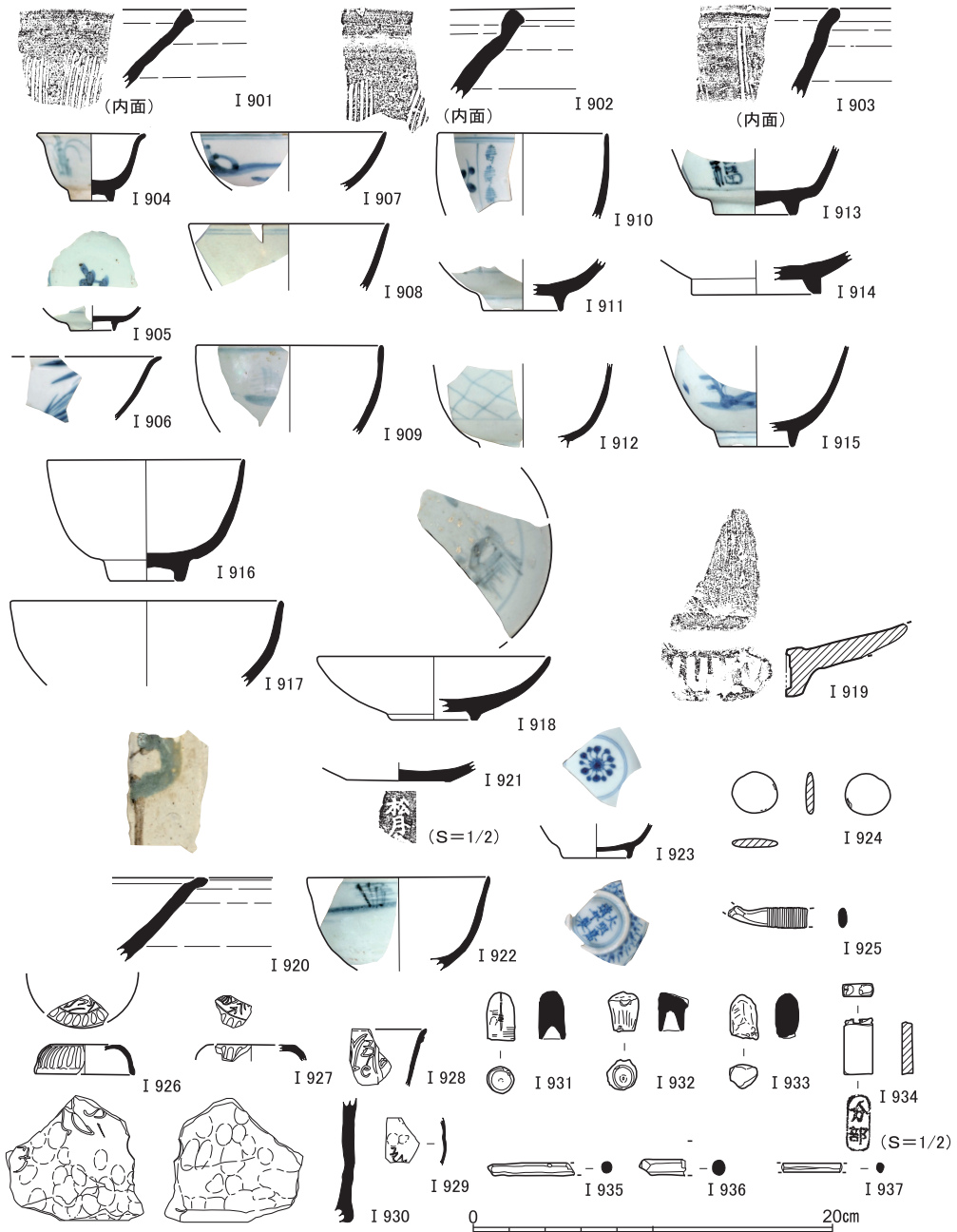


図36 淡褐色土出土遺物(2) (I 901～I 903陶器, I 904～I 918, I 919瓦), 淡褐色土上面出土遺物 (I 920陶器, I 921軟質施釉陶器, I 922磁器), 灰褐色土出土遺物 (I 923磁器, I 924石製品, I 925青銅製品), 黒褐色土出土遺物(1) (I 926・I 927白磁, I 928～I 930陶器, I 931～I 933銃弾, I 934～I 937石製品)

土に、底部付近を除いて白釉を施釉している。口径8.8cm、器高4.1cmをはかる。I 889・I 891は唐津系で、I 891は見込みに砂目の痕跡をもつ。I 894・I 895は鉢で、I 894は瀬戸・美濃系の変形鉢であろう。I 896～I 898は陶器皿。I 899・I 900は焼締陶器で、I 899は広口壺、I 900は建水。I 901～I 903は陶器すり鉢。

I 904～I 915は磁器染付の椀。I 916・I 917は青磁椀。I 918は磁器染付の皿。I 919は中世前期の剣当文軒平瓦。

淡褐色土上面出土遺物 (I 920～I 922) I 920は陶器鉢で、鉄釉と銅緑釉を用いて見込みに文様を描く。I 921は軟質施釉陶器で、底部に「松月」の刻印銘をもつ。I 922は磁器染付の椀。

灰褐色土出土遺物 (I 923～I 925) I 923は磁器染付の椀。高台裏に「大明嘉靖年製」の銘をもつ。I 924は粘板岩製の石製品で、短径2.2cm、長径2.5cmの楕円形を呈する。碁石の黒石として使われたものであろう。I 925は青銅製の煙管で、雁首の部分。煙草を詰める火皿は欠失し、全体が扁平につぶれている。

黒褐色土出土遺物 (I 926～I 938) I 926・I 927は中世の白磁合子の蓋。I 928～I 930は幕末のやきもの、連月焼である。へら描きで文字(和歌)を刻む。I 928は煎茶椀で、蓮葉を外型作りで表現した後、和歌を刻む。胎土は灰白色で、内外面とも透明釉を施している。外型作りで蓮葉を表現した煎茶椀は、本学吉田南構内の吉田二本松遺跡や東京の駒込東片町遺跡で類品が出土している〔千葉2006〕。I 929は1.5mm前後のきわめて薄い作りで、急須の体部かと思われる。内外面と指頭による整形痕が顕著に残る。I 930は土師質の涼炉。左端に、「蓮月」の「月」の一部が残存している。

I 931～I 933は鉛製の銃弾。もっとも残りのよいI 931で、直径15mm、長さ26mmをはかる。先端が丸く収まる形態で、基部には凹みがある。I 932は先端がつぶれており、使用による痕跡と判断する。周囲に溝をもつ典型的なタイプとは異なるが、ミニエー銃などに用いられたミニエー弾と理解する。

I 934は「分部」の銘をもつ滑石製の

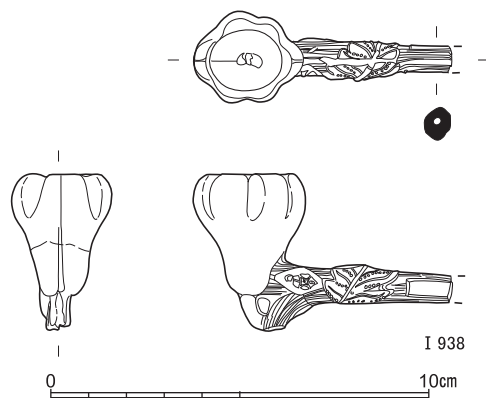


図37 黒褐色土出土遺物(2)
(I 938クレイパイプ) 縮尺1/2

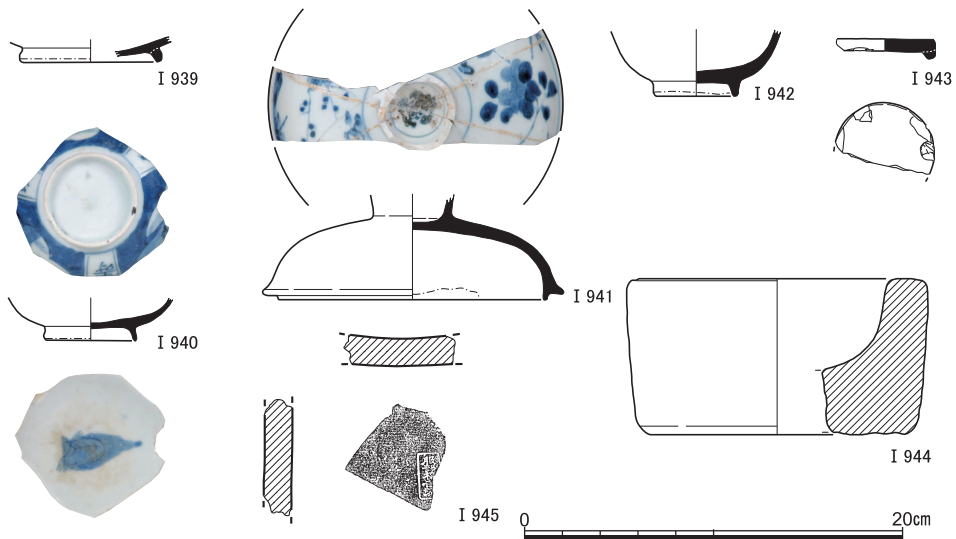


図38 表土・攪乱出土遺物（I 939灰釉陶器，I 940～I 942磁器，I 943窯道具，I 944石製品，I 945瓦）

印鑑。横6.5mm，縦16mmをはかる小型の長方形印である。印面と反対側の面に突起を2個もつが，先端が欠けている。I 935～I 937は蠟石製石筆。

I 938はクレイパイプ。吸い口部分を欠損する。ボウルと軸部が一体となった分割成形で，外型で半分ずつ成形した後，接合している。ボウルの下部には環状の突起をもち，軸部は木の葉文で飾っている。軸部のボウルと接合する部分に，工房を示すと見られるマークが認められる。

表土・攪乱出土遺物（I 939～I 944） I 939は古代（10世紀）の灰釉陶器碗。I 940・I 941は磁器染付で，I 940は碗，I 941は蓋物の蓋で焼継が見られる。I 942は磁器碗で，高台裏に「岐1.065」のマークの入る統制陶器である。I 943は円盤状を呈するトチン。残存率1/2程度で，2カ所に円錐形の脚がつく。脚は円盤部とは異なる白色の胎土を用いている。上面はやや摩耗している。I 944は容器状の石製品で，残存率5/12である。外径15.6cm，内径6cm，高さ8.2cm，中央の凹みの深さ4.8cmをはかる。内面中央は摩滅が著しく，また受熱によるのか黒変している。I 945は瓦で，凸面に「服部□□□」と読める刻印をもつ。服部までは，かろうじて判読できるが，残りの文字が2字なのか3字なのかも含めて判読できない。

遺 物

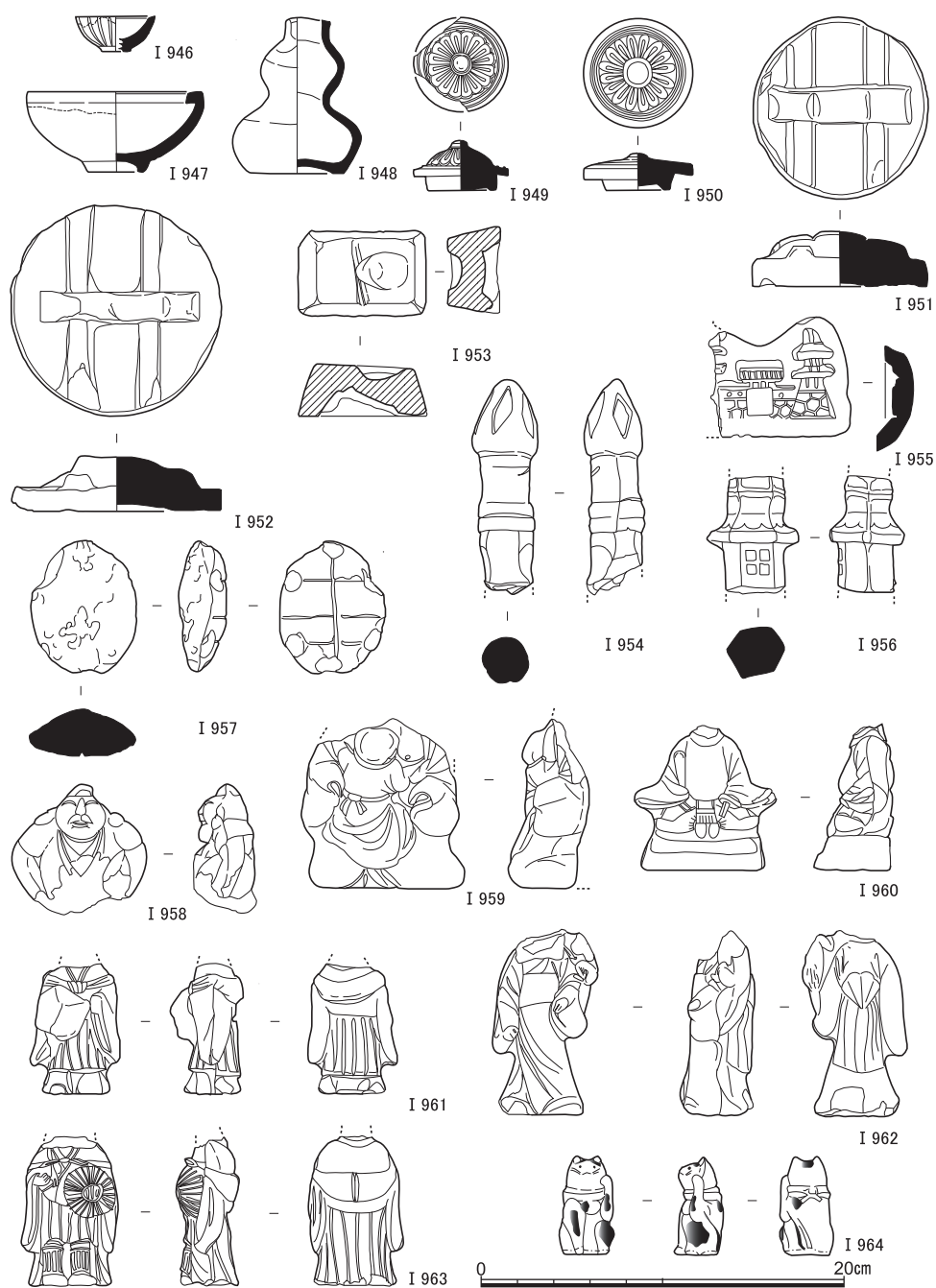


図39 土製品 縮尺1/2

(6) 土製品 (図38)

I 946～I 956はミニチュア玩具や箱庭道具の類。I 946～I 949・I 956は軟質施釉陶器で、I 946は内面、I 948は外面に透明釉、I 947は内面、I 949は外面に緑釉を施している。I 957は亀形の土師質土製品で、手足、頭部、尾部の剥落痕跡がみられる。I 958～I 963は伏見人形。I 958・I 959・I 961は土師質で、I 960・I 962・I 963は軟質施釉である。I 964は磁器製のまねき猫。赤・焦げ茶・金で上絵付けをしている。

以上の土製品の出土場所は、I 946・I 947・I 950・I 952・I 955がS R 1、I 949・I 951・I 953・I 954・I 956・I 957・I 959・I 960・I 962がS X 1、I 961がS K 23、I 958がS D 1、I 948・I 963がS E 3、I 964が灰褐色土出土である。

5 小 結

周辺地区における従来の調査成果では、病院西構内でもその西半は、①中世の安定した土壌は認められず、この地一帯が開発の対象となるのは江戸時代に入ってからである、②遺構・遺物の密度から、本格的な開発が始まるのは18世紀後半以降のことである、と考えられてきた。①については、遺跡の基盤を形成する砂礫は中世までの堆積物であることを再確認したが、②については17世紀に遡る道路・水路・井戸などを検出したことによって、従来の想定より一世紀以上早くから本格的な開発が始まっていたことが明らかになってきた。以下、これにかかわる道路遺構と水路遺構についてまとめ、小結とする。

(1) 道路遺構について

調査区北辺で東西方向に伸びる道路(S F 1-1、S F 1-2)と、道路S F 1-2から分岐し北へ伸びる道路(S F 2)を確認した。

東西方向の道路のうちもっとも古い道路(S F 1-2)は、遺跡の基盤となる砂礫直上に形成されており、この地が離水して安定化してから時間をそれほど経ずに形成されたものと想定する。出土遺物から、17世紀前半の造成が想定できる。この道路は、17世紀後半、南側に水路S R 1が造成されると、水路の北側盛土の上に移動したようである(S F 1-1)。そして、水路が洪水によって廃絶しこの地一帯が会津藩の練兵場として囲われるようになる幕末まで長期にわたって機能した。

現在、聖護院川原町と吉田下阿達町の字境界は、道路S F 1より北5 m前後の位置となっているが、今回検出した道路および水路が江戸時代の聖護院村と吉田村の字境界となっていたことは、あとで記す『吉田村古図』との比較によっても間違いない。鴨川にほど近

いこの地一帯でも、離水安定化に伴って土地の権利関係が発生し、村境を定める恒久的な道路の敷設となったのであろう。それが17世紀前半という江戸前期に遡ることは、この地一帯の開発の歴史を考える上で、重要な資料になると考える。

江戸時代の聖護院村と吉田村の字境界が発掘調査で確認できた事例としては、本調査地点から東へ400m弱離れた病院構内A H19区の発掘調査がある〔浜崎・千葉・森下1993〕。ここでは狭い範囲に集中して、東西方向に伸びる7本の溝がみつかり、このうち近世に属する溝S D 1が聖護院村と吉田村の字境界に一致していることから、この溝が字境界の道路の側溝の可能性が指摘されている。また、中世に属するS D 1以外の溝の詳細な検討から、2本の溝が白河の条坊地割の小路の一つである勘解由小路末の側溝の可能性が導かれている〔浜崎1991〕。

A H19区S D 1の詳細な年代が明らかになっていないため、今回検出した近世の道路S F 1-1、S F 1-2のどちらと対応してくるものなのかは明確ではないが、A H19区S D 1と今回検出の近世道路が一連のものであることは認めてよいであろう。なお、同様の位置をはしる中世にさかのぼる溝などは今回の調査では確認できていない。11世紀にさかのぼる白河の条坊地割はこの地まで及んでいなかったか、あるいは及んでいたとしてもその後の河川氾濫などによって失われてしまったと考えるほかはないが、前者が自然な想定であると理解する。

(2) 水路S R 1について

水路の構造と性格 水路は、2 m前後の間隔をあけて盛土（護岸）を構築し、その中央部分に水を通す構造である。盛土はこぶし大の礫を含む砂質土からなる。砂礫直上に構築しているため、地盤の安定化を図るためか、砂礫直上に集中的に礫をおいている部分も認められた。盛土上面と周囲との比高差は、50～60cm前後であり、一段低い南側・東側の盛土の脇を溝が巡ったり（S D 13）、水路から水を引いている溝（S D 1）などがみられることから、一段高い地点に水路をはしらせ、耕作地へと水を引き込んでいる状況が明らかとなった。

『山城国吉田村古図』（18世紀後半～19世紀初頭ごろ成立、本学総合博物館蔵）は、田畠一筆ごとに小字名・地番・年貢納入先・面積・名請人を記載した彩色の絵図であるが〔吉江2006〕、この絵図には出町柳付近（本調査地点から北へ約900m）の鴨川から取水し、吉田村の西辺を南流し、聖護院村との境で西に方向を変え、調査地点を経て鴨川へと排水している水路が描かれている。この地一帯の耕地開発のために人工的にもうけられた水路で

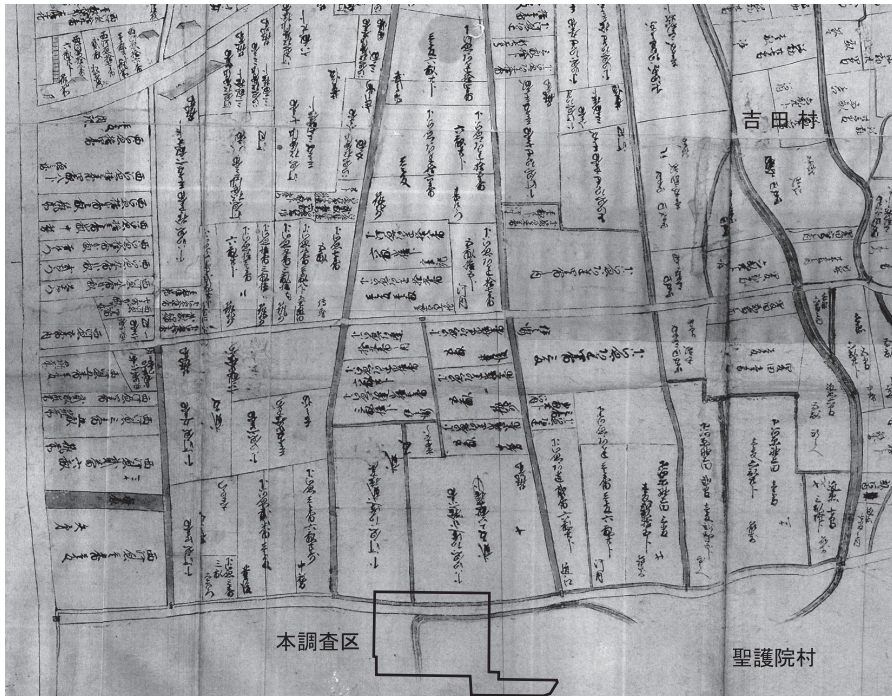


図40 『山城国吉田村古図』(部分, 南西隅) 京都大学総合博物館蔵

ある。聖護院村と吉田村の境にはこの水路に沿うように、道路も描かれている。

今回、検出した水路SR1、道路SF1が古図に描かれた水路と道路に相当するものであることは、水路がクランク状に折れ曲がる箇所や水路の北側が聖護院村と吉田村の字境界となる道路であることなど、古図の情報と発掘成果が一致することから、ほぼ間違いないとみてよい(図40)。

さらに、この水路に関係する可能性のある記録として、宝暦4(1754)年の『愛宕郡各村沿革調』がある〔京都市編1985〕。ここには、

一、用水

賀茂川筋、今出川之川原より東堤通りへ打開、御打手筋月普請御用水掛り申候。

という記事が見える。この記事に見える「用水」は、『吉田村古図』に描かれた水路であり、また発掘調査で検出した水路SR1に相当する可能性が高い。ただSR1は、次項で述べるように17世紀後葉には構築されており、18世紀中葉のこの記事とは年代的な整合性がない。SR1が幕末まで機能したこと、『吉田村古図』に描かれた水路に比定できることは動かないことから、宝暦4年の記事は、すでに存在していた水路の取水口を新たに

今出川付近の鴨川に設けたと解釈しておき、今後の検討課題としておきたい。

水路の構築年代 水路の構築された時期としては、盛土下部集石内からまともに出て出土した遺物が17世紀後葉ごろのものであることから、この頃に構築されたと理解する。17世紀後葉に水路が構築されたことに関しては、寛文9（1669）年に開始され翌年に完成した寛文新堤との関係が注目される。

寛文新堤は、鴨川の治水を目的に上賀茂から五条まで左右兩岸に新堤を築いたものである。建設の目的であった洪水防御は、その後の洪水発生回数からすると果たされなかったものの、本格的な堤防の建設によって、川幅が縮小され、それまで河川敷であった部分が人工的な土地へと変化してゆき、土地の有効利用へと導いたとされる〔吉越2006〕。

水路の南盛土を除去した後に、砂礫上面で井戸S E 13を検出しているの、水路構築以前、おそらく村境の道路S F 1－2の敷設とはほぼ同時期（17世紀前半）に、耕作用の井戸が掘削され耕地開発が始まっていたと想定する。寛文新堤建設によって鴨川左岸のこの地一帯がさらに安定化したことから、耕地開発をさらに推し進めるために水路S R 1が構築されたと考えることができるであろう。

水路の廃絶年代 水路の上部は洪水性の堆積物で一気に埋まっている。ここからは、幕末を中心とする多量の遺物が出土している。また、水路を壊して構築している廃棄土坑S X 1は、やはり幕末ごろの遺物を多量に含むものの明治期に下る明確な遺物を含まない。以上の2点から、水路は幕末に洪水によって埋まり、その機能を失なったとみてよい。

幕末ごろの京都では、弘化3（1846）年、嘉永3（1850）・5（1852）年など、鴨川にかかる橋を押し流すなど、甚大な被害を及ぼした洪水が文献に記録されている〔徳重1936、中島1983、前中・笹嶋2002〕。水路は、これらの洪水のいずれかによって埋積し、その役目を終えたと考えて大過ないであろう。

鴨川にほど近いこの地は、こうした洪水の直接的な被害を被った可能性もあり、水路の廃絶とともに、耕作地としてのそれまでの役割は減じつつあったとも考えられる。文久4（1864）年、東は鞠小路通、西は鴨川、南は丸太町通、北は近衛通あたりまでの本調査区を含む広大な土地を京都守護職（会津藩主）松平容保が練兵場として用地を取得できたのは、御所に近いという地の利は当然のことながら、この地一帯が荒蕪地化しつつあって利用しやすかったという点も考慮にいれてよいのではないだろうか。

慶応4（1868）年には官軍によって接収され河東練兵場となり、明治4（1871）年には京都府から国に対して還付申請がなされた。翌明治5（1870）年、京都府によって用地買

収がなされ、「京都牧畜場」と呼ばれる全国初の官営牧畜場が誕生した〔拝師2005〕。京都大学病院西構内でのみ検出される長方形土坑群は明治初年ごろという年代から推して、その用途・機能は依然として明確になっていないものの、この官営牧畜場に関連する遺構である可能性が高い。そして、明治35（1902）年には京都大学附属病院の敷地へと土地利用形態をかえて、現在に至るのである。

現地調査と整理作業は、千葉豊が担当し、長尾玲が補佐した。測量や出土資料の整理などにあたっては、下坂澄子・河野葵・曾根茂・高野紗奈江・泉直人・藤田和子・田中亮・貴志真生也・高原洋子の助力を得た。本章は、第3節を長尾、それ以外を千葉が執筆し、両名で調整をおこなった。

なお、『山城国吉田村古図』の掲載にあたって、本学総合博物館のご許可をいただき、また近世の出土遺物に関して、平尾政幸氏（京都市埋蔵文化財研究所）より有益なご教示をいただいた。末尾ながら記して、お礼申し上げます。